
Muv_Luv for Answer

秋永

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M u v | L u v f o r A n s w e r

【Nコード】

N 6 5 8 9 I

【作者名】

秋永

【あらすじ】

愛と勇気のお伽話に何の為に戦うのか答えを探す物語が入り込んだようです

作者たまに自分で何してるか解らなくて一話分ごっそり差し替える時があります

タイトル変更しましたスイマセン

エピソード01 ・戦前の戯れ ・(前書き)

ちよつと、手直し。

本当にスイマセン!!! (m_____) m

納得のいく物を書きたいのでたまにはあるかも知れませんが

エピソード01 - 戦前の戯れ -

一回目は唯、流されるままに戦い、真実を知らずに死んだ

二回目は、真実を知り、己の行動に絶望し、八つ当たりのように全て壊した

そして…三回目は…

「本当に良いのか？」

「しょうがないさ…いくら相手がウィン・D・ファンションとはいえ逃げるわけには行かないんだからさ」

「しかし、今のお前で勝てるかどうかは」

「だけど…けれども、どちらが強いかはハッキリさせたいし…それに彼女は俺が行かなくてもあそこで…クラニウムで待っていると思うし。」

まあ、デートの誘いを受けたと思えば気は軽いよ？」

「余裕だな…私が誘っても見向きもせんくせに」

「なっ?!、先生は…その恋人というより親のほうg」年増のババアは嫌ってか?」ちがうってにっ!」

俺がORCAに所属するようになって一年足らずで世界は劇的に変わってしまった。

凌ぎを削り合っていたリンクス達はその大半が死に絶え、企業はA

Fを含むその戦力を大きく失っていた：俺のせいだけどころ同期の友は皆死んでしまい、俺の「ストレイド」はアンサーとの戦闘で勝ちはしたがで中破し、修理不可を言い渡されてしまいで今やラインアークから提供されたホワイト・グリントのパーツでその大半を構成されていた。

ジエネレータやFCSなどの内装は生きていたからまだ良かったが全滅していたら目も当てられないだろう。

しかしなんだ、ホワイト・グリントって『可変』するから結構スキだったりする

何故か俺のAMS特性は高い訳ではないのだけど二、三度シュミレーションしただけで手足のように、それこそストレイドの頃より上手く扱える気がする。

「おい、聞いているのか？ 十代はそんなに嫌か？それとも、私にアイツに足りない何かあるっていうのか?!」

無理だ：某空気男より質悪いスイッチ入った

「そうじゃなくて、俺は親愛はあっても情愛は抱けないって言うてるんです！大体、何年一緒に居ると思ってるんですか。」

「くっ、やはり近づきすぎたか？しかし、困っておかないとどこの雌豚に私の夜鷹を（ブツブツ…イッソ、コロスカ…ブツブツ）…」

「きいてねえし、この人…？orz」

「フン、話は今は後だ。それよりも『アルテリア・クラニウム襲撃』の準備をするぞっ!」

「…ウス（逃げた…自分でキケンな思考陥ったの自覚して強引にぶ

つ切りやがったこの人」

02に続く

エピソード02 前編【山猫達の戯れ】（前書き）

ふう… ACSLの販売を明日に控えて、いい年で眠れないぜ。

ダチ公にアセンブリの内容を再現してもらってるから次回更新には主人公のアセンブリが晒せそうです。

さあ、始めようか…（・・・）キリッ

エピソード02 前編【山猫達の戯れ】

『ミッション開始、アルテリア・クラニウムを制圧する
享受しろよ…おまえの答えを』

アルテリアは、人々を乗せた滅びの揺り籠【クレイドル】を維持するエネルギーを地上で生産している大規模コジマリアクターを稼働させている施設だ。

クラニウムなんかはいいが場所によっては滲み出るコジマ粒子により機体が蝕まれる

一度、数少ない同い年の友人のハリとアルテリアのエネルギー供給方法について話し合っていたら興味深そうなメルツエルが

「まあ、ようは月にある施設からエネルギーを貰ってとんでもない砲撃をする機動兵器と一緒に原理だ」

と教えてくれてハリと変に納得した気がする

…もう、現実逃避はやめよう。

『お客さんだぜ、ウィンディ』

『…ぜだ。』

『ウィン d 何故、貴様が来たっ！』ウィンディさん？』

「いや、依頼だからね？冷静に考えようよ」

『そういう事を聞いているんじゃない！私は何故依頼を受けたかを聞いてんだっ！！』

『無茶言ってるなよ…いくらアイツがおまうん』うるさい、少し

黙ってくれ』はい…スイマセン』

「まあ、自分の理想の為かな…これ以上の言葉は不要だろうよ。ウイン・D・ファンシヨン？」

『くつ、いいだろう。こうなれば、死なない程度になぶつて貴様を私のモノ…』

『キサマら、いい気なモノだな…さつさと戦えっ!!』

「了解、ミッションを開始する」

こいつらは、【ふ、言葉は不要か…】という渋い名言を知らないのか？

あれだけで大体の事が片が付くと思うのにさ…

まあ、知らなくて当然かね…あれ自体俺の【知識】みたいなモノだからしょうがないかもしれないけど…

『『「さあ、はじめようか。殺し会いをっ!!」』』

飛び交う弾丸、弾ける壁だった物

アルテリア・クラニウムはもはやボロボロになっており、その被害は尋常ではなかった…原因は主にレイテルパラッシュだが

『くつ、ちょこまかと…』

『なんなんだ、この速さ…たまたにFCSを振り切るぞっ!!』

「悪いが、二人とも。なんか、このまま帰ってもミッション成功な気がして来たよ」

「まあ、気が済むまでお相手しようだがウィンディ、オメーは駄目だ。」

アルドラのグレネードが破壊的加速で打ち出され…

『ネクスト、レイテルパラッシュの撃破を確認。残りは一人だ、畳んでしまえ』

『はっ、舐めらめたモノだな…やれるならやってみな』ドオゴオンツ…!』…くそ、最後まで言わせやがれこのガキ…』

またしても、グレネードによる留め。

流石にアサルト二丁とプラズマで削っただけの事はある

…皆やるよね？台詞前の撃破

「ミッション成功…か？グレネードは施設破壊にもってきたのだけど必要ないよなコレ…」

その目の前には破壊の限りを尽くされたクラニウムとAFジェット、そしてまともに台詞が言えなかったオツツアダルヴァを含む三機のネクストのスクラップ

『ミッションの成功を確認…いや待て、クラニウムにおいて高濃度コジマ収縮を確認っ?!まさか、AAか…すぐにそこを離脱しろっ!…!』

大規模コジマ施設であるアルテリアでトンデモ戦闘をそうなるわ…ゲームじゃあるまいし企業も粉碎者みたいなガキを放置したくない

だろうがまさか自爆だとは、何と言う大盤振る舞い。

おまけに最後の生活基盤を兵器に事前に改造とは…唯ではやられる気はないとはあっぱれだよ。多分、これが最後のループ。なかなか、楽しめたよ。前の世界みたいに新婚みたいな幼なじみ二人とかの顔を拝めないの少々残念だがいいか

それに…

「高濃度コジマ粒子のせいでP Aが展開できない。これじゃあ、O BはおるかQ Bも使えそうも無いな…いやあ、中々な死に場所じゃないか？アルテリアってまたマニアックなb」ふざけるなっ！逃げる努力をしてる」…あ」

エピソード02 前編【山猫達の戯れ】（後書き）

緑の壁が全てを破壊した。

後編に続く

後書き

騙して悪いがここまでが小説なんだよ！！

詳しい、主人公の設定は後編にて明かされる。まあ、勘の良い人はわかるだろうけど

次回はちよっとみじかめ

エピソード02 後編【因果の戯れ】（前書き）

大学受験…合格しましたっ！！

先生っ、俺…俺やりました！

これからは執筆に割ける時間が増えて更新速度がモアからタンクA
Cばりに早くなると…思う

エピソード02 後編【因果の戯れ】

く????

「ぬっ、何処だよ…ここ」

また死んだか、今度は企業に殺されるとは…意外と天敵の頃とさほど扱いの変化がないな…それにしてもここは…

「自分の部屋…何だが、なんか違うn」やあ、起きたかい？」
「なん
で、野郎がいんだよ？」

そこには、何故か何処かの軍服をきた歳老いたならきつと、こんな
ナイスミドルになりたい理想の姿がいた。

「早速だけど、君に依頼があるんだ」

「依頼？、でもその前に質問に答えてくれ」

「いいよ、答えられる範囲なら。でも、ちんたらしてられないから
二つまでね」

急いでるのに二つとか良心的だなコイツ

「まずは一つ目、おまえは【誰だ】？それが解らない事には依頼な
んととてめじゃないけど受けられなのだけだ」

「それもそうだよな。まず、僕は誰かといったら…もう一人の君…
かな？」

「そう…じゃあ二つ目、依頼はなんだ？」

「スルー？僕について突っ込まないのかい？もしかしたら」「時間がないんだろう？」「…さすが、僕だ。良く解っている。」

俺なら良く解らない事言つて煙に巻くに違いない

「褒めるなよ」

「照れるなよ。まあ、依頼の内容は至つて簡単。けりを付けてほしいんだ、全てに」

「…は？けりを付ける？意図が解らないんだけど」

「元々はあの馬鹿が鈍感過ぎるからいけないんだけど原因が僕になかった訳じゃないからしょうがないかどうかではかなり釈だけど」

「まあ…で、報酬は？何を対価にお前は出せるんだ」

「ん…自己満足？」

は？コイツ何を…

「別に良いじゃない、君は最強の状態から【奴ら】に対抗出来るんだしさ？」

「いや、意味解らんs「それにつ！」「？」

「君も男なら黙つてられないと思うよ？何、君もすぐに適應するよ」

「ちよ、待てっ！？話h…」

暗転する世界

S I D E : ? ? ? ?

最強の憲兵は壁を越えたか…まあ、元は一つだったんだ。呼び込めないほど弱った覚えはないんだけど

ドミナントである【彼】なら壊れた世界から人々を救い出してくれるかもしれない
でも所詮は個人、保険は重要だよ

『もう、よろしいですか？』

ああ、構わないよ。彼等のサルベージは既に終了して転送は終わっている

進まない話を無理に進めるために僕の因果を使って彼等を一人にしたがそれがいけなかった

奴らはそれに対抗して対因果導体兵器をわざわざ【終わった後】に導入しやがった

おまけに盛大な意趣返しを含めて…

でも、おかげで僕…いや、彼をこの世界に召喚出来た
もう、思い残す事はない

『ただいまから、貴方と彼の因果を元の姿に戻す作業を開始します。しかし、本来の数値より失っている分能力は下方修正されると思います』

構わない、すまないな…

『いえ、面白そうでしたから』

あらっ?! まあ、いいか

すまないな、こんな真似させて

『愛する貴方の為ですから』

そうか…なんか、眠いな。お休み【マキナ】

『はい、お休み…疾風』

エピソード02 後編【因果の戯れ】（後書き）

意味解らん？

まあ、頑張つて伏線回収するよ！！

これでスーパー水没タイムが出来る…

あ、ネタバレしちゃった。

まあ、原因ブレイクは当時の予定からあったので何処から変えるのか+(0.0.0.0)+ワクテカ+しながらお待ちしやがれ野郎共と

感想でこうしたほうが良いとかタグにコレ足りないとか何なりと思
う仕付けください。Overkill以外は受け取ります

第一匹 【奴らとの戯れ】（前書き）

戦闘描写ができない：orz

もう、気分は戦車級に喰われそうな歩兵気分だぜ
ちよっと、よそ様で勉強します（．．）

第一匹 【奴らとの戯れ】

A r e a ？？？

「どことだよ…」

ナイスミドルに飛ばされたら若干とろみがある液体の中で寝ていた何をいつてるのかわかん（以下、修正力で削除

『…ける…やん…』

「？声？、こんな陰険引きこもりしかいなさそうな所に誰か…まあ、いるっちゃいるか…俺が」

最近…三回目からどうもネタに走る癖が付いたようでなんか面白い事言わないと気が済まない性質になっちゃった

まあ、

よく聞こえなかったし耳をすm…

『タケルちゃんタケルちゃんタケルちゃんタケルちゃんタケルちゃんタケルちゃんタケルちゃんタケルちゃんタケルちゃんタケルちゃんタケルちゃんタケルちゃんタケルちゃんタケルちゃんタケルちゃんタケルちゃんタケルちゃんタケルちゃん（以下無限ループ）』

「うるせえ！！耳が汚染されるっ！そこか？！そこにいる女だな、試験管に浮かんでる女だな！！」

俺はよく訓練された試験管ベイビィだからこの程度ではおどろかねえ

断じて、今ネクストに乗っていて安心しているだけでは無い…断じてだ

「たくつ、意外と柔らかいな…お？簡単に裂けた。これなら…よつと」

ネクストを足場にしもっていたナイフで器用に裂いていき中から五月蠅いヤンデレ？女を救出する
それにしてもこの部屋…

「脳みそだからだ…もしかしたらコイツも…（ギリ助けられたかもしれないし無かったかもしれない。まあ、遺体はあるだけでも違うっというし）」

リンクスを…戦争屋をやっているとそういつた事はいやでも考える羽目になるし一度…二度目に考えすぎて人類滅亡させちゃったしさいごなんだっけな？たしか…

「思い出した、【粉碎者】ってよばれてたんだっけな…懐かしいな」
根暗な穴蔵を歩いて進む

通常ブーストでもネクストはとんでもない速さで突き進む
だから、歩くしかないのだが…

「気持ちが悪い?!、気色悪いじゃなくて気持ちが悪いだっ!?!」
さつきから見ただけで殺意が出て来るナマモノが攻撃してくる…
コイツら…駄目だ夢にでてきそうだよ

『くそっ、どれだけいるんだコイツら!?!』

人間がイタ!!

＼Side ヘタレ＼

「くそつ、どれだけいるんだコイツら!!」

『ほら、文句いう暇あったら平らげろ!!』

『ヴァルキリー・マムからヴァルキリー各機へ、付近に所属不明機のマーカーを確認。注意して』

「忙しい時に…しまつ?!」

俺の機体に要撃級に届きそうになった時…

ドウウオオオンツ!!

世界の越えて、粉碎者は現れた

＼Side Out＼

＼Side Links＼

「油断大敵つての…おい、そこの…無事か?」

『すまない、助かった…』

『この馬鹿、見ず知らずの奴に迷惑をかけてんじゃないのよ』

何この余裕？いや、寧ろ労力すら惜しいってか？

『済まないが、所属を教えて貰えないか？機密部隊ゆえに大した事は出来ないが報告位は必要なのでな』

やつべ、ここを何処かは知らんがORCAってばれたらいらぬ戦いに成り兼ねない。それにこっちは…

「残念ながらこちららも機密部隊つというより新型機のテストでな…それより先程、民間人の少女を救出し地上に戻る途中なのだが、こちらは新型機…いらぬ誤作動で殺してしまつては忍びない。だから、彼女の保護を願いたい」

セウーエエフツ！！多分、セーフ

コレ以上の言い訳はでねえぞ！！

『いいだろう、替わりにこちらの負傷機の護衛を願いたい。会つたばかりですまないな』

あれ？俺、結構信用有る？先生にはお前ほど胡散臭い奴はいないって言われてた位なのに…

「構わないが良いのか？そつちも言つたが会つたばかりだぞ？」

『なに、その血塗れの機体を見れば腕がたつのは目に見えている。』

それに貴殿はORCAだろう？なら問題は無い。何せ今作戦は国連と帝国に米軍、そしてとのORCA共同作戦だぞ？まさか、必死過

きて忘れたのか?』

「必死なのは認めるがちゃんと聞かずに飛び出したのでね。すまないな、説明感謝する」

『いくら憲兵とはいえそれはいかんだろう…まあ、いいだろう。それより救助者をこちらに…鳴海、救助者を』

『了解では、要救助者をこちらに』

いくら、AAした後だからってまあ、いいか…どうにかなるだろう
コクピットハッチを開いてと

『え、裸っ!!女子?!』

『孝介、何鼻の下伸ばしてんのよ!!後で覚えてなさい!!』

『ちよ、水月?!ああ、もう収容完了。リンクス、護衛を頼む』

「そついえば、名乗って無かったな。俺は夜鷹…リンクスの【夜鷹】
だ

機体はストレイド・ヴァン…主に高機動戦を得意としている」

元は故レイレナードのアーリアだったんだけどアンサラーに中破されてラインアークから提供されたWGと前の機体を組合せて使ってるのが今の機体なんだよな…駄目だ、微妙に説明しないと気が済まない

『了解、今からそう呼ぼう。では夜鷹、うちのヘタレをよろしく頼む』

「任せろ。後…」

『…なんだ?』

「あんたの名前は何て言う?名前が解らないと何と呼んだらいいか解らない。」

『ん?すまなかつた、私は特殊任務遂行部隊A 01部隊長の伊隅みちるだ

改めて、部下を頼むぞ…夜鷹』

なんか、凄く信用されてる…正直、最初の台詞が無ければ…ひいては純夏を黙らせもとい保護しなければ今頃、天敵だった時みたいに皆殺しにしてたかも…考えんのやめよ

「任された、伊隅隊長。死力を尽くして依頼を果たす」

あれ…なんか、懐かしいなコレ…なんでだろう
まあ、いい…今は…

「どつやら、お客さんらしいな…楽しくなってきたっ!しっかり、着いてこいよ鳴海さんとやらっ!」

『りよ、了解。頼むから平然とマッハ1とかで移動しないでくれ!』

Side ????

『対因果律ヲ確認…シリアルXA 26483ト照合一致…粉碎者』

と断定…コレヨリ、計画ヲプランBニ変更…計画ヲ続行シマス』

第一匹 【奴らとの戯れ】（後書き）

長さってコレ位？

短いつて来たから今回は頑張つて長めになるように頑張った。コレ以上は息切れしかなかないので勘弁な

次回、【世界との戯れ】

この世界で彼はどんな答えを得る？

だつておww駄目だ、シリアス無理ww
ちよくちよく、ギャグ入れる予定なんであまり鬱展開にはならない
だろっけど、ご都合展開はあるかも

ガンガンいくぜっ！！メルツエエエエルツ！！

第一・五匹 【意外な奴との戯れ】 (前書き)

ちよつと短め。

第一・五匹 【意外な奴との戯れ】

Area ハイヴ出口付近

S i d e 鳴海

彼が通った道は全て血の海になっていた

不審者であるが相手はリンクス。キルレシオが有り得ない相手に消耗した状態で戦うのは危険と判断した隊長は俺に監視役をさせ、俺を戦場から遠ざけた

それにしても奴はヤバイ…両手の最近、試作され始めた光線刀を両手に装備し、なおかつ背中には小型プラスマ砲に小型グレネード…そして、【変形機構】が備わっていた

ネクストの特徴であるオーバードブーストはそれだけでマツハ1・6はざらじゃない。そんなものを閉鎖的空間のハイヴでやったら容易に想像が付く…

「つく、なんだよ…これはよ」

吐き気が出るほどの光景だ

大型主は急所を付くように光線刀で切り裂かれ、小型種は脚の刃で引き潰され、尚且つオーバードブーストで発生した空気の壁で全てが押し潰されていた

その一挙一動は全てが殺しの動作で…

『ヴァルキリー・ママから鳴海機へ

米軍が特殊爆弾の投下を強行したわっ！すぐに離脱してっ！！』

「っち、了解。すぐに逃げるっ！」

死ぬ訳にはいかない…俺だけならまだしも今は可愛い死んだと思っ
ていた後輩がいるんだ…容易に諦めるわけにはいかないんだっ！

『夜鷹から鳴海機へ』

ハイヴの奥に戻れ。今から迎撃行動に移る』

なにいつてんだ、コイツ！いくらなんでも無茶過ぎる

「何言つてんだっ！あんたも戻らないと死んじまうぞっ！！」

『なに、無理なら最初から言わないさ

それに…』

「それになんだよ?!俺は逃げるからな!」

『ああ、中の娘を頼む。それに、打ち落としてしまってもかまわん
のだろう?』

どうしたら台詞はけるんだよ…

強くなりたいな…畜生お…

Side Out

Side 粉碎者

ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ
ヤバイヤバイ

なんだあれ…ヤバイぞ

着弾したらアウトだ、打ち落とさなければ皆死ぬ。

「くそ、思ったよりちいせえ…（並列演算重視の俺のFCSに頼っていたら手遅れだ…ならノーロックモードに頼るしか無い捕らえたぞ…黒弾野郎っ！）」

「こっちくんない！黒いのっ！」

二つの空から飛来する弾丸を溜弾とプラズマの弾丸が捕らえ…破壊した

「いよっし！って、のわあ〜?!?!」

だがしかし、黒い爆弾は空中にて爆発し、その黒い健康に明らかに悪い爆発はハイヴの前衛的造形物の上部を根こそぎ食らいつくし、爆風はその下のBETAと戦術機達を吹き飛ばした

「く、なんだあの出鱈目な兵器は？アスピナか？アスピナなのか？」

彼の頭のリソースは爆発の被害よりもそれを作ったであろう組織…自分を産んだ組織なのだ、いかに残酷に惨つたらしく惨殺するかに傾いていたが

「う、大丈夫か？夜鷹…」

「ん？ああ、大丈夫だ鳴海さんとやら。さっきから頭が引きちぎれる位痛いがたいした事じゃない」

リンクスはネクストを【AMS】によって操っている

AMSはリンクスの脳と機体をセーフティを介してはいるもののほ

ば直に繋いでいる

よって、AMSにはそれなりに才能がいる

それをAMS特性といい、高いほどネクストの操作はしやすいと言われているが、アナトリアの傭兵は高くない特性で数多のリンクスを狩り殺していたから一概に高ければ良いものでも無いというのが最近の仮説だ

話は逸れたがようはリンクスは皆頭痛持ちと覚えておけばいい

『それって大丈夫なのか…て、何だよコレは…まるで血の海じゃないか』

鳴海の目の前に広がるのは爆発で幾分吹き飛んでいるが大量のBE TAの死体だった

あるものは蜂の巣にされ、あるものはその体の大半ねこそぎ奪われていた

『びつくりしたぜえーアリサワアーツ！』

『ふん、何か来たかと思えば雷電の装甲は貫けんか…おや、生き残りがまだいたかヴァオー、連れていくぞ依頼だからな。』

『オマケに夜鷹までいるぜえーアーツ！』

とりあえず、この異常な機動をする戦車二機からは逃げられそうも無い

逃げたいがAMSがうんともすんとも反応を返さない、セーフティのせいか…俺もここまでか…

第一・五匹 【意外な奴との戯れ】（後書き）

意味ないかもしれないが夜鷹機のアセンを晒してみる。てか、こっ
ちがメイン

暇な人は弄って遊んでみて

機体名

Strayed・Wind

外装

Head:HD-GOGIRE

Core:WHITE-GLINT

Arm:同じく

Leg:同じく

内装

Generator:GN-SEBRERO

FCS:INBLUE

Stabilizer

・Core下部:ハリのあれ

武装

Main:04-MARVEx2

Hanger:EB-0600x2

BackUnitL:GRB-TRAVERS

BackUnitR:TRSCR

推進機関

Main:GAN01-SS-M・CG

Back:GAN01-SS-B・CG

Side:GAN01-SS-S・CG

OB:KRB SCBRERO

こんな感じ。ダチと『ジエネの型番の【GNドライブ】っぽいよな』
って話したのは内緒。

気を取り直して、がんばる

第二匹 【世界との戯れ】（前書き）

なんか、開始早々色々とぶっこわしてしまったよ…

こんなんで大丈夫なのか？俺

第二匹 【世界との戯れ】

Side お茶会

『【人形】、回収した【粉碎者】の容態は?』

『治療しているアスピナの連中によると体は汚染の無い至って健康らしいが脳にとんでもない負荷がかかって倒れたらしい…ちょうど、奴にやられた【箱】のようにな』

『ああ、あれか…あの時は流石に肝が冷えた。何せ、音速飛行の間でさえ正確に狙ってくるんだぞ…全てコクピットを外してな』

『なるほど、当時から異彩さには事足りていたようだな…奴は』

『もちろんだ、あらゆる兵装を使いこなし数多のリンクスを相手に勝ってきたアナトリアの傭兵でさえ奴には力不足だったんだぞ…ガチガチの対策はしていたが』

『そこだ…奴のおかしいのは、まるでAMS特性に喧嘩を売るようあらゆる兵装を使いこなす…まるで、【鳥】のように』

『たしか一部の噂では、ドミナントという仮説を立てていた奴がいたぞ』

『ドミナント…先天性戦闘適合者…か
まるで、奴を体言した言葉じゃないか』

『ああなにせ、二つ名の【粉碎者】は古代兵器【パルヴァライザー】

から来てるそうじゃないか？そのパルヴァライザーを破壊したのも
ドミナントらしい』

『ああ戦い、例え負けても更に強くなって帰ってくる機械。まるで
お伽話の主人公みたいだがその実態は特攻兵器を造る機関の自衛兵
器：唯の殺戮者：まるで奴の二つ名に相応しいじゃないか：ん？』

ガチャッ

『【団長】、粉碎者が意識を取り戻したみたいだ』

『【紅】か、聞いたか？【人形】、奴には色々と話を聞かねばなら
ない』

『ああ【紅】、済まないが【霞】や他の団員にも同様の伝言を頼む』

『了解。ああ、あの人恐いから嫌なんだよな…』

『がんばれ【紅】、私なんかは顔を合わせただけで半殺しなんだ。
お前が適任なんだ』

『解っている…解っているが【団長】体が嫌がるんだ…ダセエな…
ホント』

『…』

どうやら、この世界においても男は尻にひかれるらしい。むろん、
ゲイヴンの意味ではない

Side Out

Side 粉碎者

「目が覚めたら、ふかふかなベットの上だった…超能力とか次元連結とかの問題じゃねえ…もっと、もっと別の問題を感じたぜ…」

「気がついたようだな…髪の色が違うが間違いなくお前だな…夜鷹」

「あれ…先生がいる。でも…アレ？」

アレ?...アレアレアレアレアレアレアレアレアレアレアレアレアレ
アレアレアレ ?!

「ぐっ...が?!」

「どうした?!しっかりしろ!糞...何がどうなっている!?!」

アイツが俺で奴は俺...可笑しい...滑稽だ...何せ

「また、またなのか...また生き残ったかよ...俺は」

俺は俺としての以外としての記憶を有していた

Side Out

明星作戦は、三機のネクスト投入により全てが変わった… BETAは全ての光線級の攻撃を空を飛ぶネクストに集中することがごとく避け、地上の二機のネクストがその攻撃により全てを破壊しつくした。

それに恐怖した米軍上層部は試作したG弾の使用を強行。しかし、ハイヴから現れた橙色のネクスト…一時、近衛の戦術機ではと噂されたが明らかに違う形状から直ぐに噂は消えたが

「それにしてもなんなのよ…コレは」

めのまえに写るのは伊隅達が回収したシリンダー群から明らかに違う何か

形状は菱形の結晶体で色は清んだ橙色

霞がリーディングした結果は色々な情報と

『これ以降はシリアルを入力せよ』

だそうでそれ以外はうんともすんとも言わないらしい

社はまるで哀しみを沢山詰めたらこのようになるのではと言っていたがこのガラクタは一種の並列演算装置…いや並列演算生命体といった方が正しいがコイツは情報を糧に生きているみたいで当たり障りの無い情報を霞にプロジェクションさせたらBETAやその他の兵器の情報を超越した。それらは今まで人類に喧嘩を売るものばかりでこれらの兵器は【アーマード・コア】と呼ばれていたらしいそれはネクストに酷く構造が似ていてあの男に聞いたなら

『確かに、我々の保有する兵器は【アーマード・コア・ネクスト】

だが？』

と、人を子馬鹿にするように返してきた時はまりもをいじくり倒して理性を保ったほどだ

「まあ、何にせよコイツが希望の宝箱かパンドラの箱かは不明…か
いいわ…とことん、相手になってあげるはへんなモノっ！！

S i d e O u t

S i d e 帝国

「そっ…ですか」

明星作戦で使用されたG弾は途中で打ち落とされたがその被害は尋常のものではなかった。

犠牲者こそ少なかったが、その凄まじい爆風により被害総額はとんでもないモノになり、更に詳しい内容はまだまだが横浜の地で重力異常が発生、それに激怒した兵達は署名を集め米軍に猛抗議しG弾の使用を強行したアメリカは国際的地位を失ったも同然だった

対して迎撃したORCAはその国際的地位を確固足るモノにした。

迎撃した衛士は現在、入院中らしいが陛下の直筆の感謝状が渡され、気を良くしたORCAは問題無い範囲で技術を提供しようとして技術提供の約束までした

一つ、噂程度の情報だが迎撃した衛士は日本人との情報だった
コレはとある国連軍衛士からの情報で

『全裸だったが、黒髪黒眼で日本語が流暢だった』

らしい。全裸という、時点で眉唾物だがORCAの衛士は変わり者が多く私自信、真改という衛士と世話話程度だが話したが中々寡黙だった

尊敬する人の娘もそれなりに寡黙だったがあれほどではなかった

「狭霧さんっ！そろそろお時間です」

「ああ、済まない。すぐいく」

まあ、なんにせよ一度会ってみたい物だ

Side Out

ORCAは世界にある一つの宣告をした

『世界がもし、一つに纏まらずに己の利私私欲に走る者で溢れかえればその時は我々ORCAは世界に人類に攻撃を開始し、国・人種というあらゆる垣根を破壊し尽くす。

もつとも、あの生体兵器共を殲滅した後だが

もし、諸君の中に自分の国に不満があるものは我々の元に来るといい。狭き門だがまあ…歓迎しよう』

世界は…我々を試しているのだろうか？

その答えはまだ誰も知れない…

白銀の救世主はまだ知らない

何が己をこの世界に縛っているのか

Side ????

私が彼を助ける行為は結果的に彼を無限地獄に叩き込む事になっていた

しかし、彼は己の物語を完遂した

だから、ここから先はアイツの…僕の物語だから

『僕はここにいるぞ…夜鷹』

ただ僕は、水の中で彼の者を待とう来るべき真実の時まで

「俺は何故生きている…?」

「答えを失ったか…粉碎者を哀れだな」

「安心しろ…私はいつでも、私は側にいる」

「あんたは…まさか」

「君はあの時の?!」

「シリアル…承認」

次回、【粉碎者の戯れ】

答えの先に君は何を見つける？

第二匹 【世界との戯れ】（後書き）

今度からは相当な難産になりそうだが
男なのに難産とはこれいかに

まあ、コレくらいの長さで息切れしない的に頑張る予定です。
でも、テストが近いからかんべんな！

オマケ

多分、アウトな小話。彼が意識が安定した後の話

「よかった…本当に」

「あの…ちょっと…先生？そのですね…」

「それにしても…ああ、いいニオイだ…それに全裸とは誘っている
のか？いいだろう、相手になってやろう」

「ちょ、待って！イヤ、やめ…あ、アアーーーーア！」

これ以上は検閲に削除されかねます。

続きをみたい人は（以下略）

…何をしているだ俺はセレンさんが変態かしてるよ…（ノ、）、
アチャー

閑話 【彼の入院風景】（前書き）

これは第二匹の前です。

フロム脳で補完大丈夫だぜって人は見ないほうがいいかも

閑話 【彼の入院風景】

（これは第二匹前の話）

奴が眠りについてから約一年…色々あった。

今まで、未完故に汚染を垂れ流していたコジマリアクターが夜鷹のストレイドウインドから入手したデータにより一応の完成したらしい。

その試作コジマリアクターをハリのクラスナヤに積み現在、データをとっていた

新型のリアクターの出すコジマ粒子は汚染物質で無く、一種の変異ニュートリノが本来の姿らしい

そして、完成したそのリアクターは修復作業が完了したストレイドに載り、乗り手の帰りを待っている。

明星作戦の際に回収されたストレイド・ウインドは破損が激しく、修復は不可能と断定され、製造元のアスピナが現在、バージョンアップしたパーツを製作しているらしい。

ストレイドは本来、アーリヤを主体としたアセンブリに頭をローゼンタールの頭部に変更し、それ以外は依頼に合わせてチミチミ変更しているのが夜鷹のやり方だった

そのやり方はまるで一昔前の【鳥】のやり方に酷く似ていた

「それにしても、お前は変な奴だよ…」

コッコッ！

「失礼します…セレンさん、はやてちゃんは？」

「鑑か：疾風はまだ寝ている。
時折、うなされていているが未だに起きる様子は無いよ」

鑑は夜鷹が：疾風が保護した少女らしく

疾風同様、一週間は寝ていたがあっさり欠伸混じりに起きたが錯乱を少々起こしたがすぐに治まった

理由は

「『どんなに暴れても、哀しくなってもそれでも人は前に進まなくては行けない』って言葉を誰かから貰った気がするんです。タケルちゃんを殺したBETAは憎いし、皆殺しにしたいけど復讐だけじゃ前に進めないって思っただんです」

だそうだ鑑は夜鷹が：疾風が保護した少女らしく

疾風同様、一週間は寝ていたがあっさり欠伸混じりに起きたが錯乱を少々起こしたがすぐに治まった

理由は

「『どんなに暴れても、哀しくなってもそれでも人は前に進まなくては行けない』って言葉を誰かから貰った気がするんです。タケルちゃんを殺したBETAは憎いし、皆殺しにしたいけど復讐だけじゃ前に進めないって思っただんです」

だそうだ彼女は私が：私達が知らない夜鷹を知っていた

夜鷹の本来：この世界においては【香月疾風】というらしい。

横浜に拠点を構えた【魔女】と同じファミリーネームだと聞いたら彼の死んだ両親の親代わりだったらしい

両親の死因は【実験の失敗】でなんでも新型の原子力発電装置の試運転の際に謎の事故が発生し、その時に辺り一体が更地になったそう
うだ

そして、この世界においての疾風は幼少期に重い心臓病で死んだ
うだ

その時は皆で盛大に葬式したようでこの話をしている鑑は未だに信
じられない顔といった顔していた

詳しくは疾風が起きた時に話すらしい

なんでも、とても大切な話で本人に直接話したいとの事でメルツエ
ルも了承していた

とにかく、コイツが起きない事には話は進めない

「早く起きろよ…馬鹿」

じゃないとお前のHDDの中身晒すぞ

第三匹 【記憶との戯れ】（前書き）

夜鷹の過去が明らかにつ！！

しかし、会話の練習作とはいえグダグダし過ぎて気付いたら他のリンクスがあ号を蜂の巣にしてみましたとか有り得そうで怖い

第三匹 【記憶との戯れ】

「正直、信じかねるのだがな…」

それは俺が意識が回復した日の正午だった

俺が保護した少女…実際は17歳で俺と同年と解つたら軽く落ち込んだ…が大事な話があるらしく、死にたいを押しつけてブリーティングループに来ていた

「まず、始めに全員気付いているだろうが今我々が過去等では無く完全な【異世界】であるのは承知済みだろう？」

「了承してる」

「ああ…」

「無論だ」

「（コクコク）」

上から順にテルミドール、俺、メルツエル、セレン、ヴァオーでヴァオーに関しては声がデカすぎるので赤い×の入ったマスクをしている

大きい声に敏感な今の俺の頭を考慮してである

「え…と、まずスイマセン。皆さんがこの世界に来てしまったのは私【達】が原因なんです」

「…別に構わないが？」

「(コク)」

「それより、複数形なのが私は気になるな」

「へっ?! えっと…複数形なのは、私と平行世界の私、そしてハヤテちゃんで皆さんの因果をこちらに写したからなんです。あの、因果を写したっていうのは…」

「ようは死んだ奴の因果は虚数空間で輪廻を待つ。その因果を力技でこの世界に持ち込んだんだらう?」

「えう…」

「夜鷹、話に割り込むのはマナー違反だ。それに訳の解らん単語を出してお前は…」

「待つて、照実っ! アイアンクローは…アイアンクローはっ?!」

「はう!? それよりハヤテちゃん! 全部知って…て?」

そこにいたのは白目を剥いた死体寸前の生物: 後から茶菓子をかめに来たハリが皆に伝えなければ俺は死んでいただらう

「まず…やめろ、純夏、左はヤバイってば。ああ、黙ってて悪かったけど…なんか俺、色々知っているんだ…表も裏も」

「ようは、お前は簡単に言えば【何】だ
話はそれだけで充分だ。別に自分の事等どうでもいい…一度死んだ
ようだからな」

「全くだ…長つたらしく話しても結果は変わるまい」

「同じく、お前が居る…私はそれで充分だ」「コクコク以下同文」

「お前ら…」

「話してハヤテちゃん…何があつたのか」

「わかつた…正直、俺でも理解しがたい内容だが信じるしかない
だよな」

さて、どう話したもんかね…

俺はこれまで17回+3回で合計20回死んでるんだ…足し算した
訳は後で話す

俺が認識している一度目の生…【前世】では傭兵でも衛士でも
なく普通の大学四回だったんだよ…強いて言うならゲームが好きなの
そんな俺は住んでいたアパートにヘリコプターが突っ込んで死
んだんだ…マジでだ。だから、セレン…その目はやめて

まあ、死んだ俺は心機一転、記憶も真つ白な赤子になって生まれる
筈だったんだよ。

しかし、俺はそこで一度目のイレギュラーを起こしたんだ…記
憶を持ったまま転生したんだよ…純夏達がいた世界にな

そこでの俺は両親を無くして親戚も皆死んじまつていない俺は、父
の生徒を名乗る人物に引き取られたんだ…それがこの世界では【魔
女】と呼ばれている【香月夕呼】姉えだ

父はエネルギー工学の権威だったんだけど結構なんでもやれる

人で夕呼姉えの理論も真剣に聞いてくれた数少ない人物だったらしいんだ

その時の恩を返したくて引き取ったんだけどまあ生活能力の無い事無い事っ！

見た目は子供、中身は大人な俺は家事の大半をやったよ。男の一人暮らしを舐めんよ？

しかし、俺はある事に気付いたんだよ生まれ変わった世界が前世において、ゲームの世界だった事に…

だけど、そんな事より新しい生活が楽しかった俺は深く考えずに生きていたんだ

そんなある日、俺は夕呼姉えと一緒に夕呼姉えが高校の教師になってから住んでいる【まりも姉え】と夕食の食材を買って帰る際に変な男が襲って来たんだよ

もう、トンデモ野郎で「俺のまりもさんから離れる」って言いながらナイフで切り掛かってくるもんだから思わず投げ飛ばしちゃったよ
俺って結構鍛えていたみたいで軽々と投げた後に電柱に服剥いで縛って置いたらニュースになって大変だったよ

まあ、そこで終わればハッピーエンドんだけどある日俺は【因果の流出】に巻き込まれたんだ

そこで俺は高校の友人のそっくりサン達と一緒にBETAっていうあの気持ちが悪異星人達とノーマルに乗って戦ったんだ。しかし、いつまでも勝つ事が出来ず…最後は死んだ筈だったんだ

でも俺は【時間の逆行】をしたんだ。
ここまで来たら驚かなかったね…何せ【知っていた】からな
純夏が脳髄にされているのも、アイツがループしてるのも、人類が十年立つ頃には滅びるもの皆…

ちょうど、15回目のループの最後。俺はある賭けに出た
それは世界と【契約】し俺の因果を対価にアイツのバラバラの因果を一つに纏めたんだ

その後、アイツは世界を救ってハッピーエンドっ筈だったただがな…

無理に纏めた因果情報は最強であると同時に歪みでもあった

アイツは本格的にこの世界に閉じ込められたんだ

その歪みは同時に別の世界に歪みを作った…俺、【夜鷹】という歪みをな

俺は事実、世界を二回滅ぼして三回目はなんとか次への【芽】を残す事しか出来なかった

だが、芽を作る事に目を付けた疾風は残り少ない因果を使い夜鷹をこの世界に呼び融合し、今の俺になった。

皆はその際、俺との縁が強かったから引きずられる形で来ただけさ

以上が俺の物語

唯の馬鹿が頑張ったけど結局は他人任せさ

沈黙が部屋を包む

まるで幼子を抱く母のように

「あゝ…何か質問がある奴はいないか？」

「…では、私からだ。お前は世界と契約したと言ったが何を対価に契約した？まさか、貴様の因果…魂だけではあるまい？」

「いきなり核心か…流石は先生だよ。

その通り、俺は因果だけじゃなくて一度だけ【世界】が望んだ世界に行きそこでの問題を解決するだけ…中々破格だろ？」

…何、その痛い子を見るような目は？

「よしんば、貴様の言う事が事実だとしてお前は何故そこまで出来

る？いくら貴様が元が始めた事とは言え憲兵業を経験してそんな世迷事みたいな内容を受けるとは思えないのだが」

「まあ…気に食わないからかな？散々利用されてあげく俺は唯の歪みとか笑えないえって…だからこれは八つ当たり

俺がBETAのせいで歪められたなら俺はBETAを滅ぼし尽くす…それだけだよ」

「…で？巻き込まれた俺達はどうしたらいい。もしや、ただ働きしるとでいうつもりか？」

「メルツエル…得るものなら一つだけあるぞ」

「ほう、なんだ？返答によってはヴァオーの封印解除もありえるぞ」

「（地味に嫌だ…）そうだな、溜め込んだゴミを一掃したよう」
助かったぜ！メルツエエール！！「グオツ?!」

「おもしろくないから解除だ。もう少し捻りを加え出直すんだな…さて、俺は面倒が嫌いなんだ…失礼する」

「お大事になつ！！夜鷹あ！」

あああ、頭が！頭が割れるっ?!

「あはは…大丈夫？ハヤテちゃん？私、お医者さん呼んでくるね」

「さてと、戻ってアセンブリでも考えるか…失礼するぞ夜鷹。お大事につ！」

わざとだ！絶対わざとだコイツら！

「さて、少し疲れたろう…ゆっくり寝ている」

そう言いつつ何故人のベットに入るんですかセレンさん？

「ああ、離すつもりはないからなおやすみ…夜鷹」

生殺しかっ！くそ、素敵なお胸様が…ああ、凄くねむ…グウ

第三匹 【記憶との戯れ】（後書き）

作者の文章力：現国3では紹介仕切れなかった事を紹介

夜鷹のステータス

LinkSName：夜鷹

真名：疾風

色：橙色+灰色

属性：混沌 中立

+スキル+

・AMS特性：B+

ネクストでの戦闘時間が比例する

B+はそこそこ高い方

・直感：C+

戦況を有利に進める程度の力

・千里眼：C-

大体の所まで見える

・格闘：A+

生身でも大体な物には勝つが紅蓮大将クラスは死ねる

・射撃：A-

音速戦闘時にアサルトライフルの弾を当てる程度の力。Sあるとメインブースターを打ち抜ける

・強度：S-

5分程なら全力戦闘は耐えるがゴジマは無理

・プライド：F

そんな物無い

・構築：B

アセンブリの上手さを表す

某笑顔動画の人はS位あるってきつと

・記憶継承：EX

記憶力の高さでも比例する。まだまだ伏線のある能力

・恋愛原子核：D-

異性を引き付ける力で元祖はEXクラス

以上、夜鷹のステータスでしたあ

次回はやっとな戦闘ダア！！（、・、）

外伝 【記憶のカケラその1】 (前書き)

言い訳はしない…

外伝 【記憶のカケラその1】

人は誰しも忘れる事がある…

じゃあ、俺が忘れたものは何なのか？

忘却は時として残酷な刃となり自らの体を切り刻む…

これはあくまで夢の話…嘘かもしれないし本当かもしれない

「ふあ…なんだ、まだ四時半かよ」

あいも変わらず主夫な自分に苦笑いしざるえない

<夢のカケラその1>

『タ…ル…ゃんのおくバカァー！』

『…ガァーリィー…！！』 ドップラー効果

「あいつら…たまには大人しく起きれないかな？」

それは家族二人の分も朝飯を作っている時の出来事だった

たまには友人二人にテンプレ以外の起き方してほしい俺がいますよと

「いつけないっ！今日私の当番じゃない！」

「大丈夫だよまりも姉、俺がやっといたから。それより早く皿出すの手伝ってよ。」

「わかったわ、すぐに手伝うから。」

「うん、お願い。」

まりも姉…神宮寺まりもは数年前に気付いたら俺の身元引受人…
香月夕呼と一緒に住むようになった人で俺の通う高校の担任の先生
だったりする

「あ、朝は疾風が作ってくれたから私がお昼作るね。」

「お？やったね」

俺の紹介をしてないよな。

俺の名前は香月疾風かづきはやまっていう。

本当の両親は俺がまだ物心つく前になんかの事故に会って死んだら
しい。

なんて、転生のテンプレと思ったが事実だからしょうがない。

「…おはよう」

「おはよう…夕呼姉、凄い顔だから洗ってきなよ」

この人は夕呼姉…香月夕呼という。

物理の先生で噂によると学会に追い出されたとかなんとか…

俺にとっては命の恩人だったりする。

俺は何故か親戚が誰も引き取るうせずにこの人が裁判してでも引き取ってくれなければチートをフルに使って生き延びねばならない波瀾万丈な人生になっていただろう…やべえ、寒気してきた

「大丈夫？ 顔色わるいわよ？」

「大丈夫だって、夕呼姉こそやけに起きる遅かったじゃないか」

「ああ、思い付いた理論を纏めてたのよ」

もしかしたら、ALのキーになる理論だろうか？ 今は主夫をしているがこう見えても前世は理系大学を出た身だ…談議出来ずに何が転生者か

「それは実に楽しみだよ」

「最近、本当に先生に似てきたわねあんだ…」

「本当…孝也教授に似てきたわ」

「親父に似てるのか…いまいちわからないな」

記憶にない人に似てる言われてもわからないよ…ほんと

「いっけね、もうこんな時間か学校行かないと」

「まりもが作ってくれたお弁当忘れんじやないわよ」

「あいよー 夕呼姉も遅れないようにね」

「ええ、いつてらっしゃい。」

「うん、いつてきます。」

俺の物語はある意味最悪の形で幕を閉じる事になるとは誰にも…俺
さえわからなかった…

「おはよう白銀、鑑。相変わらず朝から五月蠅いな、ホントに」

「それは、タケルちゃんがいけないんだよ！ お、女の子と一緒に
寝てたんだよつ！不潔だよ！最低だよ！」

「おまつ、それは俺だって訳わからねえよ！！！」

なるほど、御剣のお嬢さんが来たか。

思ったよりはやいな…まだ9月の中頃だぞ

「…ほう、興味深い話だな。是非詳しく聞かせてくれよ…鑑」

「それがね…」

鑑が話してくれたのは以下の内容だ

- ・朝、白銀を起こしにいったら何故か隣に女が寝ていた
- ・切れた鑑が白銀を電離層まで吹き飛ばして騒いでいたら女は居なくなっていた

・俺に判決を仰ごう 今こゝ

「…さて、何故そこで俺に裁きを仰ぐ」

「だって、そういうのに詳しいんだもん」

俺はあくまで人並みだ

「それで判決はどうなんだよ？当然、無罪放免だよな？」

自信満々だな白銀？

確かに隣に女が隣に寝ていた。だけ。なら問題はない、だがな？
白銀：男ならいや、漢やらないといけない時があるんだよ…

「お前の証言が本当に正しければ…な？」

「な、なんだよ…その意味深な言い方。」

「もしも、お前が酒の勢いとかでやっていたらどうするつもりだ？
確か昨日、お前ん家の親が旅行でいないからって焼きスルメを着
に酒盛りしたよな…俺は帰るのも考えて押さえていたし歯磨きして
目も覚めいた。」

しかし、お前はその後と余った奴飲み切るって言っていた。その
時、何らかの用事でその彼女が家に訪ねていたら？

美女（男も含め）ホイホイなお前さんならさぞいい餌だったろうよ
？ 女になら手が早い白銀君にやあ手を出さない筈ねえ…影行さ
んの知り合いならなおの事…な」

信じられるか…コイツの親も恋愛原子核よろしく美女の知り合い…
てか同級生、後輩、先輩、先生が多いの何の…

影行さんの親友だったらしい俺の親父はさぞそこら辺の現実と戦い続けていただろう

「な、なんだよその極論！ 確かに俺とお前は昨日飲んでたけど、そこまで酷くなるまで飲んでないぞ！！」

甘いよ…仏壇に置かれている砂糖菓子より甘い。

「それを証明する術は？ 今も顔色悪いお前じゃ説得力皆無だぞ。それより鑑の証言の方がまだ信用性と現実味がある

よって、俺が鑑執行官に以下の刑をやってもらう…どりるみるきいゝふぁんとむゝだぁ！！」

恋愛原子核：俺が貴様に対して抗ってやるよ。

そして、死の因果をも超越してやる！

「待て、やめセゝふぁんとおーむ！」ガガーリイーン」

お前の事は忘れない…だから前人類の半分の為にもげろ

「おはよう、紳士淑女諸君」

「「「「おはよう」「「「「

俺は日常を繰り返す…たとえ何が起ころうと守りたいんだよ
この生活を、友達を…

「また、身に覚えねえ夢見ちまったよ…」

楽しく、そして眩しい夢だった…

もう、数え切れないほどに人を殺した俺には到底無理な願う事すら
おこがましい夢だった…

人を…人間を愛するなんて怖くて出来ない

「臆病になっちまったよ…本当」

寝直そう…俺には手の届かない世界だ

せめて、せめて夢の中では幸せでいさせてくれ

<夢のカケラその1 fin>

外伝 【記憶のカケラその1】（後書き）

正直、予定にない外伝だけど本編よりスラスラ書ける件について

まだ、主人公がアンリミに行く前の話

コイツはある意味最強系オリ主

エースにはなれないがジョーカーにはなれる程度。サイクロンも付けちゃう

詳しくは活動報告にうpします。

地雷にわざわざ付き合っていただけありがとっございます本当

第四匹 【旧い関係の記憶】（前書き）

過去編の方があからさまにスラスラ書ける…俺はEXの方が書きたかったのだろうか

正直、まりもちゃんチョッパーは納得出来ない俺がいるよと過去編が完結する頃には過去編主人公が何をしたかわかるよ…当たり前前か

この前書きをキャラ同士の漫才空間にしようかと考えるけどどう思うよ…あんた

では、スタート!!

（、・・・）9m

第四匹 【古い関係の記憶】

ふと気付けば精神的衛生に宜しく無い生き物、アスピナイヤキサ
ラギが両手を上げて喜びそうな奴だったが…

自分についても大体整理が着いて来た
後はリハビリを終えて戦いに戻るだけだ

俺はリンクス、己さえ殺せる

俺はレイヴン、所詮：撃つ事しか知らない未熟者だ

< 第四匹 【新世界での戯れ】 >

メルツエルと呼ばれ、第三ブリーフィングルームに向かう俺はあ
る事を忘れていた…この時、もし思い出していたら未来は変わって
いただろう…多分

「お久しぶりですねカロードのリンクス。覚えていますか？」

「ああ、フィオナ・イエルネフェルトさん…だったか？ ライン
アーク防衛以来だったかな？」 フィオナ・イエルネフェルト…父
親が人工知能の研究者で彼女も瀕死のアナトリアの傭兵を二代目ホ
ワイト・グリントに組み込んで延命した地味に鬼畜な人物

【夜鷹】としての記憶が正しければ、【アナトリアの傭兵】俺
って図式は間違い無いらしいが納得いかない。

何故なら俺は生粋のAALIIYAHファンでありその上位互換のW
Gは状況に応じて使い分けていた程だ。なのに奴はAALIIYAH
でレイレナードを潰しやがった…俺もやりかねないのは反論しないが

てか、この人って俺にやたら冷たいから苦手だ…なんでさ？

「積もる話は後にして、依頼内容を説明するぞ？ この依頼は重要だからな。」

そんな話、病み上がりには振らないで下さい

「お願いします…早く座ってくださいカロードのリンクス。」

「あ、ああ…」

やっぱ、やりづらいなこの二人…片や実験動物、片や駒扱いだから…どちらがどうとかは言わない

「さて、依頼内容を説明しよう。

依頼主はお得意様の国連軍の横浜基地副指令の香月夕呼。

依頼内容は兵器開発の手伝い。

夜鷹には基本的に開発の中心足るアルゴス小隊の仮想敵として行ってほしい。
アグレッサ

フィオナ・イエルネフェルトには彼の補佐だ。

同時に【不知火・式式】のデータを収集し、さらに発展するのに協力して欲しいと事だ…説明は以上だ」

「…という事は俺は、仮想敵として手を抜いて戦ってればいいのか？」

「本気で構わない…お前の場合、ストレスで死ぬからな…」

「（昔の事をグチグチと…）…そうかい」

「具体的に私はデータを収集、解析をすれば宜しいですか？」

「そうしてくれ、そこで落ち込んでる馬鹿もソコソコ使えるから頼むぞ…一応、そんな奴でもカレードランクの実力1位だからな」

「ええ、任せてください。レイヴンの手綱は私が握っておきます。」

おお〜い、二人で話をまとめないでくれえ〜い

「少し、時間をよろしいですか？ お話したいことがあります。」

「かまわない、これ飲んだらすぐに行くよ。」

「では、あなたの部屋で待っています。すぐに来てくださいね？」

あれ？なんで、彼女が俺の部屋のキー持ってるの??

「お待ちしていました。まず、これを見てください。」

手渡されたのは何の変哲もないファイル、中身は…

「…っ?!」

「それは、あなたの入院記録とカルテ、そして遺伝子情報です。」

「待て、なんでアンタがそんな」そんな事は後で構いません。」「…ハイ」

「まず、あなたとアナトリアの傭兵と【ほぼ】同じ遺伝子情報なのはやはり…」

「それは知らなかったんだけど…」

「…」

沈黙が痛い…本当に知らなかったんだよ。ORCAメンバー皆傭兵との直接面識あった訳ではないんだし…

「まあ、そうゆうのは置いてこれ見てください。」

「これって…っ?!」

「アスピナの方々が暇つぶしで作成したカメラで、人の顔を年齢を設定する事でその年齢の時の顔を再現する所詮御遊び程度の物ですよ…再現度は折り紙付きですけどね」

そういつて、二枚の写真を取り出し差し出す

片方はこのアスピナカメラ（仮）で撮った写真。もう片方は…

「これは…イエルネフェルト教授…」

「はい、私の父です…問題はそちらではこれです。」

「…これは？」

片方に写るのはフィオナで間違い無いだろうがどこか俺に似た無表情が張り付いた能面の野郎は…

「想像通り、彼は伝説の傭兵とさえ呼ばれたレイヴン…夜鷹です。」

「なんっ?!」

「きつと、セレン・ヘイズ…霞 スミカ氏は気付いていたのでしよう…AMS特性は彼以上でしたが戦いに対するスタンスは大した差はない二人でしたから」

俺の名前はセレン先生に戦い方を叩き込まれた際にと不便だからと付けられたが…あの時は焦ったが

「しかし、顔が似ているからと言って俺がアナトリアの傭兵だとは限らないっ!」

「何を世迷事を…貴方が、貴方自身が証明しているじゃないですか? 初めて乗る筈のWGを駆り戦場を制覇したは他ならぬ貴方…WGは彼専用のワンオフ機…とても他のリンクスでは扱い切れない代物の筈です。」

「…っ?!」

嵌められたか…やられた

「でも…よかった、また…また会えた。
ちゃんと約束守ってくれた…良かった…本当に(グスッ)」

人の事を追い詰めていたら今度は泣き出したっ？！

「あ、いやその…泣き止めって…ほら、な？」

「……………」

なんですか？ その信じられない物見てるような顔…

「彼と同じ慰め方…やっぱり、確信犯だったんじゃないんですか…」

【夜鷹】さん

畜生…完全にやられたよ…完敗だよ

「なんだ、結局嘘泣きか…慰めて損した」

こうなりや自棄だ…暴露したるぜ！！

青年説明中…

「そんな事…」

「事実だよ…残念なまでに…な」

俺が大昔から戦場を渡り歩いてきた事…そして、そういった事により戦いにおいて常人には有り得ない戦闘経験と技術に裏付けされた【殺しの記憶】は俺が持っていることをフィオナに説明した

具体的には A C 3 A C S L A C L R A C 4 A C f A つ
て流れて軽くはしょって話をした

「まあ、確かに…貴方がドミナントと呼ばれる存在なら数々の企業

「やオリジナルリンクスを葬ってきたのも納得です。」

「ボソツ（まあ、最初は事故から始まったんだけどな…）」

「…？何か言いましたか？？」

「いや、なんでもないよ…明日の準備を済ませてしまおう。」

「明日にはアラスカに飛ばねばならないからね。」

「ハイっ！　　すぐに手配します！」

「最近、ずっと忘れていた事をやっと思い出したんだよ。」

「話したくなった時に君は聞いてくれるか？　フィオナ…」

「それにしてもアラスカか…まさか、俺自身行く羽目になるなんてな…」

「世界なんてこんな筈じゃなかった事ばかりだよ…本当」

Side　夕呼姉え（??）と白銀武（23）

「あいつが死んでもう五年…か。　　意外と月日は早いもんね…」

「そう…ですね」

「私たちは今、白稜柵裏の丘の上の木の墓に来ている…今日はあの子が…疾風の命日だ」

「ねえ、白銀…あの子は最後迄かつこよかった？」

「はい、純夏を事故から助けたら何故か皆俺を思い出したみたいだし…コイツが心臓病で死ぬ以外本気に…本当にいい！！」

良かった…私はコイツの同位体を元の世界に戻す時の準備で側に居られなかったけど…

「ねえ、本当にBETAって奴はこの世界の平行世界に侵略して来たの？」

もし、真実ならこの世界の約10億人も人間が死んでるはずよ…」

そう、これだけが謎なのよ…あの子だけが心臓病で死んだのにそれ以外の因果がまるでなかったように音沙汰無しだ

「もう…虚覚えだけどアイツ、死ぬ前に俺だけにこう言ったんです…「俺が出来る最善はやり切ったよ…俺という1を切り捨てて、10億という命が助かったんだ。てめえの同位体の尻拭いはちゃんとやってやったぞ…馬鹿野郎」って…その日の夜見た夢で俺…まりもちゃんが宇宙人に食われちまう夢見て…それで…その」

「もういいわ、ありがとう。知りたい事は全てわかったわ…全て…ね」

神はとことん異端者には厳しいらしい…あの子の親といいあの子自身といい本当に…

「ホント…世界はこんな筈じゃなかったって言いたくなかったわ」

この世界はあの子の盛大な自己犠牲の上に成り立っている事になる

だとするとこの世界は…

「俺…今度自衛隊の新しい隊に入るんですよ。アイツが残してく

れた命を今度は俺が守りたいんです。」

「そう…頑張んなさい。これは…饞別よ…」

「これ…アイツの?!」

「希代の天才のノートよ? 大事になさい」

これは世に広まれば五世代ほどブレイクスルーしかねない代物…
コジマ粒子炉の設計図…彼の父が作り上げた滅びの産物ではなく本物の奇跡

「戦術機だっけ? アイツの研究なんだからちゃんと世に広めなさい…それが唯一の私達にできる甲いよ…」

「はいっ! 有難うございました、先生っ!」

「ちゃんと、来年も墓参りに来なさい…あの子、淋しがり屋だから」

「わかってますよ…腐っても三年の付き合いはありますから」

「そう、いってらっしゃい白銀」

「行ってきます! 夕呼先生っ!」

第四匹 【旧い関係の記憶】（後書き）

丸々内容差し替えちまったぜメルツエー！ orz

正直、主人公病み無双よりフィオナ含めその他ACfAヒロインとのラブコメ書きたいだよ、俺は…

後、クリスカ萌えにも挑戦したかった…反論しない。ただし、反省もしない

主人公&フィオナとTEの絡みにこうご期待っ！！

以下、嘘予告

かるくR 18だせえっ！！

「なあ、リンクス…なんで他の女の匂いがするだ…昨日あれだけ擦り付けたのにっ！」

「リンクス…なんで私の料理食べてくらないのだ？　こんなに愛しているのに！」

「ねえ、レイヴン…その…私…貴方の子供がね…で、出来たみたいなの…！」

「だから、私と幸せになろっ？」

「帰れっ！　リンクスは私の物だ！！私だけの物だ！！」

「失せるのは貴方の方です！　これ以上彼の優しさに付け込んで擦り寄るのはやめてっ…！」

「なんだあ…中にだれもないじゃないか？」

「幸せになろう…リンクス…この世にいるのはもはや私とお前だけさ」

A M S が光が逆流す r (r y

第五匹 【輸送機の窓からお贈りする】（前書き）

このTEは殆どオリジナルになる予定です。
凄く…楽しいです（ノ、）アチャー

第五匹 【輸送機の窓からお贈りする】

Area ネクスト輸送機内

「（　　）（　　）」

「夜鷹：何を聞いてるんですか？」

「ああ、【Thinker】っていうんだ…聞く？」

「ハイっ、是非」

「（カナル式イヤホンを回すのって衛生上あまり良くないんだけど中耳炎とか俺無いしセーフだよね？）」

その様子はさながら身長差を考えると憧れの先輩の好みを知ろうとする後輩のようであったと輸送機内スタッフがブラックコーヒーもどき片手に片手に語ってくれた…無茶しやがって

「（　　）（これ、彼の耳にさっきまで入ってたやつ…ヤダ、私何を考えているの?!　こんな事考えてるバレたら彼に嫌われかも…）」

「…（中耳炎とか大丈夫…だよな）」

しかし、なんとも噛み合わない二人だった…

夜鷹は【中の人】が今みたいなリア充みたいなステータスでは無くそのままの感覚で行ってる節があり

直の事、鈍感スキルは質悪いのレベルでは済まないだろうが…

フィオナはフィオナで憧れの人が自分と同じ年になっている事で有頂天になっていてテンションが変なだけだろうが…

「…ありがとうございました」

「感想は聞いてもいい？」

「恋…の歌でしょうか？ 私にはそう聞こえます。（女の子にそんな曲聞かせたら気があると勘違いされますよ…）」

「うん、大体正解… 人によって捉え方が変わる曲なんだよ。

俺の場合は【コイツ】との友情の曲なんだよ…」

見上げる先には輸送機内のストレイドに居た…名前こそ違おうが AALYAH 中心のそのアセンブリはアナトリアの傭兵の面影を残していた…

姿形は変われどレイヴンとしての誇りはそのままのようだ。

「（貴方は良く話してくれた…レイヴン、リンクスは皆総じて必ずと言っていい程何処かが必ず壊れているものだ…」

なら、貴方の傷はいつか癒させてくれますか？

貴方の崩壊は私に止められますか？

いつか、その隣に居るのは私で無くても構わない…だから、死なないで）」

彼女の祈りも乗せて輸送機は飛ぶ…

Side 白髪の小動物と姉

「クリスカ…明日来るっていうリンクス楽しみだね」

「そうね、だから早く寝ましょう。」

「寝不足で力が出せないなんて恥ずかしいわよ？」

「うん、お休み。クリスカ…」

「お休み、イーニャ」

「…ウミユ」

「さて、寝るか…」

彼女達は出会う…読めない心の持ち主に

Side 若き大和撫子

「おじ様、明日にORCAの輸送機が到着するそうです。」

『そうか…気をつけてくれ。彼等の別名は結衣ちゃんも聞いている
だろっ？』

「はい…確か、帝国では【英霊部隊】でしたか？」

『欧州方面では【アインハイヤル】とも呼ばれているらしいが…』

「皆、過去にBETAとの戦いで死亡判定が下された者ばかりですよね…」

『そつだ、しかも今回は【明星の鬼神】をわざわざ送り付けたりし
い』

「あの…ですか？」

【明星の鬼神】とは夜鷹の帝国軍内での呼称でG弾を撃ち落と
した技量…その後の鬼…鬼神のような動きでBETAを追い撃ちか
けていた姿からそう呼ばれている。

本人からすればそれが普通なのだが…まあ、英雄とは総じて理
解されない者ばかりだ…

『そつだ…なんでも、日本人らしいじゃないか…軽い面識を持たれ
るようしてくれると助かるよ』

「…善処します。」

彼等は知らない…独立傭兵の在り方を…縛れないレイヴンの在
り方を

未だ、隠されている天敵と呼ばれる程の力と狂気を…

「(…さりげなく、遊ばれた気がする)」

「どうしたよ、ユウヤ。 元氣無いな」

「ヴェンセント…」

「安心しろって…プリンセス・ユイには誰も手を出さないって。むしろ、お前くらいだって」

「なっ?! 違えよっ! 俺はただ明日来るっていう傭兵が気になるだけだっ!」

「照れちゃって。 まあ、確かに気になるな…可愛い娘だったらいいんだけどさ…」

「そうじゃねえ!! ユイから聞いたけど、有名な…明星の鬼神らしいじゃねえか…」

「ああ…あ…確かにそいつはマズイな…」

明星の鬼神がG弾を撃ち落としたおかげで帝国軍は何故か征夷大将軍を中心とした一枚岩となり、米軍との軍事的関係を最低限の物なってしまうていた。

その後の会談で征夷大将軍はこう話したそうだ…【目が醒めた】と

「怨んでる訳じゃないが、かと言って気分の良いものでも無いしさっ!」

「お前ら何話してるんだ？ 俺も混ぜてくれよ。」

「私も混ぜる！」

「V Gにタリサか…時間帯的にこんばんは…か？」

良い子は三時間前に寝ている丑三つ時…月が見えない新月はやたら不安を掻き立てる

「実は…「明日来るっていう傭兵の話だろ？」…そつだよ。」

「どうせ、乗ってる機体がちっこいからB E T Aに狙わなかっただけだろ」

「確かにネクストは平均10m前後だけど寧ろ良く狙われているくらいらしいぞ？」

明星の時に確認されてる。」

未だに語り継がれる【明星七不思議】の一つ、【無視するB E T A】…これは二機のネクストが戦域に現れてから起こった現象で光線・重光線級を含め皆、ネクストを袋だたきと言わんばかりの猛攻を仕出したのだ…光線・重光線級に至っては味方ごと撃ち抜こうとしていた程に

「確かに…不思議だよな…あんなに小さいくせに半端無い火力なんだよな。」

全く、物理法則に喧嘩売ってるよアイツら」

「技術屋から見てもあれは興味深い…向ここの技術者達も若干名来るだろうから是非、話を聞きてえ！…！」

「まあ、何にせよ楽しみに変わりは無い…か」

「よくも悪くもそつだらう」

「それよりお前ら、一つ賭けをしねえか？」

「賭けって何を賭るんだよ？」

「賭けでのチップは明日の晩のおかずだ…賭の内容はずばり、【明日くる傭兵が可愛いかな】！！ 判定は女性陣にお任せする」
「ん？ 女かなで無くてか？」

「そつだ！ その内容だと必然的に四分の一になるからな！
ここはあえて、地雷覚悟で二分の一だつ！」

「うしつ、乗ったあ！ 俺はNOに賭るぞ！」

「じゃあ、俺はYESだ！ リリウムたんな可愛い子に違げえねえ！！」

俺は、俺は、俺は、俺は…
どんどん増える人数。 聴き入っていた連中は皆、賭に乗っていない…嵌めとも知らずに

Side まあ、主人公だべ

『そろそろ、目的地に到着する。 各員、着陸に備えろ。』

「夜鷹…そろそろ到着しますよ。」

「ん…ムニユ」

「やはり…未だにこの顔があハードボイルドな顔になるのか想像出来ません…」

現在、17歳の夜鷹だが未だに締まりが足りないクール一歩手前な顔だったりする…身長は高めなので間違われないが。 そのギャップ萌えという奴もいるのは否定出来ないが…

「ん、ふあ…」

「あ、起きましたか？」

「うん、おはよう…かな？」

「はい、おはようございます。（可愛い…このようなものをあの人は毎朝毎朝…）」

セレンに感じる嫉妬はもはやバイレベルまで来ているフィオナ…ハードボイルドな男性が好きで彼女だが最近はこんな感じの男性も悪くないかもと思って来たこの頃…夜鷹は体つきは幼くないが顔がだいなしにしているのである…

ようは、幼さとかっこよさをそれなりに両立した顔立ちな彼は〇

RCAの女性メンバーからも人気がある…彼女らより強いのが大半を占めているが

「それじゃ、着陸準備を済ませますか…」

彼の今の服装は彼がよく使うオーメル製のパイロットスーツの上から防寒用に羽織ったジャケットだけである

オーメル製は実用性重視の為、スーツを二重構造にし、その間にGジェルを満たしているのだが、やはりそれだけでは足りないので結局は機体内にもそれなりに満たすのだ

ちなみにGAやBFF製はこちらの世界の教化装備よろしくもろに体のラインが出る…後はわかるな野郎共？

「今回は現地の安全確認は必要ないのでネクストでの出撃は無いですからねっ！」

「ああ、わかっている。

先に団長からメールが来ていたから確認しに行くだけさ。

そのまま、ネクストの搬入の為に乗り続けるから後は現地で。」

「はい、後は現地で」

Side 所詮は人間

「明日、例の憲兵が到着するそうじゃないか…」

「あそこにはネクストに99式試作電磁投射砲…正に宝の山ではな

「いかっ！」

「憲兵に対応される前に計画を実行したほうがいいのでは？」

「いや、波風を下手に立てない方がいいだろう…最悪我々は潰されるだろう。」

「しかし、上手くすれば我々の戦力はもはや以前と比べる事さえおこがましいだろう…」

「あの女が上手くすれば例の憲兵さえ手に入る…コイツを使えばどんな人間だって…な」

男の手には一つの薬品のアンプル…ラベルが貼られておらず、中には無色透明の液体が満たされている

「大丈夫なのか？ 快楽漬けで使えないとなると意味が無いぞ…」

「問題は無い…多分」

思ったより無計画のようだ…

「全ては祖国の為に…」

「『…』全ては祖国の為にっ！！」「『…』」

『以上だ…中々馬鹿らしい連中だ…』

『そういつてやるな人形…中々滑稽で笑えるじゃないか』

「あんたも中々良い性格してるよ翁…被害に会うのは俺だぞ…」

『ふん、所詮は薬で釣ろうと言う魂胆だろうが…粉碎者、貴様には特に効かんだろう？』

『何せ、アスピナの最高傑作だ…感覚を消すなんて造作も無いだろう』

「好き勝手言いやがって…反論出来ないのが激しく悔しいっ！」

『ソ連の動きは意味無いだろうが注意はしておけ…まあ、潰されるのは変わり無いだろうがな。』

『それから、霞が欧州前線が一段落着いたからそちらに回すのが決まった…頑張れ。』

「…先生来るのか。」

『ハイヴを落とした後だからかなり疲れているだろうな…』

『彼女を止められるのは【アナトリアの傭兵】位だからなあ…本当に楽しい事になってきたな、粉碎者？』

「盛大な嫌みをありがとう団長。」

『それから、クライアントからのお言葉でソ連の連中はAL5の推進過激派である可能性があるそうだ。』

「うあ…遠回しの皆殺し依頼。」

『ORCAとしては空の上の目障りな棺桶は解体してしまいたい所だよ』

『まずは、米軍のインフィニティーズを討滅…その後は5の関係者を順繰りに殺して行き、逃げ道を塞いでいく』

「新たなクローズプラン…人類統一の唯一の道…か。」

『そうだ、あからさまにわかりやすい敵が目の前にいるのに未だに一つになれない世界には【痛み】を知ってもらわねば足手まといにしかない…』

『お前にはその依頼の後にALVの方舟の破壊が待っている』

「スケジュールカツカツだな…俺はまだワーカホリックになりたくねえよ人形」

『ふつ、天敵とさえ呼ばれた貴様の口が言えた事か？
10億人を皆殺しにした英雄。』

「淒く…黒歴史です…」

『ま、話は以上だ…人類に黄金の時代を…』

「人類に黄金の時代を…」

第五匹 【輸送機の窓からお贈りする】（後書き）

おかしい…後半のORCAが愚か者を嘲笑う場面はプロットに無かったのにスラスラ過ぎてヤバイ！！

不知火・式式の魔改造フラグ来ました！！ アゴ凄いよアゴ

！！

修羅場もフラグ立てたよ…クリスカ、イーニヤ、結衣姫、ユウヤの修羅場も霞むぜっ！！

うちの夜鷹はよく訓練されたリンクスなのでセレン先生は大満足です。

ついでにセレンさん的には補食対象だったりする…書いてもおk？
ちゃんとR 18って表記するから

第六匹 【転校生は問題児】（前書き）

…言葉は不要だ…言い訳しない

第六匹 【転校生は問題児】

Area ユーコン基地

「初めまして、ORCAから今回の戦術機開発に関わる事になりました、夜鷹です。主に仮想敵^{アグレッサ}を担当します…まあ、よろしく。」

「同じく、彼の補佐を勤めるフィオナ・イエルネフェルトです。主にOSなどのソフトウェア開発を担当します。よろしくお願います。」

快晴の青空の下、俺達はアラスカのユーコン基地に来ていた。不機嫌そうな奴と信じられない物を見ているような奴、ヤバイ雰囲気な奴、とにかく色々

表の理由は戦術機開発、裏は…

「夜鷹、早く第8ハンガーに。今から模擬戦ですよ。」

「すまない、すぐにいく。」

今だけは楽しもう…どうせ憎まれているのは慣れている。

Side 白髪姉妹

「どうだった？ クリスカ」

「私もダメだったわ…イーニャ」

彼女らは第三計画によって生み出された存在、彼女らは先天的にある超能力が使えるように生み出された存在

彼女らは相手の感情を色のように認識出来る（主に心が大体読めるという事）のだが、ソレについて話をしてるようだ

「私、初めてだよ。 女の方は普通に読めたのに男の方はまるで読めないよ…」

「私も初めてよ…何者なんだあの男。まるで【氷】のようだ…」

「私から見たら【夜】みたいな人だよ…」

まるで、夜に飛ぶ鳥みたいな人、本当に不思議だね…クリスカ」

「そうね…」

心が読めない相手に四苦八苦しながらも、相手は軍属ですらない無い。

が、明らかに自分達より強い【存在】…どう付き合うべきか悩んでるようだ

Side 哀れな鴨達

「まんまと嵌められたな…俺達…」

「ああ、賭けは結局VGと一人の整備兵、後何故かステラさんだけ…か」

「まさか…VGの奴、顔を知っていたんじゃない？」

「止めとけユウヤ、例えそうでも嵌められた俺らが悪い。」

「ぐう…」

主にお腹の中がせちがらいようだ…

まあ、ネクストの到底、手加減してるとは思えない機動をみたら吹っ飛ぶだろうが…

Side おば…美しき狙撃主

「ステラ、なんで傭兵があんな顔だつて分かるんだよ。普通、ゴツイオッサンとか想像するだろ。」

「あら、タリサ。ヴェレリオが言った事を全部覚えてる？」

「えっと、地雷覚悟がどうか…」

「そう、彼は最初に男女問わずに可愛いかどうか決めると言ったわ。そう考えると来る人物が【童顔の人物】か【中性的な顔立ちの人物】かに限定されない？」

「え…あ、本当だ！ VGの奴、狡いマネを…」

「まあまあ、それよりそろそろネクストのお披露目でしょう？
見に行かなくてもいいのかしら。」

「そ、そうだ?! い、急がないと?!」

小さな影と大きな影が走っていく、期待と興奮を伴って…

Side アナトリアの傭兵

『全システム異常無し…いけます!』

「さて、一仕事しますか…」

新たに作り出された新型のコジマリアクターが大量の磁気を少々帯びた粒子を吐き出す。

今までは未完物質を無尽蔵に吐き出し、破壊を振り撒いた機体は、今や人々の期待を背負って飛ぶなんとも重い機体となってしまった

『これより、アルゴス小隊の訓練の仮想敵として動いてください。

使用可能火器は87式突撃砲に74式近接戦闘長刀のみです。』

「了解。 ストレイド、ミッションを開始する。」

『気をつけて…相手は5機よ』

「問題無い…一度【バラした】物には負けんさ」

アイツの記憶が呼び掛ける…奴らをBETAを滅ぼせと…気持ち
が悪いので、するけどさ…AMIDAとは違う恐怖を感じるよあれ
には…

さあ、破壊による再生を開始しよう…お前らはその最初の相手だ。
アルゴス小隊…感謝しろよ？

S i d e 唯依姫…様

「なんなんだ…コレは」

初めてその存在を確認した時は全体的に大きな印象があつた鬼神
であるが今は細身な印象を受ける…背中にあつた大きなコンテナは
今は無く、羽のような部品が背中から出ている鋭角的な機体であつ
た。

模擬戦の内容は目の前に広がる散々な物だつた…

どれほど弾幕を張ろうとも瞬間加速で避けられ、接近戦を望ん
でも傭兵は初めて使うはずの長刀を難無く使いこなしていなしてい
た。

正しく化け物だ…そういえば、模擬戦の準備の為に先程の顔合わ
せに出られなかったが私の印象は悪くなっていないだろうか…もっ
としっかりしろ私！

「想像以上だな、傭兵は…」

「当たり前です。彼はうちのエースですから…」

「エース？　それって、ORCA旅団長より強いのか？」

「はい、彼は実質ORCA最強です。」

驚いた…ORCA最強が来てくれるなんて意外だ

「驚いたな…最強が来てくれるなんて思わなかったよ」

「いえ、彼のリハビリも兼ねてますから持ちっ持たれっ…ですよ。」

中々食えない…

「そろそろ、彼が本気になるよるです…バイタルだと相当ストレス溜まっているようですね。」

「なっ…」

あの機動で本気じゃないだと…本格的に人間をやめている連中
だな、ORCAは…
この時、私は後悔した…
この傭兵の正体が彼だとわかった時から…

Side アルゴス小队

『くそ、全然当たる気配がなえ…何者なんだアイツ！』

高速機動戦闘を得意とするタリサが着いていけない…

『く、中々当たらないわね…』

狙撃が小隊の中では得意なステラの狙撃が当たらない…

『く、当たらねえ！！ORCAの傭兵は化け物かつ！！』

機動制御の得意なVGの陽動と挑発にも乗らない…

『なんなんだ！コイツ！』

『あゝたゝれえ！！』

二人乗り独特の高機動戦闘による射撃も軽々と避けていく…何より俺は…

「くそつ、そもそもなんで誰ひとり着いていけねんだ！！」

絶望しか感じなかった…同じ人間とは思えない…新型のBET Aと言われた方が納得出来そうな位【絶望】を体言してやがる…

『済まないが…本気にならせてもらおう…』

『『『『『『…つ???!』』』』』』

タリサが長刀で薙ぎ倒され、VGは回し蹴りで吹き飛ばされ、ステラは突撃砲で蜂の巣にされ、クリスカとイーニャは長刀で戦術機の両碗を切り落とされ、俺は飛び蹴りで官制ユニットを凹まされた…この間僅か20秒足らず…正しく化け物だ…

『全機、中破：模擬戦闘は終了…だ。』

虚しく響いた声は唯、木霊する…

あるのは絶望と希望…追いつけなかった屈辱と追いついてやるとい
う気合いだ。

第六匹 【転校生は問題児】（後書き）

中耳炎って何だよってリアともに殴られた…あれって死ぬほど辛いコ…

第七匹 【対抗意識と天敵の実力】（前書き）

うちの主人公は正直、チートです。

マヴラブル世界で戦いぬいたAの記憶とAC世界を戦いぬいたBの記憶

が融合し、【ぼくがかんがえた、さいきょうのりんくす】を地で行っています。

しかし、欠陥がやや目立つのかもしれない。

だてに筆者がダメ人間じゃないからな！！

では、本編スタート（・・・）9m

第七匹 【対抗意識と天敵の実力】

Area - ネクスト用ハンガー

「やはり、プライマルアーマー（PA）がなくても、クイックブースト（QB）さえ使えば問題ないですね。」

「ああ、そもそも運用コンセプトから違うからな。あつちは集団による運用が前提だが、こちらは、一対多数のあちらからしたら泣きたくなる仕様だからな……」

「冷静になるとネクストってありえないスペックですよ。まあ、あなたが乗るともはや、相手は泣きたくなると思いますよ？」

「そこまで、人間やめたつもりはないんだがな……」

最近、激的な魔改造を受け、自分がわからなくなる俺がいるんだよな……

愛：そんなものいらねえって、ただただ、BETAを殺していた俺の記憶があるだよな……

この世界にいた俺は【ループ】していたようで、死んでも11月22日に強制的に戻される

ようで、いくら……いくらがんばっても報われ無い行動に嫌気がさし、戦いを放棄した事も

あるようだ。結局、立ち直ったようだが代償がかなりデカかったようだ……

「夜鷹？ そろそろ、全体ミーティングの時間ですよ。」

「ああ、すぐに行く…」

「気にしてもしょうがない。この戦争は、もうすぐ終わる俺達、ORCAによって…」

Area - ミーティングルーム

「それでは、各国及び各組織の代表者が出揃ったところで改めて計画について説明したいと思う。その前に紹介したい人物がいる。」

アルゴス小隊の責任者：【イブラヒム・ドール】氏の発言により始まったミーティングだが、なんか凄く空気が重い。俺なのか？俺がやりすぎたがいけないんですか？

「今回、新たに参加することになったORCAの二人の…」

「改めて、俺は夜鷹。主に高速機動戦を得意としている。一応言っておくが、これでも18だ。短い間だがよろしく。」

「私は、夜鷹のオペレーター、フィオナ・イエルネフェルトです。今回は戦術機のOSの開発とストレイドの模擬戦時のCPも担当します。」

「よろしく願います。」

あれで18かよとか色々聞こえたがスルーだ。

「今回、XFJ計画において、極東の横浜支部からの提案で『戦術機の機動性向上』を目的にORCAから、ネクストのQBのデータと新たな戦術機のOS、【XMA】の実験運用がきまった。では、説明を…」

「はい、本来QBは原子炉から得られる大電力とAMSによる精密制御から編み出された瞬間加速制御なのですが、

イブラヒム氏が説明した通り、極東の【香月 夕呼】氏からの依頼で自分の研究成果で

QBに必要なAMSの代用にならないかとかねてより研究されているOS…

【XMA】での制御実験が今回の計画で形にします。

最低目標は戦術機による【光線級のレーザー照射を警告がでた後に回避】です。

ご心配なく、本物では無くネクストで使用されているハイレーザーライフル【カノーパス】で代用しますので【死】にはしませんよ？」

凍っていた空気が砕けた…がまた凍った。それも永久凍土。

フォオナ…俺が死んでから何があったの？俺は凄く怖いですよ？

「説明は以上です。質問はありますか？」

「はい！」

「はい、タリサ・マナンドルさん。」

「そのOSって換装はいつ終わるんだ？はやく試したいんだけど

…」

「換装時に問題なければ、各機明日にでも。」

「はい。」

「はい、ユイ・タカムラさん。」

「そのOSは武御雷にも？」

「ええ、ORCAに不可能はございません。巖谷 榮二氏及び、帝国陸軍、斯衛軍にも既に昨日、許可を取りました。問題はありません。」

「はい……」

「はい、ステラ・ブレイメルさん」

「模擬戦に使用される【カノープス】の威力は？」

「通常出力だと突撃級の甲殻を一撃で破壊しました。しかし、今回は模擬戦用に再調整した物を使用するので安心してください。」

「せいぜい、戦車級の攻撃程度まで弱体化しました。」

「いや、問題無いようで大有りだぞ……」

「我々、ORCAは実力主義でありそして、実戦主義でもありません。多少の恐怖がないと訓練にならないでしょう？」

「……」

一同押し黙る……まあ、誰も他所様の実験で死ぬ思いわしたくない

よな

それは分かる…しゃあない、変態はキサラギだけで十分だよな？

「では、今回のミーティングは以上だ。各自、明日に備えろ。」

Side ぐちゃぐちな彼

「く、やっぱり無理矢理はきつかったか…」

先程のミーティングの時から気分が良くなかった…【ああいつた連中】に関わるとどういう訳か体が爆ぜるように痛む、無理に存在しているのは、既に自覚している。

ほかの奴らは知らないが俺はもう長くないだろう…本来、バラバラの因果を無理に

つなぎ合わせたような体だ…【原作】とやらに関わると、【世界の修正力】で精神に

デカイ負荷がかかる。

今後はあまり、関わらないようにしよう…戦闘中に脳死とか嫌だからな。

第七匹 【対抗意識と天敵の実力】（後書き）

以下試作です…

「作者とー」

「夜鷹のー」

「forAnswerらじおー」「」

「はい、始めました。

forAnswerらじおー！、略して【アンらじっー】。司会を勤めます、【作者】とー」

「試作ゲストの夜鷹です。」

「今回の議題は、【夜鷹のステータス】です。」

「あゝ、面倒な議題を…有耶無耶な内に終わらせて、無かった事にしようとした癖にいゝ」

「はい、以下が夜鷹君のステータスです！」

「無視かつー！」

- 基本 -

名前：夜鷹（真名：

疾風）（まだ秘密だよ。）

性別：男

年齢：19

性格：テーマ【悩める青少年】

- A (無印版) -

・基本的には明るく振舞うが、意外と臆病。臆病ゆえに体を鍛え、精神を鍛えている。

香月 夕呼は、命の恩人であり、大切な姉と誤っている。

神宮司 まりもは、同じ(コスプレ的意味合い)苦勞を分かち合う仲である。

頭脳チートの典型で簡単なレールガンを製作したりしている。

恋愛原子核について常に探求している。

基本、モテ男は氏ね派

- B (AC+???) -

・基本一人暮らしであり、無気力キャラを演じているが、その裏は、いかに生き残るか考え続ける苦勞人。

親の遺産に手は付けたくないらしく、学校の学費ぐらいにしか使っていない。

意外とむつつりで巨乳も虚乳も愛せる人間。

しかし、戦場に愛は求めず、ただただ、生き残る事のみを求め続けた。

結果、AC世界に女性に愛される人間になってしまった。

- Bの旅路 - * ()内はループ回数

現実 ??? AC3 ACSL ACLR (五回) ACfA
今

「なんか、大分波乱万丈だったんだよな…俺」

「その分、Aルートよりモテ率が高いけどな」

外伝 【記憶のカケラその2】 (前書き)

特に考えずに書いた…反省はするが後悔はしない。
リア充もげろ…それだけが、私の願いです…

外伝 【記憶のカケラその2】

「さて、弁当出来たし、行きますか…」

俺は一人淋しく朝を迎えた

外伝 【記憶のカケラその二】

Area 通学路

「おはよう、鑑、白銀。

相変わらず、うぜえ位仲良いな…」

「おはよう、ハヤテちゃんっ!」

「おう、疾風っ! 相変わらず、一人淋しく登校か? 一緒にい
ってやるよ」

「黙れ、ハーレム野郎…無礼な口を叩く
と人中にきついのかますぞ?」

「ま、待ってくれ!冗d…ブウラアア!!」

「た、タケルちゃぁーん?!」

それはお前の台詞じゃねえ…平行世界の、司令官の中の人のだ。
誰かが言っていたが、お前を人類種の半分の総意でこの世界から追

放すんぞ？

A r e a 教室

「きりーっ、きょーっけー、れー」

「「「「「「おはようございます」「」「」「」

「はい、おはよう皆…って相変わらずね白銀君は。」

「先生、タケルちゃんは人中を打ち抜かれてましたあー…ハヤテちゃんに」

「あら？ 相変わらず喧嘩っ早いんだから 君は。それが治ればいい子だと思うのになあ…」

「残念ながら神宮寺先生、アイツは人類種の半分の天敵なので、手加減とか無理です。」

「邪気眼じゃないけど手が言うこと聞きませんでしたあ」

「まあそんな事より、今日は転校生が二人います。よかったわね、白銀。」

「二人共、美少女よ？」

ん？二人？ まさか、オルタード・フェイブルAFなのか？

いや、それは無いか…そうしたら三人だしなあ…

「それじゃあ、二人共、入って来て」

「ギャボオー……?!」

「タケルちゃん、うるさい!!」

ガラツつとなつと、一人は予想通りに、紫な髪のポニーテールの冥夜だが、
もう一人は…金髪ショート？ 誰だ？

「それじゃあ、皆に自己紹介をお願い。」

「はい」

「では、私から。」

私の名前は御剣 冥夜という。
短い間だがよろしく頼む。

ちなみに、私は、その白銀 武と添い遂げに来た。」

おお、予想通りの大胆宣言ですな…

鑑なんかフリーズ通り越してブルースクリーンだし

「私はフィオナ・イエルネフェルトです。

短い間ですが、よろしく願います。

因みに私はその【彼】と添い遂げに来ました。」

そういつて、指を指した先には白銀、ではなく、…俺？

何の勘違い？ 恋愛原子核でなく、俺？なんで???

「えっと、俺？」

「はい、貴方であっていますよ。」

疾風さん？」

「…っ?!」

それは…俺が初めて哀れみと祭と遊び以外で見た美しい笑顔であった。

しかも、見た者に「その時君は、美しい…」と思わせるようなとびっきりのやつだ

「はい、じゃあ御剣さんはそこで…イエルネフェルト「長いのでフィオナでいいです。」フィオナさんは、君の隣に座ってください。」

そういつて過ぎていく行く時間…俺は何故、こんな事になっているのか、さっぱりだった。

なんで、AC4のキャラがいんのさ？

「あの、少しいいですか？」

あれ、マジなのだろうか…恋愛原子核に軒並みフラグをかつ掠われるので信じられない…しかも、AC4のキャラだと？

もはや、笑うしかねえよ…

「確か、フィオナ・イエルネフェルトさんだっけ？」

【はじめま

して】、疾風です。」

「…はい、気軽にフィオナって呼んでください。
私は疾風って呼んでいいですか？」

なんで、不満気なんだこの子？ 実は他人行儀は嫌い？

「別に構わないよ。俺、苗字で呼ばれるの好きじゃないんだ。」

「よかった…では、行きましょう」

「行ってくて、何処に？」

「勿論、私達のa「疾風えく、ゲーセン行こうぜえ！！」…チッ」

「（今、この娘、舌打ちしたっ？！）うるせえ、フラグ一級建築士
っ！ 行くから先行ってる、人類種の半分の天敵めっ！ もげて
しまえ！」

「…あの、私も一緒に行ってもいいですか？」

「おうっ 寧ろ歓迎するぜ、フィオナ！」

「っ？！ はいっ！ ご一緒致しますっ！」

この娘…やたら絡んでくるなあ…別に良いがゲーセンとか大丈夫
かな？

御剣ほどじゃないが箱入り娘っぽいし…

Area ゲーセン

「つてえ事で、疾風え…勝負だっ!!」

「黙れ雑魚…万年アルゴスの連中に連負けするような奴に負けるほど【ランク1】は甘くねえぞ…負けたら飯奢りな?」

「ふん、ほえ面かかせてやるぜ!」

「はっ、進化の現実を教えてやるっ!」

「武は今から何をやるのだ?」

「【バルジャーノン】と言うみたいですが…ロボット物の対戦型ゲームみたいですね。」

武が選んだ機体は多分、カイザーだろうが…俺が選んだのは普段使わない…否、使うと強すぎる【アヌビス】だ。

オービタルなフレームを想像するだろうが見た目は正しくそうだし、EN消費量は半端なく、基本プレイヤー達からは半ば半分、産廃扱いされる不遇な機体だが、俺は良く訓練されたレイヴンだ…

そういつた鬼EN管理は寧ろ、好物だ…

『おせえっ!!』

『あがぁー?!』

『は、覚悟と技術を磨いて出直しなっ!』

俺のアヌビスのレーザーが武のカイザーを正確に狙い打つ…所詮
中級者程度か…

これなら、アルゴスのあいつらの方が強い…こんなので大丈夫か、
世界？

「おい、アヌビス使いだぜ…しかもPilotNameは…YOT
AKA? ってランク1じゃねえかつ?!」

「すげえ！ サイン欲しい！」

「抱きしめてっ！ 因果の果てまで！」

「やらないか？」

「うち、目立ちすぎたか…三十六計、逃げるがしかずってね

「悪いが大会ルールの都合上、そんなにぼんぼん戦えないんだよ。
挑戦はいつでも待ってるからな！」

「そういつて、荷物を掴んで俺は走り出した。

鑑達をおいて…

「ここまで来ればセーフかな…？」

「全く、いきなり走り出すなんて酷いです。」

「悪かったなって…なんでお前らまでいるんだよ…」

そこにいたのはバルジャーノンをやりに行ったメンバーだった。

白銀や鑑は息が切れていたが、御剣は当然として。何故かフィオナも息が切れていなかった。

「私は鍛えているからな、当然だ。」

「私は父の仕事の関係上、体力は自然と付きますので、嫌いですが？ 体育会系の女の子は。」

「まあ、此処で解…散…。」

予想をしていたが一足先に更地になった我らが町、柊町…だった物。

あれ？ 更地イベントって公園イベントの後じゃ…

「（まさか…御父上か…）ボソッ」

聞こえてますよ？御剣さん。
なるほど、水面下の戦い…か…

「まあ、俺ん家探すかあ…。」

「行きましょう。 私達の愛の巣が待ってます。」

誰かこの娘なんとかしてえ…まさか、ヤンデレ？
そうゆうのは、二次だけにしてくれよ…

「これまた…懐かしい夢を…」

何となく予想が出来そうな世界だった

そもそも、ACシリーズという作品が無いこと自体がおかしかった…
俺が何者かは思い出した、だがなぜ【そうだった】かは未だにわからない…

それに…

それに、こんな事を思い出すという事は大分、俺という存在は順調に消えていく証である。

俺の同位体が結んだ世界との契約の都合上、依頼が成されるまで俺はこの世界に捕われるだろうが、その後は、予想も出来ない…そんな事より今は…

「なんで、先生が俺のベットにいるのさ…」

「ん、んん…」

この人は、言動こそは熾烈だが、優しい人だ。しかし、人が死にかけてるところしてベットに潜り込む悪癖がある。しかも、薄着で。

「はあ…フィオナまでいるし…なんでさ。」

理解しがたい状況だから理解より現実逃避を優先した俺はまた、寝直す事を決行した…美女を両側に侍らせて…

はあ、死にたい…リア充とか無理過ぎる、寝なおそう…

外伝 【記憶のカケラその2】 (後書き)

リア充…おかしい、最初、BETAとドロドロさせるつもりだったのに、恋愛でドロドロしてる…

第八匹 【粉碎者がなく頃に】（前書き）

今回はかなり難産：難しい、やはり、運ゲーは難しい。

第八匹 【粉碎者がなく頃に】

心かき乱れ、飛び出しそうだ。この想いを感じてくれ。
この戦場で何を思う？ お前の答えを聞かせてくれ。

S i d e - ? ? ? ?

『回収対象及び、X A - 2 6 4 8 3 …確認、作戦行動開始…』

A r e a - ユーコン基地
S i d e アルゴス小隊

『これより、新型機および新型OSのテストを開始します。』

「始まったな…」

『ああ、QBか…とんだじゃじゃ馬だよこれは…』

快晴の青空の下、不知火・弐型に搭載された新型OSによる実験
が開始された…

内容は、戦術機がQB使用時の制動実験とデータ採集、その後、O
Sを最適化し実験の繰り返しだ。

『く、きつい…なんだよこの急加速！喧嘩売ってるようにしか感じねえぞっ！！』

「何言ってるんだ、傭兵共は、これが、基本動作なんだぞ…弱音吐いてる場合か…」

『くっ…ぐあっ？！』

ネクストから、際限無く、打ち出される光弾が、機体を削る…未熟者と笑うように…

『馬鹿にするなあー！』

ガウンツ！

『不知火・弐型…頭部大破。一度帰還してください。』

『くそっ、帰還します。』

これで通産8度目の部分大破…一度目は左腕、二度目は右腕、三度目は跳躍ユニットだったか…もはや、詳しく覚えていない。

「ネクストが凄いのか…乗り手が凄いのか…判別着かないな、こりゃ…」

「当然、乗り手に決まってるだろう？ 何せ、私の最高傑作なのだからな。」

皆、一斉に声のした方を見る。

そこにいたのは黒髪のセミロングの女性、全体的にきつめな、悪く

いっとドSっぽい雰囲気を漂わす人だ。

「セレン・ヘイズ、貴方は確か、欧州に行ってる筈ですが…」

「ああ、それならもうすんだ…」

私が反応炉を破壊して終いだ。5人もリンクス…その内、二人程高ランカーだぞ？さっさと落ちない方がおかしい。」

さも、当然のようにいうセレン。周りの視線は痛いが…

「仕事が済んだなら寄り道してないで、さっさと帰ったらどうです？」

「問題無い、私は【僚機】としてきた。」

「おい、スケジュールDが終わったんだが…」

何処までも空気の俺だった…オツツダルヴァ、あの台詞、洒落になっけない。

「それでは、各機補給に戻ってください。夜鷹機は交代です。」

『了解、今から戻る。』

Side 愚か者

「ユーコンのXFJ…ようやく、終わりが見えて来たか…」

「そつだ、戦術機によるQB…これでようやく、戦術機とORCAのネクストが並んだと言う事が…」

「計画の方は、どうなっている？」

「既に、基地内に元素の設置は完了している…偵察部隊が発見した、師団クラスが基地に殺到…か。やり過ぎじゃないか？」

「相手はネクストだ…やり過ぎなんで事は無い。」

「相手は二機だ…BETAの物量の前には無意味だろう…皮肉だな。」

「しょうがないさ…全ては我らが祖国の為に…」

「…祖国の為にっ！」「…」

『コード911、発令！コード911、発令！ 繰り返します、コード911、発令！』

「く、こんなときに…」

「ストレイド…迎撃行動に入る。」

「待つて、戦闘用のカノープスに換装してから…」

「突撃ライフルがあるだろうっ！ そつちを頼むっ！」

「すぐに手配しますっ!」

「先に行くぞっ!」

「セレン、気をつけるよっ!」

「任せろっ!」

『何だ…コイツ…まるで機械、ぐ、グアーツ?!』

『後退しろっ?! コイツ、ただのBETAじゃないっ!』

『コイツ、レーザーを撃ってくるぞっ!』

『こちら、シリオジエ。下がっている!』

『すまない、リンクス。皆、今のうちに体勢を立て直すぞ!』

『『『『了解っ!』』』』

ユーコン基地を突如襲ったBETAの大群は、息をつく暇もなく攻め立てていく。始めは拮抗していたが、突然現れた赤い固体に前線が破壊された。

二本の青い剣を携え、赤い鎧を身に纏い、戦術機を破壊しつくす姿はまるで…【粉碎者】のようだった。基地には謎のジャミング

がかけられており、通信は軒並み壊滅していた。
戦術機は普段の通信とデータリンクが不安定なせいで、いつもの力が発揮できないでいた。

その皺寄せは、一人でも戦える物に行く…

『く、やはり、通信が無いと厳しいか…く、ぐあー！』

徐々に押され出すシリオジエ…青い刃が迫ったとき…

『させるかあ！』

戦場に降り立つは橙色の閃光…突撃ライフルとハイレーザーライフルを構える姿は味方に普段の手強さも手伝い、安心感を与えた…

『なんで、貴様がいるのか知らないが…また、俺の道を邪魔するなら粉碎してやる。』

『…』

赤い機体がブレードを振るえば、橙色の機体は急加速で避け、橙色の機体が弾丸を放てば、赤い機体は距離をとる…

かれこれ30分程、膠着状態が続いていた…

『なら、これでっ！』

弾が少なくなったライフルをパージし、格納してあったブレードを取り出す…二本詰みたいところだが、積載量を考え、AALIIY AHは一本だけにしている。

赤い巨体がブレードで踏み込んだら、ドリフトターンで回り込み…

『食らえっ！』

居合切りのように敵を引き裂くっ！

『…』

セレンも周りもただ、見ることもしか出来なかった。セレンは、自分がてこずった相手に対して、余裕で倒した事に対し…周りは自分達を蹂躪した怨敵をあつさりと倒した事に対してだった。

セレンは、この時、こんな言葉を思い出した…【粉碎者】という言葉

S i d e 粉碎者

『データ…ファイ…ドバツ…ク…、確認…、製…造段階…四…脚か…ら、戦…車に以…降、確認、目標の…捕獲はシツ…敗、作戦目標は、クリ…ア、人…類は、…よ…うやく、ヒ…トツ…ニナル』

『フィードバック確認、個体、粉碎級の改善…完了。 作戦目標に動きがあるまで待機。』

S i d e 天敵

なんで…なんでナンデ何でナンでなんデナンデなんでナンデ？！

何故、奴がいる…嗚呼、またか。
また奴との進化合戦が始まるのか…

ジャックが、何度もループする事で手にした人類の勝利はこれで、
ちやらになったのか…

団長達に報告し、早急に対策を取らねば…いくらネクストであつても限界がいずれ来る…

嗚呼、急がねば…急がねば…粉碎者は天敵たる俺のように、“総て”を喰らい尽くすまで戦つたらう。

第八匹 【粉碎者がなく頃に】（後書き）

うちの弱王は真面目です。保志ボイスです。ウツデイです。

まあ、出番はないが…

QBによる、戦術機魔改造計画ですが、失敗そうで成功？しています。

結果がどうあれ、QBは出来ています。

…もう、ゴールしてもいいよね？

閑話 【この世界に…救いは無い】（前書き）

短めなのは、レポートやんなきゃいけないんだけど、やる気が出ないまま書いたから。

いつか誰かが行っていたORCAの思惑編

希望の合った裏製作秘話は、ガチでネタバレになるからまた今度で…

スイマセン（m|_|）m

閑話 【この世界に…救いは無い】

俺は深海を泳ぐ深海魚…全てはお前の思考の果てに…

第九話 【この世界に…救いはない】

A r e a - B I G B O X

B I G B O X内の団長室にて若い青年…夜鷹と、若々しくも風格の漂う男性…マクシミアン・テルミドールが談笑とは程遠い…暗い雰囲気では話していた

「全て…メルツェルの策謀通りか…」

「ああ、まさか、パルヴァライザーの登場のは驚いたがな…」

「アレは、所詮紛い物さ…本物はもつとえげつない。」

「知った口だな…何を知っている？」

「ふ、そうだな…あえていうなら、『全て』だな。」

「全て？」

「そう…全てだ。パルヴァライザーの…新種として出てきたB E T A総てを…俺は知っている。」

「ほう…まるで、総て知っているような言い方だが？」

「正解だよ…いずれ、総て話す。あの馬鹿が来たら嫌でも事は進む…筈だからな。」

「その事だが、お前にこのミッションを行って欲しい。ORCAとしての依頼だ。行ってくれるな？『レイヴン（独立憲兵）』？」

「へえ…クレイドルほどじゃないが…了解。直に向かう。」

「今回、オペレーターは鑑 スミカに頼んである…後でミーティングしておけ。」

「この依頼にアイツを？ 意外と鬼畜だな…団長。」

かしこまった態度でテルミドールは夜鷹を見つめ…

「お前ほどじゃない…『天敵』であり、『粉碎者』。」

「確かに…愚問だったな…忘れてくれ。」

フシユツ…カシヤ

「行ったか…あの勘でハリと同一年とはな…世界とはままならない物だ…」

テルミドールが手元の電話を操作し、あるところに電話をかける

「ああ、久しぶりだな…ユウコ？ え？呼び捨てするな？ 気にするな…私は気にしない…例の計画だが、ちゃんと粉碎者は受けたよ

…とてもうれしそうだったよ。

それから、アイツはどうやら『総て』を知っているようだ…君の持つ石も、もしかしたら知っている可能性がある…今度の商談の際に連れて行こう…でわ。」

プツ…ツ、ツ、ツ

「ふ、残念ながら…二者択一など必要ない…そうだろうか？メツツエル？」

「当たり前だ…所詮、こんなぬるま湯のような世界で我等を止められるのは、粉碎者位なものだ…最も、アイツはこちらの計画には全面的に賛成のようだがな。」

「当たり前だ…アイツはレイヴン…戦争屋であるが、同時に破壊者でもある…気に入らない計画は前面的に破壊しつくからな、いつかのレイレナードのように…」

「テルミドール…」

「大丈夫だ…切り替えくらいは出来ている。」

その後、男二人による酒盛りがつつましく開かれていた…あの時、夜鷹の持っていたミッションファイルには、しっかりと『A I t e r n a t i v e 5 計 画 破 壊』と記されていた事を思い出しながら…

IF…オマケ? 【聖夜の鬼劇】(前書き)

こんにちは、聖夜にリア充氏ねを道端で叫ぶ秋永です。
今日は、本編も、外伝も関係ないいわゆるギャグです。
お楽しみに…ね?

IF…オマケ？ 【聖夜の鬼劇】

ORCAが企業も覆し、世界を宇宙への道を築いた世界に…彼は
いなかった…

彼は、企業の最後の抵抗とも取れる、クレニウム・アルテリア爆破
により、この世から消えてしまっていたから…
今、彼が居る世界に、戦争は無かった…

IF 【聖夜の鬼劇】

「ふぁ… ああ、ねみいなぁ…」

朝露が凍り、霜になる12月24日…白綾柊の終業式の日であり
…聖夜とも呼ばれるクリスマスの前日、【クリスマスイブ】でもある

「疾風え〜終業式に遅刻するわよ〜！ フィオナちゃん迄遅刻さ
せる気い？」

「はーいつ！ すぐに出るよっ！！」

典型的かつ、今時珍しい、極度に朝の弱い人間でもあった…因み
に、フィオナとは、俺の父の友人の娘で、良い年齢になったら、見
合いをさせようとか、馬鹿な事を抜かしているようで、フィオナに
とつてもいい迷惑だろうにな…

「いつてきまーすっ！」

「いってらっしゃーい…背中にも気をつけなさい。」

「…」

別に、向かいのハーレム野郎と違い、俺はモテないからな…家族とクリスマスを過ごすさ、所詮。

変な感慨に浸っているとフィオナが機嫌良さそうに挨拶をしてきた。

「疾風、おはよう。」

「おはよう…フィオナ。ふああ…やっぱ、ねみい…」

「ははは…なんだったら、腕でも組んで温め合いますか?」

「恋人でもないし…遠慮しておくよ。好きな奴の方がいいだろう?」

急に不機嫌になったフィオナは…

「…むう、先に行っちゃいますよ?」

「勘弁してくれ…俺が死n…」

突如、黒髪をセミロングにした女が曲がり角から現れた…うちの制服着てるけど、その女は、俺達の目の前で、仁王立ちになり…

「見つけたぞ…私の好敵手…」

「…へ?」

「よもや、忘れたとは言わせんぞ… YOTAKAっ！」

「何の事だか… さっぱりだなあ？」

「ふん… 今時いないジェフティ&アヌビス使いなんてお前位だ… さあ、私と来てもらっぞ？」

フィオナが焦った様子で割り込む

「いえ、意味不明ですっ！」

しかし、得意気な表情で女は答える

「ふ、私を倒せる奴は早々いない… お前には、私こそが相応しい… さあ、聖夜共に過ごそうじゃないかっ！」

いえ、得意気かつ、勝ち気に言われても意味わからないから、それ…

「…その前にお前、何者だよ？」

「…私か？ 私の名前はセレン・ヘイズ… 和名は霞 スミカという。まあ、日本人とイタリア人のハーフだ。」

「丁寧にも、俺の名は…」 疾風だろう？ お前は有名人だよ。」「…は？」

俺が… 有名人？ ありえん（笑）

恋愛原子核が核分裂起こすくらい有り得ない

「白陵柊最強の男…暴力、知略、あらゆる術で、他人を凌駕し尽くす異端児だろう…かなり、有名だよ。『あの』香月 夕呼と夕メを張れる数少ない人物でもあるしな。」

この三年間…どうすれば、恋愛原子核を打破出来るかを、常に研究していたから、自重を忘れていた…

フィオナはやや、狼狽した様子で、セレンに問い掛ける

「それが、クリスマスを彼と過ごすのと、どう関係してくるのかが、さっぱりですっ！」

「私はな…自分より強い奴を、常に探し続けていた…私は、私が許した男しか抱かないと決めていたんだ…さあ？ どうする？」

セレンは、Dカップほどの胸を強調するように手を組み、俺の返答を待つ…俺は…

「ああ、断るよ。バイトで忙しんだよ…また今度な…」

クリスマスを誰かと過ごす？ ありえんよ、俺が女と二人きりとかコ ニー としを、ボール一機で止めるくらいありえん

「な、待てっ！ 話はっ！」

「じゃあな、また今度…」

「お、おいっ！…くそ、相手にもされないなんて…」

セレンは一人黄昏た…自分より強く、尚且つ、自分を大切にしてい

くれそうな人物に振られたから…がつ！

「なんだ…簡単な事じゃないか。あいつの後ろから、憑いていけばいい…ウフ、フフフ…」

笑顔は美しいが、言っている事はストーカーだ…誰か想像できるだろうか？
この結末を

教室に着き、俺はやる気のない挨拶をする

「おはよう、皆の衆…」

が、女衆は変わらないが、男衆はなんとも言えない殺気が流れていた

「オツス…え？」

「なん、だと…」

「おん…な？」

「なあ、俺の目がおかしいのか？ 疾風の隣に女がいる…」

「…あれ？ なんで？ なんで、不良の疾風の隣に女の子がいるの？」

三者三様、十人十色…そんな四字熟語が似合いそうな反応であった

フィオナは、既に女子の群に消えていた

ドタドタという擬音が聞こえそうな足音のような物が聞こえる…
悪友の武達は遅刻スレスレにくるから、問題はまだない…それに、
ここはあいつのいるクラスの隣…3 Aだ。

「このクラスに、疾風がいるだろうっ！ 放課後に体育館後ろの庭に来いっ！」

そういつて、女は去っていった…確か、セレンだったか？

「訳…わからないねえ」

「疾風…行く必要なんて無いんですよ？」

フィオナがいつの間にか居た…確かに、行く必要は無いだろうな…だが、

「喧嘩売られて、逃げられるかつ」

「へ？」

「俺はな、フィオナ…喧嘩売られて、無視して寝れるほど神経図太くないんだよ。」

普段、朝に爆音で起きないくせに何を言うかと思いきや…おかげ
であんなことやこんなことが出来るが言わないが…

「つーわけで言ってくる…夕食前には戻るって伝えといてくれ。」

「ちょ、ちよっと待って」

俺は走りだした…血統の地につ！

この状況は三者三様、十人十色でこつ答えるだろう…『修羅場』と

「よう、きたぜ…」

「ふ、見込んだ通りだ…だけどな？ もう、勝負はついた…」

「へ？ うわっ?!」

突如、上から網が降ってきて俺は隙がどうしても出来てしまった…
そして…

「ふふ、しばらく寝ている…次に合う時が楽しみだよ…」

「く…そ…」

俺は、意識を失った…その後、俺は意識を取り戻すことは無かつた…

DaedEnd…

「以上、クリスマス企画のおわり」さてや、こらあ！」「ぶらああ
?!」

「人を殺すんじゃないっ?! Aは? Bは? Cは? 濡れ場は
どうした?!」

「無理」

「即答かつ?! なんd「作者の趣味が露見するので無理です。」
なら、しょうがない…」

「まあ、オルタード・フェイブルAFは多分やるから…安心しろ。」

「ああ、今は、我慢してやる…」

「でわ、また本編で〜)・(ノシ」

「ちよ、じゃあなっ!」

IF…オマケ？ 【聖夜の鬼劇】（後書き）

ふう、上腕二等筋がいてえ…

第九話 【破壊しか出来ない僕達だから…】（前書き）

若干、ソードマスター大和な話…すみません

第九話 【破壊しか出来ない僕達だから…】

予想を裏切らず、ミーティング中の鑑は、顔色が良くなかった…
まあ、逃げる為の連中を切り捨てるだけの【当然】の選択をした
だけだが、俺は間違っていないわけではないが、足手まといは寧ろ
殺すのが俺のやり方だ…

ああ、そういえば…

「ミツシヨンの二日後は、10月22日だったな…やっぱり、気になるか？」

俯きがちに、鑑は答える…罪悪感に押し潰されそうなのか？

「気にはなるけど…それ以上に、夜鷹…さんが、なんでそこまで非情なのか…私にはわかりません。」

なんつー根本的な問題を…

「なんだ、そんなの簡単だよ。」

ムツとした表情で反論する鑑は、どこか懐かしい感じがする…俺の記憶なんてコイツらの事をつくに忘れてたのにな…なんか、変な感じがする。

「簡単だつてなによお…人を殺すんだよ？ 怖くないの？」

「バーカ。俺からしたら、お前らの相手になっている共通の敵のBETAな方が怖いよ…あんなもんを持ち出しやがって…」

「あんなもん？」

「気にすんな…早い話、理解できない相手か否かの話だよ…俺の世界じゃ、経済戦争で毎年、億単位で人が死んでるしな…」

「そんな…」

「まあ、罪悪感が完璧に無いなんて言う嘘になるし…そこら辺は個人差だろうなあ…」

例えば、偽善者のウィン・Dは在り方は嫌いじゃない。しかし、殺戮者の古王ことオールドキングな在り方が嫌いかといわれれば確実にNOだ。

むしろ、奴と俺は似てるしな…誘われて行ったクレイドル襲撃は爆笑しながら打ち落としたりしな…おっと、黒歴史だった。

「…まあ、今更ここまで来て、一々、夜鷹さんの在り方を否定するつもりは無いけど…人類生存のある意味確実のm…それはないな…ナンセンスだな…」…へ？」

「BETAは、聞くところによると、地球外来種…しかも、銀河の外からの可能性が高いらしいじゃないか…」

「う、うん…今のオリジナルハイヴも元は月から来たんだし…」

「だから、地球の外に出る方が危険だと普通考えないか？ 月に光線級がない保証は無いしな…」

実はいた。メルツェル達の調べでは、月はもはや奴らの要塞だ

つたらしい…ORCAがこっそり貰って、もはや、技術者の巣窟らしいが…

「むう…でも…」

「まあ、良いんじゃないか…私腹の肥えたメタボ連中を皆殺しな訳で、世界平和には一歩近づくわけだし…」

「そうだよな…平和には少なくともなるよねっ！」

世界平和なんて言葉…嘘に決まってるだろ…BETA達をこれから、皆殺しにしたとしても、その後は楽しい各企業による経済競争だろう…最も、この世界の企業は軒並み食われるだろうがな…

「それにしても、宇宙空間での戦闘か…久しぶりだな…」

「…？ ネクストって宇宙空間での戦闘って無かったよね？」

「いや、気にすんな…独り言だから。」

「もう、そればっか…先に行くね。」

「おう、資料を流し読みしたら行く…」

パシユ…

扉が閉まり、俺は椅子に重いつきり寄り掛かった

「…にしても、変な感じだよな…守っていた物を破壊するなんて…」

アイツの記憶を辿って行き、思ったことだ…同一の癖に…何処ま

でも違う俺達に苦笑いしかない…まあ、一言あるなら…

「まだ、大丈夫なんて思っている世界を殺して回りますか…」

高笑いしたい気持ちを抑えて、俺は、椅子から立ち上がる…もう決めたんだよ、迷わないと…天敵なんだと自らに言い聞かせている自分に気付いて結局、高笑いしてしまった。

BIGBOX上部の特殊カタパルト…どうみても、衛星軌道掃射砲から打ち出された俺は今、宇宙空間にいる…なんか、テンションが上がって来た。

『ミッション開始…目標の破壊を優先して下さい。なお、遼機として今回はレイテルパラッシュが来てくれました。』

『ウィン・D・ファンションだ…さっさと落して帰ろう…見ているだけであれば、イライラする。』

「了解…俺が切り込むっ！」

力無き民の為に戦うウィンディ的には権力者共の逃げ道である方舟は許容できないよな…いいぜ、今日も俺のドラゴンスレイヤーが唸るぜっ…!!

「ストレイド…目標を切り裂くっ！」

『レイテルパラッシュ…目標を打ち抜くっ…!』

0 ぐっこしてたら、皆真似しだして恥ずかしい今日のこの頃…

『こちら、第五艦隊つ！ 突如、ネクスト二機の襲撃を受けたつ！
もう、もた…ガアガガ…』

10月20日…突如、ネクスト二機がオルタネイティブVの中核を担う通称【第五艦隊】が襲撃された…
犠牲者は作業員約二千人、護衛していた衛士約三十五名…戦術機はどれもアメリカの最新鋭機であるラプターであった。

後日に、アメリカの秘蔵つ子部隊【インフィニティズ】のいた基地がネクスト一機に襲撃された。
インフィニティズは、皆、KIA判定になり、乗っていた機体は原型を留めない位に破壊されていた。
そして、彼らが駐屯していた基地は、焦土と化していた…

この二つの事件に共通しているのは、同型の橙色のネクストが行ったという事である。

この事件の二日後、ORCAからある声明が発表された。

『地球で、今も戦う仲間を置いて逃げようという愚か者がいることに、我々は絶望した…故に、我々はそんな足手まとい達を粛正させてもらった。

私達は、あくまでも、理想を友に集まった同士達と共に戦っているつもりだ…皆はそうだと信じているぞ？』

脅しであった…横浜基地の副指令との関係性を指摘されたが、明

確な証拠が見つかる訳無く…

この事件は後に、【1020事件】と呼ばれるようになった…

『これで、満足かな？』

『この上なくね…それより、ストレイドって何者よ。ネクストのスペックを考えてもこの戦績はおかしいわ…』

『勘違いしないで貰いたい…貴様は、あくまで依頼人…所詮は金鶴だ。そんな機密を教える訳無かるっ？』

『そうね…聞いて教えてもらえるとと思ってなかったわ…それより、明日来るんでしょうね？ あんたのこのご自慢のリンクスは…』

『ああ、約束しよう。 どうせ聞いたら本人からの方がいいだろう？』

『ええ…そうさせてもらっわ。』

『ああ、後、子供のように機嫌を悪くすると相手に笑われるぞ？』

『しるわいわねっ…！』

ブシ…ッ、ッ

「それにしても、白金 武か…死人が今更何のよう？」

「あ、あからさまに機嫌悪いですね…先生。」

今日は10月22日…私達が明星の鬼神と呼ぶ存在が来る日に何故かこの男が早朝にやってきた…【石】の予言ではコイツが別の英雄のようだ。

しかし、今日は大事な日で一日牢屋にぶち込んでやるうかと思えば、この男は【第四計画】について知っていた…後、何故か社についても知っており、無視出来ない案件に化ける物だから始末に終えない…

「で、あんたは何者なの？ 時間無いから迅速かつ、簡単にね…」

「俺は、この世界を3回ループして、この世界の未来からきました。」

「解りづらい…罰として、床に正座二時間…後、発言権を剥奪するわ…」

「ちょ…『副指令…例の人物が…』え？」

「来たわね…入ってもらって頂戴…」

『わかりました…では、二分後に…』

「ええ、お願い…さて、あんたは隣で罰を続行してなさい…」

「（コクコク）」

退場する武の姿はどこか、悲しげだった…

「久しぶりだな、ユウコ博士。コイツが私が言っていたリンクス…夜鷹だ。」

「っ?! そう、意外と若いのね…てつきり、四十代前半だと思ったのに…」

「見た目はあんなのだが、通算年齢は百歳、誤差は二十は固いな。正直、コイツ一人で世界破壊は確実だぞ?」

愉快な…日常会話のような感覚で大変な事を言うのが、団長クオリティだ…やれと言われればやらなくもないが…

「それより、そいつがこの場所を制圧したなんて、信じられないんだけど…」

「ふむ、月面ハイヴも制圧したのコイツなのだが…ちよつど良い。隣の部屋の男とやらせれば解りやすいだろう。」

「ちよ、月面ハイヴって貴方っ?! それに隣の部屋に男がいるなんて思うのよ?」

「現にいるだろう…夜鷹…引きずり出せ。」

「オーケー…さっさと出てこないとテメエのある事無い事ばらすぞ

…【武】?」

軽い調子の会話だが、その実は、細かい牽制の仕合だが、ペースは完全にテルミドールが握っていた。

隣の部屋に続く扉から、武は持てる警戒力を持って現れる…

「何物なんだ…あんたら…」

「は、全部知ってるぜ？　なあ、恋愛原子核？」

「っ？！」

過去に、友人に怒りと侮蔑とある種の尊敬を持って付けられた愛称を呼ばれ、武は、少なくとも動揺した…

「まあ、雑魚には用は無いな…何でいんの？」

それは、自分も聞きたいと思いつつながら、武は焦燥した表情で答える

「なら…試してみるか？」

「お、いいねえ…その表情　大好きだぜっ！」

「ちょっと、何勝手に決めてんのよ…」

「いいだろう？　どうせそのつもりだったし…楽しくやろうじゃないか？」

「まったくもお…マイペースな奴らばっかよ…」

己の不幸を呪いながら、でも、会いたい人物に会えてやはり、嬉しい香月先生であった…会えた人物のあまりの違いに合成コーヒ―を吹き出すのも時間の問題だが…

強化装備に着替えた夜鷹と武は、戦術機のシュミレーターでここ、
荒廃都市部にいた…

「勝利条件は、どちらが動けなくなるようなダメージをくらうまでよ…社、後はお願いね…もう、疲れたわ…」

「それでは、模擬戦闘を開始します…」

武は不知火で、夜鷹は陽炎で出ていた…新型OSは未だに対応していないが、どちらも名機と呼ばれるだけのポテンシャルは有している…戦い、否、処刑は始まった…

「何処にいる…まったくわからねえ…」

殺伐した空間、息が詰まる程の殺気が、演習場を包む…観客席の観客をも震え上がる程の濃密な殺気である

ドウ…ガンッ！

「なっ?! 何処から撃って来たんだ!」

長年戦って来た武であつてもわからない程の攻撃…せめて一矢報
いたいところだが…

「隠れるのがやつとか…姿位は見たいところだが…厳しいな…月詠
さん程か…それ以上か…」

冷静な判断が戦って勝つ事は、厳しい事を告げる…相手は悔しい
が自分より遥かに強い…殺しのプロでもここまでやれる奴はいない
だろう

「っ?!…なんだよ、あの機動っ!?!」

自分の持つ機動概念を遥かに上回る程の機動…人間では到底出来
ない機動をあの男は、平然とやっている…それが武にとつては悔し
く感じると同時に興奮した…何処か懐かしさを感じるが、明らかな
進化の最前線の力に武は興奮しているのだ

『官制ユニット大破…シルバー1、帰還してください』

「了解…帰還します。」

今は、この悔しさを糧にしようと思つた…今度こそ、二度目こそ
皆で勝利を祝いたかつた…

「正直、拍子抜けだよ…」

「夜鷹さんがおかしいんだよ…確実に」

白金との模擬戦…私刑にも近い状態だったのは、否定しないが、文字通り意外で拍子抜けだった…

こいつ、この程度で人類に活路作つたのかよ、と

「純夏、行かなくていいのか？」

「いや、仕事終わったらちゃんと行くよ。ふぁんとむをしに…ね…」

端末を弄っていた純夏が黒い笑みを浮かべていた…確実にフィオナの影響だよ…セレンは、言動こそ怖いが、黒いは無いし…

「なあっ！ さっきの陽炎に乗ってた衛士はいなかったっ！」

「ん？…面倒が歩いて来たよ…純夏、パス。」

「ちょ、ちゃんと対応くらいしてよ、全く…はい、ここだよお！」

「ちょ、何で純夏がいるんだよっ！…」

「今、忙しいから後でねっ！」

おまえら…やっぱり、仲良いのな…ふらやましいよ…俺個人の友人ってハリとロイ…くらいだよな…寂しいぜ

「よし、報告完了　じゃあ、いつてくるね。」

「いつてらっさい…帰ってこなくてもいいぞ…」

「ええ、酷お、夜鷹さんなんか知らないよおーだ、べえ」

「辞表と受け取っとく。」

「それは勘弁してえ？！」

「さっさと行ってこい……」

時間は過ぎていく…様々な思惑と思いを乗せて
力強く羽ばたいた鷹は、どのような世界を見る…

第九話 【破壊しか出来ない僕達だから…】（後書き）

3からf Aまで休み無く戦い続けたら嫌でもドミナントなるのではないかと考えた主人公設定

やはり、ORCAなら中途半端な計画（敵前逃亡かつ現実逃避のような感じだから）は認めないだろうと5には灰燼になっていたきました…もう、ORCAは止まらない

ACfAであった、MOSを破壊するミッションをベースにインフィニティーズ全滅とかを書いてみた…TEAMメンバー減るけど知ったこっちゃない…それが、俺クオリティ

第五艦隊とか適当です…ごめんね

第十匹 【壊れたカケラ】（前書き）

ようやく、本編？

若干、不完全燃焼気味な気分だけど…無難に書かないと後で困るし

第十四 【壊れたカケラ】

「あゝ…そうか、横浜基地だっけ…か？ たりいが…まあ、いいかな、なるようになるさ。」

夜鷹の朝は早い…10時頃に寝て、朝の4時に起きる

実質、6時間しか寝ていないが、今回に限っては6時半に起きてしまった…ベットの寝心地が良すぎるのも考えものだなと一人ごちりつつ、昨日の敵を強襲しにいった…この間、僅か四十五秒である

第十四 【壊れたカケラ】

「おら、起きてるか…って、スマン…情事中でしたね、スイマセン…非リア充だから、金属バットを持って来てますね。」

「待て、誤解だ…待てくれっ！ ちょ、よ、夜鷹さあくん?!」

ハリセン持って、白銀の部屋に殴り込みに行ったら、美少女二人と添い寝をしていた野郎がいた…何を言っ t (ry

「とりあえず、早くしろよ…聞きたいことがあるって言ったのは、お前だからな？」

「はい、スイマセン」

綺麗な土下座をされても無駄だ…お前は俺を怒らせた

日が出かける光景を眺めながら、俺はイラついてた…何だよ、ここ…戦争中だろうが、なんで、集団の6割が寝るんだよ…普通は2割だろう…舐めてんのかよ…戦争をさ…それとも単に、BETAがぬるいだけか？

「すまない、遅れたっ」

「たく、ポケナスが…白銀 武ってこんな…ダメ人間だったな、そういえば…」

「そう、それだよ。 あんたは、俺の何を知ってんだよ…」

「単刀直入尚且つ、単純明快に言うと、【全て】だな。」

「【全て】…？」

「何故、因果導体になったか、何と戦って来たか…そして、戦い抜いた先の未来も大体予想は着いている…」

「未来…？ BETAに人類が勝利するんじゃないのか？」

「バアゝ力、勝利は既に確定してるんだよ。」

「…へ？」

武は、信じられないという顔…所詮、ギャグ顔で呆然とした

「こちらで、月面ハイヴを落とした…現在は、うち管轄の研究所だよ。」

「月面ハイヴをだつてっ?!」

「声デカイんだよ馬鹿…まあ、そんな些細な事はどうでもいいんだよ。問題は…」

「問題は？」

神妙な面持ちで夜鷹は、武に問い掛ける…

「疾風という名前に心当たりは無いか？」

「はや…て？ 疾風って言ったら…っ?!」

武は頭が痛いのか突如、頭を抑える…

「やっぱり、思い出した…いや、俺に引きずられていたか…香月疾風の因果が…」

「俺は…俺は…」

突如夜鷹は、面白い事を思い付いたような顔になった

「まあ、それだけわかれば良いか…なあ、もし、人類が滅亡するしたら…何故だと思っ？」

「…えっと…よくわからん、だあ、話が飛びまくってて解らんっ!」

武は、頭を目茶苦茶に掻きむしる…首は掻きむしるなよ？

「安心しろ…ワザと、だ。」

「…な」

「さっきの問いな…正解は、経済戦争による深刻的な環境汚染と人口の激減…だよ。」

信じられないのか、武は呆然した

「BETAと言う共通の敵を失った人類は、簡単に空中分解を起し、混沌の時代となる…それが、【俺達】の見解さ…」

「そんな…」

「米さんがよ…、俺達に先制攻撃してくれちゃってさあ、もうムカついたから、方舟もろとも、第五の中心は皆殺しにしたよ…」

「皆殺し…だと…」

「ああ、一人残らず、完膚無きまでにな…関連施設も破壊して回ってるし、何より、【足手まとい】なんだよ…連中。」

「なっ!?!?」

「玉碎させといて、自分達だけさようなら？ 都合良すぎじゃないか？」

「…」

「まあ、やる気の無い奴には退場して貰っただけさ…来るべき約束の日に向けてな…」

「約束の…日？」

「しっかりと考えるよ…自分の立ち位置を…な」
そういつて、夜鷹は去つて言った…残された者の顔は、苦悶に満ちていた

「やはり、何なのかさっぱりね…」

香月博士の研究室の隣、俗にいうシリンダールームには、脳髄では無く…橙色の結晶が浮かんでいた…簡単な未来演算をこなす癖に、それ以上に関しては、決して明かそうとしない危険な隣人…

フシュ…

「あら、朝早いわね…社。」

「おはようございます、博士…セシさんもおはようございます…」

社の視線の先には、シリンダー？に浮かぶ橙色の結晶がある

「まさか社、その結晶体の名前？」

「複数あるようですが、これが気に入っているようです。」

「そう…」

特に驚くような事がメッキリ無くなって来た最近、しかし、昨日の傭兵とこの事は驚くべき事だった

「博士、セレさんが夜鷹さんをここに連れて来てほしいようです。」

「あの傭兵を？…わかったわ、すぐに手配すると伝えておきなさい。」

「

「わかりました、任せてください。」

普段、自信がなさそうな彼女とは思えない言葉に、香月博士はちよこつと驚いた

「…頼んだわよ。」

「はい。」

香月博士は、部屋を出ていく…娘みたいな存在に、お願いされた事を果たすために

「セレさん…もうすぐ、粉碎者が来ますよ…私は、楽しみです。」

あつて話したことがありませんでしたし…なにより、貴女に似た色をしていましたから。」

母…どちらかと言うと、祖母に話し掛けるように、社は結晶に話しかけた

広大な青空が望める訓練場に俺は居た…記憶がマジなら…会いたくないなあ…

神宮寺　まりも…鬼教官と呼ばれるほどの人物らしいが、内容聞いたらセレンの方が鬼畜だったって罨…考えるのやめよう…虚しくなる

「今度から、この第207衛士訓練小隊B分隊に配属された、夜鷹・R・レナードと白銀　武だ…皆、みっちりときき使ってやれっ！」

「……はっ！」「」「」

「この二人は、つい最近まで、ORCAによって保護され、傭兵としてある程度は訓練されたいが、シングルアサルトしか出来ないようだから、ちゃんと仕込んでやれ。」

「……はっ！」「」「」

ああ、かつたりい…青空をネクストで飛び回ってえ…ああ、WGの改修まだかな…アブ・マーシュって奴とは、一度じっくりと話したいよ…いい酒が飲めるだろう…

「では二人共、自己紹介をしてやれ。」

「自分は、白銀　武といます。ORCAでは、ノーマル部隊で訓練を受けたため、少しは、連携が取れると思います。よろしく。」

テルミドールが面白がって作った飯の戸籍…【白銀　武】という

人間は死んでいた為、急遽、テルミドルが鑑に丸投げした為、鑑は、徹夜で作るはめになった物でもあるが…

「自分は、夜鷹・R・レナードです。皆も何と無く分かるかも知れませんが、一応、偽名です。よろしく。」

「…待て、レナード…偽名ってどうゆう事だ…？」

まあ、普通突っ込むわな…

「早い話、俺はリンクスなんで、本名はなつた瞬間から捨てることになってるんですよ…傭兵って中々面倒な仕事なんで…あ、白銀は本名ですよ。彼は、ノーマル部隊の者ですから、リンクスより緩いんですよ。」

「まず、ノーマルとか、リンクスとは何かから説明してやれ…多分、そっちの四人は理解できていない。」

あ、珠瀬の奴、頭から煙吹いてるよ

「失礼しました、ノーマルとは、ORCA側におけるの戦術機全般の呼称です。リンクスとは、アーマード・コア・ネクストの搭乗者であり、代換不可の資源でもあります。」

「…資源だと。」

「お気になさらず…口が滑りました。リンクスには、高かれ低かれ、【AMS特性】という才能があります。」

オーバーフローを乗り越して、一周して賢者モードな珠瀬が手を

挙げながら質問をした

「そのAMS特性って何ですか？」

「そこをツツコムとは…命知らずな…」

「ヒツ?!」

「失礼、その話をする場合、機密に抵触する為、ここでは答えられません…スイマセン。」

「い、いえ…こちらこそ、スイマセン。」

白髪の青年と桃色の髪の少女が頭を下げ合うというシユールな絵が出来上がっていた

「時間が押している…訓練を始めるぞっ!」

「くくくくくはいつ!」「くくくくく」

グダグダな状況は、神宮寺教官の一言で幕を閉じた…

「博士、最近調子が良さそうですか…何があったんですか？」

そう聞くのは、訓練を終え、香月博士に呼ばれた白銀であった

「ええ、とても嬉しい事があったのよ…」

「まさか、OOユニット関連ですか？」

「貴方、そんな事まで…まあ、遠くなく近くなってく感じね…」

「はあ…」

不可思議な雰囲気には銀は終始首を傾げていた…

「社…合わせたいってのはこの人かい？」

「はい、セレさんです。」

「セレ…セレ・クロワールの事かい？」

「はい、彼女の数ある名前の一つのようにですが…」

「そうか…アイビス、今更何のようだ？ それとも、管理者と一くりに読んでやるのか？」

『相変わらず、毒を吐きますね…レイヴンであり、リンクスである夜鷹…』

「…っ?! 成る程、プロジェクトか…」

『私は、貴方と話がしたいだけなのですが…それより、貴方のシリアルは覚えていますか?』

「ん、ああ…【0824 FK3203号】と【XA 26483】だっけか…?」

『シリアル確認…リンクを再構築…確認…リーディング及び、プロジエクション機能正常…IBIS…起動完了』

「うわ…嫌な予感…」

『特に危害を加える気はありません…』

機械的では無く…どこか人間くさい返答であった…

『機械であるのには変わりありませんが…？』

地の文にツツコミはNGよ…セレちゃん？

『…スイマセン。』

不思議な光景に、社は不思議そう様子が隠しきれていなかった

「セレさん…誰に謝っているんですか？」

『ん？…いえ、お約束という奴です…霞、彼が何者か…わかりますか？』

「ん…なにか、黒い靄…いえ、これは…人の顔っ?!」

『そう、彼が今まで殺して来た…己のエゴの為に殺して来た人の顔ですよ…彼は、ポヤツとしていますが…数十億人もの人の命を背負って立っています…』

「…弱虫」

『はい、大変弱虫ですね。』

「お前ら…人を弱虫呼ばわりはやめい…ムカつくし、悲しくなる。」

『そんな事は置いといて、本題に入りますね。』

「そんな事…」

とりあえず、見事なornzであつと…ここに記す…

「壊れた…世界？」

『BETAによる…因果操作による世界確変に伴った世界の不安定化、G弾がいい例ですね…あれは、時空に壁を開けています。』

「さりげなく、凄いこと言っているが…お前が此処に居ることと関係あるのか？」

「『…』」

何この沈黙、コワイわあ…

『単刀直入に言いますね…構いませんがね、早い話が他の管理者も来てますよ。』

「まさか、パルがいるのも…」

『ああ、居ましたね…こちらに居るのは、セレ・クロワールこと、

IBISSとDOVEのみ…対して、向いっつには…』

「インターネサイン…」

『ええ、最も、彼は厳密には管理者では無いのですがね…』

「…」

『ごめんなさい、霞…話に着いていけないよね…』

「いえ、大丈夫です。」

「そうは見えないけどな…」

ちょっと小難しい表情がかわいいな…武とか死ねば…何度も死んでるか

第十四匹 【壊れたカケラ】（後書き）

まさかの管理者…インターネサインがラスボスとかこの世界の連中勝ち目薄いよね…壊しても壊してもコンティニューするみたいに復活するし、パルヴァライザーって…

作者のACfAは、カロードとORCAランクが一位になったので、オンを覗きに行ったらボコボコにされました

（ノ、）ノくチクシヨ

青緑のAALIYAHがいたら多分、私です…虐めないでね？

【需要があったから】チキチキ一人座談会【やってみた】（前書き）

自分でもわからないことを整理する意味合いでも書きました。
作者は、コジマミサでのコジマ汚染が一気に深刻化している為、
たまに言動がおかしいですがナニカサレタ…訳ではないです。

【需要があつたから】チキチキ一人座談会【やってみた】

ゴォー

カチ…カチカチ…プープープー…

「よし、コジマ垂直ミサ…ゲットだぜっ!!」

火燵に入りながら、ストーブの音を聞き、A C f AでF S Cメモリの回収と隠しパーツ回収作業やりながら、書きたいという創作意欲に取り憑かれた日について考えていた…

プロジェクト・A L f A

くネタとシリアスを求めた馬鹿く

「ローディー先生が倒せない…」

『相手が撃ち尽くすまで待ちな…』

全く、関係の無くもない事を友人と電話しながら唐突に思い出した…

某理想郷でみた…固有名詞いいのかな?…あ、駄目なら消すか…まあ、見た「おれのリンネ」という作品に強い衝撃…強い電流が駆け抜けた…

あの運ゲーとしか思わなかったマヴラブオルタの前の作品…『マヴラブエクストラ』を書いた作品での『悲劇』が存在を知りました。

その作品を見つけた夏…

俺は、『ひぐらしのなく頃に祭』でトラウマ（ルート攻略的意味合
いで）を大量生産してしまった。

本編と全く関係ないが、wikiでみたら、マヴラブの主人公と
ひぐらしの主人公のCVが一緒じゃないか、と驚いたり…

さて、前フリはこれくらいにして本題に入るうか？

まずは、皆が感じているであろうナニコレ感…これは、書く上で
常に守っているキャッチフレーズ

…それは、『人の戦争は終わらない』です。

これは、ACで常に描写されている『戦争』の螺旋をコジマ汚染
された脳髓が導き出した【答え】を書く為に始めました。

勿論、他にも沢山のきっかけはありましたが、これが第一位です。
ランク1です。

これを叶えるために、人間の戦争が少ないマヴラブの世界に白羽
の矢を立てました。

夜鷹という人間…いや、リンクスは確かに強いけど、人間性はここ
とん死んでいます。

一億の人間を…クレイドルを落とすミッションでも大爆笑で人間
を殺す為、セレンさんも呆れて離れていってしまうほどです。

その後で、私は詰んでいます…助けて。

をつほん、平静は普通みえても、その実は常に戦いに飢えていま
す…殺すか殺されるかの戦場…特にちょうど、マヴラブULやAL
のような絶望的な戦場は好物…むしろ、ご褒美です。

本名も、苗字だけ伏せ字になっているのも関係あります。
AC4からだけかもしれませんが、戦争が激化した原因を作り出した奴の名前です…後は、フロム脳で各自補完して。

夜鷹は、設定の都合上… AC3からACSL、ACLRへと進み、AC4とACfAを経て今の場所に居ます。

各世界で、ループの必要な世界では、全エンディングを見るのに必要な回数分のループはしています。

パルとかもはや、はた迷惑な隣人扱いです。そんな、チートな夜鷹君…苦手な物が一つだけあります。

それは、『普通の人間関係』です。

彼は、最初は確かに普通の人間だったかもしれませんが、長い間の戦争で素直な気持ちや信用する精神を失いました。

当然です、他人を信用しすぎたら死ぬ傭兵稼業をやり続けなければ生きていけ無い世界で生きていましたから…ずっと…ずっとね

では、作中で何故、夜鷹が鑑や白銀達を知っているか…それが今作のキーですね。

普通ならありえないですよ。そもそも、世界からして違うんですから。

早い話が、傭兵になる前の夜鷹が知っていたと考えるのが話の流れるに考えますよね…

正解です。

彼の渡り歩いた世界は

現実に近い世界 マヴラブEX 初代 3 SL LR 4 fA
とややこしいです。ま、趣味ですが。

オマケに「香月疾風」なる人物の登場で読者と私の混乱は最高潮…ややこしい。

作者の妄想の中に、『因果情報の分割もしくは、断片的因果の再構築』というのがあります。これは、「因果情報ってバラバラになったらどうなるんだろう?」という疑問で始めた与太話です。

つまり、香月疾風なる人物と夜鷹は本来は同一人物でしたって才子です。

普通に青春?していたか、血肉が飛び交う戦場に早くから居たかの差です。

今回はここまで...言い過ぎると余計な事言いそうなので。

では、本編も愛してね(・・)ノシ

【需要があったから】チキチキ一人座談会【やってみた】（後書き）

荒神丸さんへ

笑顔付き1101さんというリンクスがいましてですね…

その人がとつっきの名手で、尊敬というかなんと言うか、

憧れなんだけど、ああなりたくはないというのが正確ですね。

ニコ動ネタスイマセン。

第十一匹 【貴方は誰?】 (前書き)

軽いジャブ程度に…マヴラブアンリミでもそうだけどあって数ヶ月で惚れるって一目惚れってレベルじゃないと思う…

いや、そういうものにツツコミは不用なのはわかっているが…

第十一匹 【貴方は誰？】

金属質が目立つ部屋に男二人が居た：なぜか、片方はテンションがこの世の終わりのようになっていたが

「相部屋か…」

「まあ、野郎同士仲良くやるうぜ」

「お休み…」

「はやっ?!」

「ZZZ」

野郎が二人、無機質な部屋で寝ていた：傭兵は寝付きがいいものだ（偏見）

『遅かったな…言葉は不要か…』

山吹の機体と大型の機体：かつて、大規模の汚染と搭乗者への多大な精神負荷を及ぼす悪魔の機体【プロトタイプネクスト・アレサ】
五連ガトリングガンにコジマキャノン、そして当時普及していなかったアサルトアーマーを備えた正に決戦兵器であり、機動力は、通常のネクストとは一線を超えている

山吹の機体…【FRAC^{フラクタル}TAL】は、背のグレネードを敵機停止中に当てつつ、ライフルで確実に装甲を削っていく

『終わりか…グウツ?!…これで、良い…みんな…』

「…」

無口なのは、コジマ汚染により大量出血で声帯がやられたから、けれど俺は…甲いをしてやりたかったのかもしれないだから…

「せめて…安らかに眠れ…」

手を合わせ、合掌をした…殺した相手を弔うなど、ジナの時以来ではないだろうか…

「ぐっ?!かあ…ハアハア…ああ…最悪だ…」

戦場とは言え、殺しの夢をみると決まって良い事は、起きなくなるのはもうどれほど前からだったか…忘れたな…長く戦いすぎたのかもしれない

「女々しい…水飲んで…?」

視線の先には、何故か半開きになった扉、そこから見えるのは赤っぽいアホ毛とウサ耳のような何か…

「…」

寝たふりして見るか…たまには『普通』にならないとマジで『持つて行かれる』

一回持つて行かれて、人類種の天敵なんて呼ばれるようになったんだし…気をつけないと…

「あの…」

「霞ちゃん、ハヤテちゃんはたまに殴らないと起きないから、もっと強くていいんだよ。」

「はい…」

何を言っているんだい、純夏サン…あれ？やな…予感が…

「えい…」

「ぐっ?!」

ボディ…プレスだと？セレンには、地獄の断頭台レプリカで起きるを通り越して冥土に逝きそうになったが…幼女？のボディプレスとは、大胆だな社…

「あ、あれ…？」

「あちゃ〜気絶したみたいだね…でも、兵士級に噛まれても平気ら

しいから大丈夫、大丈夫」

オロオロとする社嬢は可愛かったと作者が代弁いたします…

「んん…なんだ、敵襲か？」

「あ、おはようタケルちゃん」

「おはようございます…タケルさん。」

「あ、ああ…おはようさんだ二人共…夜鷹は、なんで泡吹いてるんだ？」

白銀の指先は、社のボディプレスにより肋を圧迫、強化した肋骨の為、骨のダメージは少ないが、内臓関連はそのままの為に気絶してしまっているのだ…合掌

「…本当に大丈夫でしょうか？」

「寝る前に見ただけかなりしまっている体だったから少なくともヤワではないだろうさ…鳩尾は誰でも無理だから、心配しなくても大丈夫だぞ？」

白銀が社の頭を撫で、父親のような笑みを浮かべる

「く…むう、頭がイテエ…み、水…」

二日酔いの夕呼先生のような様子で夜鷹が起きる…少し辛そうだ

「ほら、水だ…大丈夫か？」

白銀が差し出した水を受け取ると、枕元にある白いピルケース（薬を容れておく携帯用容器）から錠剤を取り出し、水で流し込む

「ぐ、ハア…ハア…」

「あの、大丈夫ですか…？」

社がウサ耳をしょんぼりとさせながら、夜鷹の肩に手を置き、顔を覗き込む…

夜鷹の顔色は蒼白になり、汗が滝のように噴き出していた

「ああ、もう、大丈夫だ…職業病みたいな物でさ…たまに頭痛が酷くなるんだよ。」

力こぶを作るが、顔色は悪い

「じ、じゃあ…私達もう行くね。」

「またね…」

「おう、またなっ！」

だから、頭に響くだろう馬鹿野郎と張り倒したのは言うまでもない

朝の点呼を終え、ホデイション・エクスチエンジ PXで朝食の後、午前の訓練（主に体力面が中心）を終えて、現在は再びPXにて昼食をとっている

「それにしても、フル装備で14キロを完走してその後、さらにトラック5周するって…特別を通り越して化け物？」

呆れた様子で発言したのは委員長こと榊である…普段は軽率な発言はしない奴なのだが…

「しかし、凄いではないか…走っている最中にリズムも変わらず、重心も変化しなかったぞ？」

若干、興奮気味に喋っているのは、御剣である…双子の姉が京都にいた筈、確か、その彼女からなんか貰ったのは覚えているけど…何かは忘れた…

「二人共…どこまで、鍛えたらそうなるんですか？」

怖ず怖ずと発言するの珠瀬…みんな仲良く主義な彼女は、妥当な発言が多い…まあ、怖ず怖ずした様子はかわいいんだけど

「…地獄に行く？」

若干、メタな発言が目立つのは彩峰…身体能力も高く、昔…アルミ缶を素手で握り、小さなつぶてにしてた気がする

「お前ら…人を人外扱いしやがって…」

白銀は、今にもorzしそうな雰囲気である…俺は人外である自覚がある為、そんなに落ち込まない

「まあ、よつは技術だよな…俺達は人間相手に戦って来た訳だから、強く見えるのはしょうがないさ…」

突如現れた謎の私設武装集団ORCA…各企業の技術者に加え、各企業のバックアップを受けられるようになったが、変わりにORCAは企業連に乗っ取られてしまった…が、今ここにいるのは真のORCA…なのだろうか？

企業連側のリンクス…ウイン・D・ファンションやローディーもいる

これが果たしてORCAなのだろうか？

人類の生存を…痛みのある改革を…俺がいたORCAはそんな場所だった

それが、ウイン・Dのような理想家までいる始末だ…いや、俺も理想家か…

「あの、どうしたんですか…？」

「…早くも痴呆？」

「ん、少々考え事をさ…後、綾峰いつか泣かす。」

「いやん」

シリアスな話をしてきた筈なのに、いつの間にか皆、笑っていた
これが普通の日常なのかな？

現在の訓練は、座学…内容は限られた戦力で敵の補給基地がどう

とかの筈…筈

「はじめまして、G A部門所属のメイ・グリーンフィールドよ。よろしくね」

おかしい、幻覚を見るような薬や何やらはやっていない筈だ…おかしい

「急遽、ORCAのG A部門から派遣されたミス・グリーンフィールドだ…失礼の無いようにな。」

あれ？神宮司教官？本当に、本当に…？

「で、でけえ…」

「はわはわ…」

白銀の視線は確認せずとも何処を向いているのかはわかる
珠瀬は…諦めろ、遺伝子情報の悪戯だ

「そのつまんなそうな彼は、久しぶりね」

「ええ、お久しぶりです…ミス・グリーンフィールド。」

「あら、釣れない…さて、授業を始めるわよ。」

俺は今、方舟計画の総被害額の暗算に忙しいんだ（現実逃避
テルミドールめ…国連にリンクスを『所属』させるにあきたらず、
教師として送り込むなんて…何を考えている？

「ほら、集中できてないぞ。」

「いてっ?!」

そんな事を考えていたらメイに叩かれた…この…

「何すんだっ!」

「うんうん、やっぱり憎まれ口の方が自然ね…敬語とか、背筋がむず痒くなるわ…」

「んな…これでも、敬語くらい、以前も使っていたぞ。」

「でも、不自然過ぎて気持ち悪いのよ…あら、ごめんなさい…授業を続けるわ。」

その後の授業は、意外と普通であった…

リンクスにおいて、常識的な事…お互いのラフプレイの結果が連携など

若干のネクストに対する説明もあった…と、言っても新型の機関がどうだのと

任官すれば誰でも閲覧可能レベルの情報だと中々強かったが

「じゃあ、最後に質問はあるかしら?」

「じゃあ、m」おっと、手がすべった。「…ぐふう」

体の事を女性に聞くのは、マナー違反だぞ?

結局皆遠慮し、今日のカリキュラムは終了してしまった

「どう思う…?」

「あからさまに怪しい…身体能力を差し引いても、異常だ。」

白銀とレナード（本人は偽名と言っている）は、副指令こと香月博士に呼び出された為、夕食の席にはいない…これ幸いと204B分隊のメンツは、二人について会議していた

「白銀の方は、悪意や打算を感じない…変わりにやる気は感じるのだがな。」

「問題は、レナードの方ね…」

「同感…彼は危険。」

「彩峰さんは、なんで、そう思うんですか?」

「昔、父を慕っていた人が言っていた…人を殺せる奴は、目が笑わないって…」

「そういえば…よく笑うけど、本気で笑っている感じではないわね…」

「それについて、私は賛成だ…レナードは、目が腐っている…」

「でも…」

彩峰は俯き…

「覚悟は…感じた」

「」「」「」

普段、軽く、怪しい調子の男組だが、覚悟は強く、痛いくらいに感じる

レナードの方が現状に激しくイラついてるも普段から感じる
此処に居るくらいなら前線に居たい、戦いたいと…

「とりあえず、様子見ね…白銀は、単純そうだけど…」

「わかりやすい…」

「ミキだって、それくらいはわかります。」

「ああ、同意だ…むしろ、好意に値する…」

変わる空気…啞然とする一同、第一回対男組会議はこれにて終了した…

ようは、白銀は単純馬鹿、レナードはなんかストレス抱えてそう…
であった

第十一匹 【貴方は誰?】 (後書き)

…早くも、御剣が某武士道化してもうた…個人的に冥夜は素直クール…

その内、「君に惹かれる者だよっ！白銀え！この気持ち…正しく愛だっ！」とか書きたい。

ただの願望だから、IFで書きそうだけどね…

まだ、セレンさんがシヨタク(レールガンの弾痕)とかフィオナがヤンデレ(アサルトアーマーによるゴジマ汚染)とか、

はてさて…ウイン・Dが素直クールとか、シャミアがツンデレ、メイは同級生にミセステレジアが若い未亡人とか最強すぎる…平和な世界では、皆様タケルちゃんを選びそうだが…

夜鷹(CVは櫻井さんがいいな…)は平和だとただの不良優等生(生活態度悪いが、成績はいい奴)だ…

…だめダ、このサクシャ…ハヤクなんとかしないト…

第十二匹 【Public Enemy or Hero】(前書き)

ワタシハ ナニカ サレタヨウダ…

第十二匹 【Public Enemy or Hero】

冥夜達が、武達二人の事で話あっている中因果律量子論の実験と称して、

変な夢を見た訳だが…駄目だ、頭がクラクラする

「何か、見えたのかしら？」

それでも、香月博士は遠慮しない…鬼畜を通り越して、尊敬するわ…こりゃ

「なんか、変な夢見ました…」

「…夢？」

何か、悲しげな表情が隠しきれて無いが…俺の敬語って、哀れに思われるほどに不自然なのか…

「博士に誰かがしばかれているゆめ」本気なら殺すわよ？」「いや、本当だから。」

夕呼先生に頭ガンガン揺さぶられる中、白銀が、呆れた様子で水の入った

ペットボトルを持ってきた…

正直、頭痛いのが最近のデフォルトになってきたので助かる

「ほらよ…大丈夫か？」

「正直、交通事故にあつた気分なんだけど…やべえ、節々痛い…」

「お前…実は結構年寄りなのか？」

「これでも18だっ！たく、失礼な…」

最近、火星での因果が足を引つ張ってるのではと考え出した今日のこの頃…

ディソーダードも相手にいらついたのはいい思い出…な訳無いだろうが

パルヴァライザー相手にしていた時に、あいつらの逆襲かとヒヤヒヤした物である

AMIDA…いや、話が逸れた

とにかく、沢山夢を見たが…最後の夢だけが詳しく思い出せない

「でも、言葉の割に良さそうな顔だぜ？」

「ほんと、同一人物とは思えないよ。」

「はい…夜鷹さん、笑ってます。」

「え？」

ふと、頬に手を当てていたら…普段の狂つたような笑みでは無く、自然な笑みだった

鑑が手鏡を貸してくれて確認したから間違いなくそうだ

「それが、人間としての笑顔なのかもね…ほら、夜食食べましょ。」

「」「」「はい。」「」「」

まるで、家族みたいだと思いつながら夜鷹は装置から離れる
どこか、悲しげな表情を浮かべながら

「そう、アンター人暮らしだったの。」

「先生がいた世界に限った事じゃないですが…まあ、誰かと住むな
んて二つ前の時代…フィオナ達と共に戦った世界からだな…それだ
って途中からですから。」

「難儀な人生ね…それで、一人暮らしの時は食事とかはどうしたの
?」

「ミッションの無い休日は自炊だけど、基本はホームやネストとか
の食堂や出前だったです。」

「うわっ、なんかリアルだな。」

「夜鷹さん…体、壊さなかった?」

「いや、俺全身インプラント&ナノマシンだらけの強化人間ってい
う。今より酷い状況だったしな…」

「「「あ…」」」

さり気に鑑の俺に対する呼称が固定されたとか考えつつ、俺達
は、合成さばの味噌煮定食を食べていた

「あの…一つ良いですか？」

「なんだ、社嬢？」

「なんで、みんな苗字で呼ぶんですか？教授だけ名前なのに…」

「う…」

社の一言に、場の空気が凍る…三人は俺を責めるような視線になる

「確かにコイツ、人が名前で良いって言うてるのに無視するし…」

「公私混同は避けろって、自分で言ってる割に自分は常に公の状態だし…」

「昔みたいに、お姉ちゃんって言うてくれないし…」

「「「はあ…」「」」

さて、お前ら…何言ってるやがる…

「悪かったな…俺はアンタらの知っている『疾風』じゃないし。」

「??どついう事だよそれ？」

白銀が、唐突に不思議そうな顔をする…お前、やっぱり馬鹿か…

「俺は、お前らの知っている奴の平行世界の…ある日訪れた、『白銀 武』という因子に滅ぼされかけた世界の生き残る代償にはじき

出された馬鹿な奴だよ…」

もつとも…自分から望んでやった事であり、俺が俺を確立した要因なんだけどな
…と付け加えた

「ふーん、と言う事は白銀…アンタの世界のコイツのポディションは？」

「何というか、先生が疾風の身元保証人になって…コイツの姉貴分って感じでした。」

「そう…」

夕呼先生は、ちょっと嬉しそうな顔になる…それは何処か、母性的な感じであった

彼の色は最初見えませんでした

でも、彼がセレさんと会い、セレさんがちゃんと目が覚めてから一変しました

彼からは、たった一つの色を感じ始めました

哀しみの蒼だけでした…彼の周りにはあんなにも人が居るのに…その誰の声も彼の心には届いていないみたいで…凄い、悲しい人自分の手が血の赤で染まっていて、そのせいで誰にも触れられないでいる

これ以上、他人を汚したくないから…だから、必要以上に他人を自

分の中から
排他したがる…

だから、武さんや純夏さんに相談したら凄く驚かれました
多分、周りの人達は彼が強いと勘違いしてるんでしょう
二人きりで話した事がありました…本当に俺を分かってくれるのは
俺の愛機くらいだと苦笑していました

教授の実験が終わって起きたあの人は、少しだけ優しい笑顔でした
出来れば、あの人にもっと笑っていてほしいです

とあるAL4関係者の日記

第十二匹 【Public Enemy or Hero】(後書き)

そろそろ、夜鷹的に縛りバトルパートかな…
戦術機の意味合いで

外伝 【記憶のカケラその三】 (前書き)

外伝は基本、短めな仕様にしようと考えています
言いたいのはそれだけ。

では、本編どぞ!!

外伝 【記憶のカケラその三】

ピンポーン

「はいっ！」

『疾風、私…着いたわよ。』

「わかった、準備は殆ど出来ている…後は微調整だけだから。」

『わかったわ。』

死亡フラグをたんまり溜め込んでやって来たオルタ白銀がこちら来て大体一日…まりも姉の死亡フラグを拳で叩き壊し、純夏脳みそエンドも必殺雪崩ドロップキックで回避した俺の最後の仕事…

「おじやまします…こんばんは、疾風…おじやまするぜ。」

「ああ、全部済ませにさっさと帰れ馬鹿ボケ唐変木。しね、氏ねじやなくて死ね…そして、この世全ての男に焼き土下座しやがれ。」

出来るだけ、悪態をつけておく…ム力つくのもあるが、俺が生きている内でこの武に悪態付けるのは今だけだろうからでもある

「何故、その事を知ってるんだ…お前は、あの世界の疾風じゃない筈だ…」

「なんの事かな？さて、休憩おしまい…ついて来い。お前をクソツタレな戦場に導くクソツタレな装置のある場所へよ。」

「…」

今の反応で、知りたいことは全部わかった…あちらに俺はいるらしい

最も、俺自身の死亡フラグはあえて無視した…回避のしようがないからだ…

心臓のガン、急にこじらせた…病院で確認したから確実だ…
余命一ヶ月、短い余命だ

「遅かったわね…こちらの準備はすんだわ。後は疾風の準備だけ…」

「5分で済ませる…」

夕呼姉には話していない…悲しませたくないのでは無い、だけど…俺は意気地無しだから、ごめん

あちらでは、今頃名言を言っているだろう…集中しろよ俺っ！

「白銀…あんだ、運だけは一流ね。」

「え？」

「普通、原子炉が沢山の発電量を発揮するのに時間がかかる…でも、このコジマ式シマ常温核反応炉、通称『コジマ・リアクター』は違う…自在に発電量を操作出来る、まさに夢の核反応炉なのよ…払った代償はあまりにもデカかったけどね…」

原作とは少し違うがまあいいさ…親父の負の遺産がこうして人の役に立つんだ…いいことだよ

コイツのせいで、国が二つ滅んだけど自業自得だからシラネ

戦争したけば余所でやれ…仮想空間とかでなっ！！

「炉芯安定…エネルギー生成安定…内部温度安定…夕…呼姉、行けるよ。」

最後の仕事だ…頭がふらふらして、息が切れそうだけど平気…こんな兵器を送り付けたBETAには漏れなく滅んでもらおう…願わくば、俺の手でプチプチと消してやりたいが数が尋常では無いらしいので、コジマキャノン使用で我慢してやろう…そういえば、アーマード・コア…やってなかったな、変わりにバルジャーノンしまくったけど

でも、変わりに会ったフィオナ…可愛かったな…誠実系アイドル全開な子だった

多分、この炉を狙ったのだらうけど関係ない…生きた俺の生体部分が必要だから問題無い…遺書には御剣財閥に丸投げしてやったから夕呼姉達に迷惑はかからないだろうし、コントロール権である生きたパーツは、月詠さんに左手の人差し指を託したから平気だろう

「夕呼…姉？」

「もう、終わったの…ゆっくり休みなさい。疾風…」

「そうする、おやすみ…夕呼姉…」

「ええ…おやすみ…なさい、疾風。」

次の日…弧島 疾風は、目を覚まさなかった

死因は心筋停止…ガン化した細胞が多く、心臓が動かなくなったんだが

白銀が持つてきてしまった。『10億人もの人が死に絶える因果』は消えてしまった。俺はそう思っていた。少なくとも、レイヴンである内は…

『よう、首輪付き。』 オールドキングだ。クレイドル21を襲撃する。『やらないか?』

一回目を無事終え、さてORCAだつて時に俺個人の端末に舞い込んだ依頼

その依頼に体が飛んでいるようにすつ飛んでしまった感じとしか覚えていない

クレイドル21を破壊。日本人口を沈め、次は何処を落とそうかと言うときに来たのは『クラニウム・カーパルス占領』。先生も来て大変だつたけど皆殺しにしてやった

カーパルスを制覇した俺は止まらなかつた。オールドキングが残したりリアナ残党と共に片っ端からクレイドルを落として回った。最終的には10億人もの人間を殺した、希代のテロリストになっていた。今おぼえれば、俺は…

「あいつらとなんら変わらない。ただの兵器じゃないか。」

自身がBETAと変わらない。そこに罪悪感を感じ無かつた俺は、あの畜生共とは大差ない、もっと酷い生体兵器かも知れない

「頭いてえ。薬のんで寝よう。」

持つて行かれた。誰かの手の平で踊らされていたような頃の話だ。寝よう。明日は、白銀いわく鎧衣が帰ってくるらしい

流石、ハーレム野郎だ。ヒロインの導入時期まで覚えてやがる

自分の事は棚に上げて寝た今日の夜。御剣の自主練に付き合っ

たら

すっかり、遅くなってしまった

「もう、誰の言いなりにはならない。俺は自分の意思で戦うんだ……」

その言葉は、誰に向けて言ったのかは……本人しか知らない
自分のエンブレムのも描かれている三日月が綺麗な晩であった

外伝 【記憶のカケラその三】（後書き）

もう、気づいた人もいるかもしれないけど（もしかしたら、最初の方でネタばれた可能性もある）EXの疾風の苗字は、弧島^{コムマ}です。

深い意味は無いけど、このネタの為だけここまで引っ張ってきました

（m）
（m）

第十三匹 【特務…というか雑用】（前書き）

相変わらず、読者を置いてきぼりにする文章を書いています…ス
イマセン。

第十三匹 【特務…というか雑用】

「だりい…俺のオーギルが山吹じゃないとか鬱だ…」

『しつかりしろ…まったく、なんでこの部隊は問題児ばかりなんだ…』

時は、伊隅様（何故か心の中では様付けてしまっ）が頭抱えている一日前に遡る…

「伊隅、うちのおと…手駒を連れて特務って頂戴…何、現状最強の傭兵らしいから腕は保証するわ。」

国連軍極東支部…通称、横浜基地に存在する機密もとい香月教授の雑用部隊、A 01部隊…通称伊隅ヴァルキリーズの助っ人して俺は訓練おわずけで借り出された訳だが…やはり、歓迎な訳無く…キング・オブ・ヘタレは例外だろうな…なんで、エロゲ主人公はこんな補正あるのに俺には無い…激我なフレアだってしたし、純粋な種になっただけでは足りないのか…畜生…畜生…畜生っ！！

「君は…全裸のっ?!」

「ホントだっ！全裸の悪魔じゃないっ！」

「あんたら…特にヘタレ…あんたは殺す。何があっても、あの時助けたのは俺の歴史の汚点の一つだ…」

「え、ちょ…」

「あんたがはつきりしないせいで俺にとばっちりが来たんだよパーンチっ！」

「ぐふうっ?!」

俺のアップercutが鳴海先輩の腹に決まる…テンプレに乗っ取って、すかてんでバイトしてました丸

「あんたがはつきりしないせいで俺が嫌なもん見る羽目になったキークっ！」

水月先輩は、綺麗なフォームだなと俺のドロップキックを褒めていた…ドロップキック歴10年…馴染みを蹴るのに人生賭けてましたから(マジで

「死ねこの唐変木バスターっ!!」

「…っ!…っ?…っ!…」

声の無い悲鳴を上げて鳴海先輩は落ちる…かの力 八 八大王から受けたまりし48の殺人技は健在だな…漫画知識をガキなりの解釈で会得したんだけど

「それくらいにしておけ…流石にソイツでも死ぬ。」

「いえ、人間の最低肉体強度ギリで放っているから、見た目ほど威力はありません。」

タダシマタハ サケルヨウニ イタイ

「そ、そうか…よろしく頼むよ、私は伊隅…このA 01部隊を任されている。」

「こちらこそ光栄です…最強部隊と共同で戦える機会があり、誇りです。」

後ろで青いポニテがうるせえが気にしない…

「世辞は止める…それにしても、いや…何でもない…早速、ミーティングに入ろう。」

「よろしく願います。」

かくして、俺はかの伊隅ヴァルキリーズと共同戦線を張る事になったのだが…香月のようには無理か…孤島はどこ行っても一人なんだねえ…虚しい、愛が欲しい…歪んでない愛が

「むっ。」

『どっした…セレン?』

「いや、うちのが寂しがっている気がする…」

『過保護過ぎる…信じてやれ…』

欧州のハイヴを現在、レイテルパラッシュとシリエジオが攻略中である

その凶悪な火力は小型種なら余波だけでミンチになる

「それにしても、見てていて吐き気がするな…ここは…」

『全くだ…先を急ごう…』

「…っ?!」

突如、シリエジオがレイテルパラッシュを突き飛ばす…レイテルパラッシュのコアがあった位置の壁に銃相が一個残る

『今のに反応するなんて…やるじゃない、でも結果は変わらないわ…私が勝つもの。』

スナイパーライフルを構える一機のネクスト…その装甲は、生き物のような血管が浮き出ており、微かに脈打っている…

『今は引け…ほんの挨拶変わりだからな…』

『残念、今はおあずけか、アンタ達のコアにいつかステキな風穴開けてあげるから覚悟なさい…』

紫の中量二脚と黒い四脚はハイヴの間に消えていく…

「今の見たか…ウイン。」

『間違いない、あれは…ストリクス・クアドロに…』

「プロメシユース…かつての女王が何故…まあ、敵なら話は早い。殺すまでだ。」

『行こう…時間が押している。』

「ああ…わかった…」

一 波乱ありそうな予感である…しかし、夜鷹は空気を読むのだから？彼なら雰囲気ぶち壊しなんて、よくやるし得意科目だ…

「ぶえつくしっ！…！」

『汚いぞ…全裸…』

「いえ、ヘタレ先輩に比べれば…醜く生きてませんよ？」

佐渡島に特務で来ているわけなんだが、正直暇だ…新型の…それもAC級のBETA捕獲もしくは破壊という手はずなんだが…

「オーギルって…レオハルトの差し金か？」

黒いボディに銀の排熱部の機体…レイヴンからリンクスになったときに乗った機体なんだが…

武装は、ローゼンタールのアサルトライフルにレーザーブレード、

背中にオーメルのレーザーキャノンを積んでいる訳だ

『こちら、ヴァルキリー・マム…各機、目標が近づいています。』

さて、お仕事の時間らしい…誰が死んで、誰が生き残るか知った事では無い…が、意地汚い奴が強かに生き残るのもまた戦場だが、まあ…せいぜい無双していようか

『敵目標…一？気をつけて、何かがおかしいです。』

そんなヴァルキリー・マムこと遙氏の言葉な訳なんだが…旧イグバールで構成された機体…まさかっ？！

「各機散開っ！敵は張りぼてだがネクストだっ！死にたく無ければ全力で逃げろっ！」

『何をいきなりっ？！』

敵は、かつての戦友で俺が裏切った敵…旧バード部隊隊長をも勤めていた『砂漠の狼』アマジグだどっ？！
初手から中々辛い敵をっ！

『久しいなレイヴン…今ので一人死んだが？』

「それ、俺がバード部隊を全滅させた事に対する腹いせか？」

かつての友の声は、変わらず聞こえた…

『元よりあって無い命だ…復讐なぞで使うのは勿体ない…レイヴン、私が生きた証を残させてくれ…』

てめえは弱王かつ！

「そんな、ある意味ガチ機体で言われても記憶に残らねエよっ！！」

ローゼンタールのアサルトライフルは、近づいて撃つのに真価を發揮する…しかし相手はあのアマジグ…二段クイックを二段クイックでキャンセルするようなキチイだ…あたらねえっ！

「悪意が見えるようだよ…アマジグっ！！」

『機体相性が悪すぎだな…まあ、悪運だけは強いようだがな…』

アマジグのサイドブラスターが火を噴く…レーザーキャノンがちくちく当たっていたみたいだな

『これで終わりか…楽しかったよ。親友…』

「二度と起きてくるな…悪友。」

アマジグの装甲から血が飛び出る…生き物のような光景を目の当たりした俺は、慈悲でトドメをさした…コアに二発撃ち込み、ピクリとも動かなくなつた悪友に俺はひそかに涙した…

あれはなんだ…とてもでは無いが人間とは思えない…敵の機体は常に私達のFCSを振り切り、結果リンクス一人で敵を撃破してしまつた…

後から来るBETAを警戒したがリンクスがただ一言、『友が敵を殲滅したようだ…』あの機体は一体…この世界で一体、何が起きている…

「ヴァルキリー01から各機、警戒は解くなよ…まだ、戦場にいるんだからな…」

出合い際にショットガンのようなもので蜂の巣された鳴海機だが、全て管制ユニットを逸れていた為に衛士は無事だった…ビビってQBでバツクしたのが幸いしたのだろうか…だが

『すまない、少しの間降りる…機体を頼む。』

「おいつ！」

ネクストの背中が開き、コクピットが露出する…パイロットスーツを着た彼は、撃破した機体に近付きコアに歩み寄る

「中の者を助ける…訳無いだろうが、コアに二発も撃ち込んだんだぞ…」

傭兵は、器用にナイフで装甲を剥ぎ取り中を確認したようだ

『…っ?!っ?!…っ?!?』

様々な国の言葉でスラングを連発しているようだ…見た目は日本人の割に国際的な人物のようだ…がっ?!

「なんだ…これは…」

コアの中は悲惨だった…毛細血管のような管が、紫の球を中心に張り巡らされていた…

撃ち込まれた二発のレーザーが球の端をえぐり、管を焼いていた
それでも微かにうごめいている…

傭兵は、敵機の外殻をひとしきり殴ると、腰に挿した銃を引き抜き、容赦無くコアに弾丸を三発撃ち込む…

ただ一言、安らかに眠れと呟いて…

第十三匹 【特務…というか雑用】（後書き）

主人公の意外な交友関係と過去が発覚…名にしてんのこの人？

【重大な】とある暴露の喫茶店【お知らせ】（前書き）

これは、私の完結作のラストの暴露会の奴ですが…さらりと重要な事書いてしまったのでこちらにコピペ

【重大な】とある暴露の喫茶店【お知らせ】

「おつかれえ……」

「お疲れ様、青少年……」

某都の学園都市にある小さな喫茶店……

そこに眠そうな目をした白い学ランの青年と白い制服を着た少年
そして、いかにもダメそうな青年に成り切れない少年が居た……

「いやあ、死亡フラグ立てれちゃったけど、気分は？」

「最悪に決まってるだろう……馬鹿作者……」

「そつだぞ、現代文3の馬鹿作者……」

「まあ、事実だからな……反論はしないっ！」

「「おいおい……」」

緩い空気が喫茶店に流れる……作者を名乗る少年は怠そうにテーブルに伏せる

「で、作者と雄理は分かるとして……なんで俺まで……最近、名前バレ
したから嬉しくて出したいと推理しているが……」

某K1のよく出すババーンと言う効果音と共に指をピシッと突き
出している

「まあ、名前バレは最終話のラスボスとの殴り合いで出る予定なのを俺が苛々したから登場予定を繰り上げただけ。」

「あら?!」

ステーンと芸人のように転ぶ…この空間…作ったの俺だがコジマ汚染ばねえ…

「君、雄理とはやての夢で出たよ…姿は違うけど。」

「え?」

〈青年熟読中〉

「雄理はわかった…設定上は雄理と中の良いクラスメイトだろ?」

「うん。」

「なら…はやては?」

疾風は戦慄を禁じ得ないという表情で見ている…

「もふっ」

「やっぱりかーっ?!」

キャラ崩壊起こしてますよ…疾風君…

「もふって何だよ…もふって…」

「説明しようっ！もふっとは、首輪付きけものと呼ばれるACfAの非公式マスコットキャラの事だ。首輪付きけものは、カーパルスで水没王子の台詞を発端に生まれた生き物で、見た目はACWIKiで見てね。」

「説明乙…で、なんで俺がけものになったんだよ…そのままいいだろう？」

作者は落ち込み、表情を陰に落とす

「実は…」

「「実は？」」

「疾風のオルタード・フェイブル参加は無くなりました。」

「待て…待て待て待て待て待て待て待て待てっ！…どういう事だっ！」

「何だよ…オルタード・フェイブルって…」

オルタード・フェイブルとは、オルタネイティブ後を描くファンディスク…武が純夏の描いた元の世界に帰還するというなんとも珍妙そうな世界に行くというある意味幻想入りより質の悪そうな感じだが、実際は楽しく馬鹿をやる学園生活コメディーだ…が、作者はやった事が無い…しかしっ！

「やった事が無いからかけない？作者の妄想力舐めんなっ！やった事がないならやった人の感想を元にオリジナルに書く…それだけだ…」

「なんで、俺だけコメディ入り出来ないんだよ…理不尽だ。」

「はい…これ。」

「これは…プロットっ！しかもマブラヴの後かつ！」

「そっだ…君には…ずばりっ！スパロボ入りして貰うっ！！新型A C…しかも作者の魔改造モデルでなっ！」

「スゲエ…全ACが出ないの分かってるけど出てるのみたいという願望を…」

「詳しくは最初しか出来ていないが…まあ、マブラヴfAが書き上がる前には7割出来る筈…残念だが、レイヴン…リンクスの登場は予定してないが…主人公機は黒百合をモデルにするからこうご期待っ！」

「自分からネタバレたよ、この人…」

「次っ！」

雄理は、おかわりの紅茶を持って帰って来た…空気読んだのね

「今後の俺の展開は？」

「1・5期…つまり、空白期を書く訳だが…舞台は熟読者の方は察しがついているだろう…」

「さりげなく出たあの人に気付くかがポイントか…」

「魔法と学問の街…麻帆良だっ！」

「思い切ったな…何、ネギに喧嘩売れと？」

「舞台は原作一年前だから問題無い…まあ、入れ代わりだな。」

「なら、デンジャラスな学園物語か…」

「そう、始まりは受験戦争から始まる。空白期最大のテーマ…ずばりっ！」

「なのはの中毒が直せるか、か…」

「その通りっ！これ以上は、出来た新作をお楽しみにね それでは…」

「」「さよならっ！」「」

【重大な】とある暴露の喫茶店【お知らせ】（後書き）

言い訳はしません…ごめんよ主人公

君にラブコメ的平和は必要ない…が、違う形のオルフェはやるよ

急に書きたくなった(前書き)

疾風が幸せでもいいじゃない…俺が主な原因だけど

急に書きたくなった

とりあえず、特に変わった日常を俺達は過ごしていた…
地球外起源な生命体の侵略なんて無かったと言わんばいかりの
世界…いろんな世界を渡って来て戦争ばかりしていたから
その休暇変わりと思っておこう

疾風のサプリメントな日々…

基本は平和…友人の起こす馬鹿騒ぎを事前に潰すなり、避けるな
りで己の平和を守る日々…勉強は出来るし、行きたい大学も、将来
の見通しも大体付き周りがたあふたするのみで欠伸するのがもはや
日課だ…

まあ、ほどほどに馬鹿をやる友人はこれでも良く居る
尊人なんかもバルジャーノンで良く遊ぶし、武は相変わらずハーレ
ムだ…他のクラスの男子が阻止しようと合策しているが無駄だ…あ
の野獣は止まらんよ

「空が綺麗だ…」

「疾風さん…またトリップしてます。」

「珠瀬…人間、諦めつくくと人生詰むから気をつける…」

「??????」

窓の外を見ていた俺を珠瀬が観察していたらしい…やめりゃいい

ものを

俺なんかに関わったって不幸しかない

テンカワは味覚を失い…勇者王は宇宙の終焉に飲まれた

俺にや何にも守れてねえ…初めて転生した時の希望も誓いも何にも
な…

「孤島…少しいいか？」

「なんだ？武なら食堂だぞ？」

「いや、お主によつがあるんだ…」

「俺に…？」

「放課後、校門の前でまっっておるからなっ！」

「あ、おいっ！たく…なんだよ。」

どうせ、女は皆…恋愛原子核の吸引力には勝てんのさ…フラグな
んでそこから辺の犬に食わせとけ、俺は次の世界への英気を養うのに
忙しいんだ

「とか言って、結局期待してるんじゃないか俺は…鬱だ。」

グダグダしながらも結局校門前まで来てしまった…否、立ち止ま

ってしまった

「今日は、主を連れていきたいところがあるのだ。」

「連れていきたいところ？何処だよ？」

不良一歩手前の態度であるが、この時の俺は他人を寄せ付けないので必死だった。別れる時が辛いし、なにより友が死んでいく様を見すぎたのかもしれない

「いいから…ゆくぞっ!!！」

「あ、おいっ?!！」

御剣に手を強引に引かれて進む…お世辞には手を繋いでいると言うような感じでは無かった事は断言しよう

散々、振り回されて着いたのは古めかしい道場だった

「ここは…」

「ここは、私の師が居る道場…無現鬼動流の道場だ。」

なんか…物凄いオーラが出ている

このまま、無防備で入ったら殺される…そう直感した俺は、鈍った体に湯を入れる

敵は強大だ…消し飛ばせ!

勝てないかもしれない…命ありやOK
逃げる、隠れる、壁撃ち上等！

「よし、行くっ…」

「うむ。」

久しぶりに覚悟を決めて中に入る…生身でのボゾンジャンプ以来の緊張である…きつい、脂汗が出る

「失礼しm「貴様が冥夜タンの言っていた男か…」は？」

ライ。ーのような髪型の翁…御剣雷電が目の前で真剣のような物を二本前に置き、仁王立ちならぬ戦国武将のような威風堂々とした態度で座っていた

「貴様が冥夜に相応しい男か試してやる…受け取れ。」

置いていた片方を投げて寄越す…が

「ふんっ！」

「ちっ…」

投げると同時に神速の抜刀術で刀ごと翁は俺を斬りに来る

「今のを避けるとはな…貴様、ただ者ではないな？」

「相手から受け取った得物は使っな…そもそも受け取るのが俺の師の教えだからな…それにこれは喧嘩殺法だし。」

「その割に、最小限の動きで反撃を出すとは…暗殺者が君は？」

「失礼な方だ…初対面の相手を捕まえてアサシンだなんて。俺は孤島 疾風…御剣の友人だ。」

自己紹介もせずに攻撃してくるとは…冥夜にジジバカなイメージはあったがここまで歪んだ物とは思えなかったよ
いや、実体験してるからこう感じているだけか

「失礼…私は冥夜の祖父、御剣雷電だ。いざっ！」

「くっ…（やはり早い…まるでボゾンジャンプだ。）」

「どうしたっ！貴様はこの程度かっ！」

雷電の太刀がまるで空間を斬るようにはしる…やはり正規の流派は違うな

木連柔…久しぶりにやるか

「これで決まりだっ！」

「…」

「なにっ?!」

縦一閃…雷電の放った斬撃を白刃取りし、そのままへし折る…相手をも利用するのもまた、木連柔の基本である

「急に動きが良くなるとは…手を抜いていたのか？」

「…はあ、翁がいきなり始めたから呼吸をとる暇がなかったんだよ…自分の呼吸を把握していないと白刃取りなんて、危なくてやってられない。」

面食らって息してなかったなんて恥ずかしくて言いたくない…初手の太刀を避けなくては確実に死んでいたから困る

「く…非常に心苦しいが、冥夜との約束だ…貴殿と冥夜の婚約を認めよう。」

「……………は？」

頭がフリーズを起こした…おかしい、御剣と俺は砂場で結婚の約束をしていない…第一、あの現場には木の上で昼寝していたから最後しか見ていない…まさか

「御剣…お前、まさか…白銀と約束したのって…」

「疾風…私は武に貴方と引き合わせる約束をしてのさ。最強の男と武が呼んだだけはある…まさか、真剣を素手で割るなんて。」

…ガツデムっ！まさか、嵌められたのは俺だったとはっ！！
最悪だっ！この疾風、一生の不覚っ！！

「まさか、ここまでとは…三分持ったら認めようとは思ってたがここまで強いとは…君の師がうらやましいよ。」

「なあ疾風、新婚旅行は何処にいこうっ！…！」

「…俺の…俺の話を聞けえ…」

御剣の因果…ひいては鑑生存による皺寄せが俺に来るなんて誰が予想しただろうか？助けてくれ…俺は因果に捕われている…

「なあ、疾風…聞いておるのか？」

「あ、あはは…」

笑うしかなかったと、ここに記しておこう…何処ぞの誰かが鑑を助けたせいで俺は望む平穩を失った…でも

「私の事はおじいちゃんと呼びたまえ…出来れば、一から無現鬼道流を納めないかね？」

「なんだ？グアムか？ハワイか？」

「個人的には、ニュージーランドかな…」

新しい家族ができたのは少し嬉しい…かな

急に書きたくなった（後書き）

前回の座談会コピーで暴露した通り、彼のドタバタラブコメなオルタード・フェイブル出演は無いですが、それとは別のオリジナルの後日談を用意してます…誰も読んでないだろうけどね

第十五匹 出会の違い（前書き）

紛らわしいけど、番外編の主人公と本編AC主人公は別人です。
なんか、誰も読んでないから次回から自重をやめようかと…

第十五匹 出合いの違い

俺が前回の依頼で遭遇したネクストもどきに関する資料をまとめている時の話だった…何故か、白銀と昔話で盛り上がったんだ

第十五匹 【出合いの記憶】

「なあ、向こうの俺とお前の出合いってどんな感じだったんだ？」

「うーん…最悪？」

「何故にっ?!」

仮定として俺の居た世界をEX世界とすると、その俺の人生はコイツと会う時期が最悪の時期だった

親父とお袋が新型エネルギープラントの実験中の事故で文字通り蒸発した為、なまじ優秀な優秀な為、遺産目当て連中を追い返しては怒鳴り散らす日々だった…

今覚えれば、かなりの黒歴史だ…だって、夕呼姉も遺産目当てだと勘違いしてロクに相手もしないで追い返したし…高校の時のしっぺ返しは痛かった…ほとんど、パシリだったし…電子レンジとプレスタ2を乱雑に融合した装置を作らされたり、電磁投射砲作ったり大変だった…今までの世界では1番楽しい時期けど

「そんな中、お前と鑑に会ってさあ大変…お節介するし、揚句お前

の両親まで出て来て身元引受人なんかやってもらっちゃったし…うあ、俺痛いな…」

「ある意味、ヤバイな…疑心暗鬼を通り越してただのヤバイ人じゃん。」

ウツディ！って言う人には言われなくないな…疑心暗鬼に関しては

「俺の世界のお前…かなりまともだったぞ？夕呼先生とまりもちゃんと一緒に住んで、お前が二人の弁当を作ったり…今みたいな仏頂面じゃなくてよくはにかんでたし。」

「へえ…ダメだ、想像出来ない。」

以下白銀の証言

・夕呼姉とまりめ姉を慕っていた…俺の身に覚えの無いこの二人に対する呼称はこれ由来みたい

・格闘センスは皆無だが、近距離〜遠距離のオールラウンドにカバーする射撃センスはあった…俺は格専だから正反対

・料理が上手で二人の弁当をよく作っていた…俺に料理スキルは皆無だ

自炊は出来るが、自己満足レベルだし

「こうして聞くとお前の世界の俺と俺って、鏡みたいに正反対だな。」

「本当だ…なんでだろうな？」

自分でも、さっぱり分からない…うん、わからない

「そういえば、タバコ確保しないとなあ…総戦技評価演習近いし…」

「ん？あるぞ？」

「何で持ってたんだよっ?!」

おもむろに、しかも自然にタバコの箱を自分の懐から出す…

「いやあ、ヤニでも吸わんとやってられねえよ…はあ。」

「そんなにヘビイなのか？傭兵って、てっきり気楽な自由業かと思ってたのに。」

「馬鹿いうなよ、信用第一裏切り上等…一時期、不眠症にもなったくらいだ。」

タバコを弄って、焦燥とした表情となる…その顔は歴戦の戦士とも、そして戦いに疲れた敗走兵のようにも見えた…

「疾風…いい？」

「ん？こんな時間にどうしたよ、尊人？」

「違うよ、美琴だってば…」

微妙なイントネーションの差だろう、いいや違うねと適当なテンプレを演じつつ、本題を聞く

「疾風、タバコ持ってるでしょう？総戦技評価演習に備えて確保し

たくて…」

「はいよ…箱半分で足りるか？」

「ううん、その半分でいい。」

「おk、ほれ…チクるなよ？」

「もちろん、じゃあね。」

ボタンとスライド式だから聞こえない筈なのに聞こえそうなくらいサクツとした会話だった

「会話が成立している…だと？」

「そんなに意外か？マイペースだとは思うが…」

何言ってるんだお前という表情に白銀はカチンと来る…が、純粹にマイペース魔王な美琴と普通っぽい会話に未だに驚いているから態度に出ない

「まあ、単純に嫌悪してるんだろうね…彼女は勘が良い。」

「え？」

「ほら、俺って傭兵だろ？本能的に嫌悪して会話も簡素になったんだろ。」

気まずい空気になって場が白ける…もうすぐ総戦技評価演習だと言っのに大丈夫だろうか？

第十六匹 【総合戦技評価演習…?前編】 (前書き)

やたら久しぶりな更新…高校卒業したから、現在引きこもり生活

中…

ダメだ俺…早く何とかしないと…orz

第十六匹 【総合戦技評価演習…？～前編～】

バカンスというわけでやって参りました…島っ！
いやぁ、太陽が眩しいっ！俺のキャラも根暗から思わず変わったま
うぜっ！

「お前…いやにテンション高いな…」

「あつたり前だろう…暑いんだから。」

「暑いから？」

「暑いから。」

白銀との会話約数秒…周りの皆も俺の様子に若干驚いているようだ

「あんだ、頭の回路焼き切れた？」

夕呼姉…そりゃないよ…

第十六匹 総合戦技評価演習…？

まり…神宮司教官から指令書を受け取り、207B分隊のメンツ
はそれぞれのノルマの為にチリジリになる…メンバーは、白銀と鎧
衣の野性児コンビ、榊と彩峰の犬猿コンビ、で…残った俺達は…

「俺達は、このBポイントの施設の破壊を行うわけだが…任せてくれ、この手の依頼は何度かこなしてる…珠瀬ふせっ！」

「へみゅ?!」

ジャングルのような林を御剣と珠瀬に俺が突き進む…先程から珠瀬の被トラップ率の高さに驚きを隠せない…

「凄いな…後ろから来る丸太を反応するなんて…」

「背中をドスン…なんて傭兵稼業じゃ、よくある事だし…はあ、いかに自分が戦争屋と化してるかよくわかるよ。」

俺は多分、暗い表情…というか、自虐的な表情でもしていたのだろう…

「いや、別に蔑んでいる訳ではない…ただ純粹に私達と近い年齢なのに凄いなと私は関心しておるのだ。」

何故か御剣にフォローされた…あれ？俺まるで虐められっ子がよくなる自分が悪いんだ病みたいだ…虐められ過ぎるとなるアレだ

「そつで…へびゅ?!」

珠瀬が何か言おうとしていたがそれ所ではない…何かに囲まれた

「成る程…これもトラップか…よっ」

不穏な空気が辺りを包む…何なんだ？何が来る？

「拍子抜けなくらいに何も無いな…まさか、道間違えたか？」

「ううん、多分偏った罠の張り方をしたんだと思う。ほら、あった。」

「

「こちら、野性児コンビこと白銀&鎧衣ペア…順調に

「あ、しめじだ…なんで生えてんだ？」

「ううん…やめた方がいいね。火が確保出来るわけじゃないし。確保出来ないといえば…(ry)」

「そうだな、にしても目標を破壊するにしても時間とか気にしないといけないし…犬猿コンビが仲割れてなきやいいが…」

マイペースな二人だが、喧嘩とかは無く順調に進んでいた

「これは…何かの血？まだ新しいわね…」

「BETAかも知れない…急ぐ…」

「そうね…って置いてかないでよちよつとっ？！」

「柵はいつもワントンポ遅い…」

ある意味、仲良く先を進んでいた…うん、ある意味ね

「なん…だよ…あれ…畜生…」

「ま…ただ…ハア…ハア…」

「う〜…」

畏の正体は簡単…大量の丸太が迫って来たのだ
幸い、二人を抱えて夜鷹が飛んだ為大事にはならなかったが…

「っ…足イったな…」

「すまぬ…」

「気にすんな…ほら、アレだ…」

照れ臭いのか、顔を背けながら自分の足の手当をする…

「な、仲間みただからな…」

その姿はかの至高とすら呼ばれた存在…ツンデレであった
いや、この世界じゃ意味通じないかも？

「「ふふ…」」

「お前ら…笑うんじゃねえ…」

「いや、すまぬ…」

「どう考えても、笑うところですよ…」

「「だって」「

御剣は含み笑い、珠瀬は確実に大笑いを堪えている笑い方だ…なんでだよ？

「今まで、ただの冷血漢だとばかり思っていたが…なるほど、至って普通なのだな。」

「さりげなく、私達が怪我しないように着地もしてましたし…」

「なんだよ…おかしいかよ？」

夜鷹はその時だけ、疾風の顔をしていたかもしれない…冷血漢と言う仮面を思わず取ってしまったから

「思ったより普通な奴だなと…いや、他意はないのだぞ？」

「そ、そうだよ？」

「俺が…普通？」

今まで他人に呼ばれた職業以外の呼称って…イレギュラー、狂戦士、キガイ、悪魔などなど様々な蔑称で呼ばれていたけど…普通は初めて…かな？

「さて…先を急ごうぞっ！」

「「おっー！！」」

「お前ら…あまり大声出すなよ…」

にしても久々な気がする…同年代と話すのって

ORCAじゃハリぐらいしか年齢近いのいなかったし…あれ？俺テ
口集団の最年少？

「何とか着いたな…なんか、悪意を感じたがまあ、目的は達成出来
そっだ。」

残り物トリオこと俺、御剣、珠瀬グループは何とか目標の位置ま
でたどり着いた…が、即効で破壊するのはもったいない

「さーて…たのしい、火事場泥棒タイムとしゃれ込みますかあ」

「なんか、もう少し良い言葉はないのか？」

「ちょっと、悪いことしてるみたいで…」

ふむ…二人共良いとこ育ちなのか今ひとつテンション低いな…こ
れはいかん

「資源再利用という賢い言い方もあるがな…まあ、戦争やってんだ。汚かるうがなんであるうが生き残らないといけないんだよ…分かるな？」

「うむ…たしかに、勝たねばこの先は無いが…」

「俺は、傭兵だから尚のことな…戦いにおいて賢しくなければいけない。でないとその先は『死』しかないからな。」

「「…」」

「まあ、二人はそんなことの無い正規軍にいるが…BETAがもし、殲滅されたら即効でやめた方が良くぞ？」

意味深な事を言いながら夜鷹は施設潜入への道を探す…傭兵稼業が慣れるといけない…つつい、こんなところでスキルを発揮してしまう

「さて、潜入しますか…いこう、時間が押している。日が出ているうちに潰したい。」

「そうだな、コレは試験だ…手段は選んでいる場合ではない。」

「そ、そうだね…うん、いこうっ！」

だから、大声はやめなさい…緊張感のない連中だな…ホント

「異常無し…おかしい、普通いかにも釣りな施設なのに罨一つないとは…」

「一応、破棄されて間もないらしい…が、破棄の理由は不明だ。」

演習の一つにここまでシナリオを入れるなんて鬼だな…しかも、俺にはその情報は無し…か
おもしろい…フフフ…

「成る程、資源防衛用の罨も仕掛ける暇もなかったと…珠瀬、見える範囲におかしな物はないか？」

「大変理解に困ると思いますが…何故かドラグノフが置いてあります…」

「…ドラグノフ…だと？」

ドラグノフ狙撃銃…ソビエト製の銃で長期戦を想定し、部品数を減らし剛性があるのが特徴
運搬を考慮して、肉抜きされている部分が多いのも他とは違った特徴だ

「ソビエト製の狙撃銃…いよいよきな臭くなったな。とりあえず、こいつは回収だな…時間はまだあるし、今の内に回収出来そうな物は探しておこう…」

とりあえず、俺は珠瀬＋御剣と1：2で分かれて探索を続けた…その後、御剣は新品同然のロープを見つけ、俺は施設破壊用なのか

爆薬を見つけた…やはり、何か悪意を感じる

『いい加減、表に出たらどうです?』

『…しかし』

横浜基地地下深く…山吹の結晶が不気味にピコピコ輝いていた…
それを見ている社のウサミミ?もピコピコ動いている

『そろそろ出ないと、彼は帰ってしまいますよ…嫌ですよ?貴女匿
つたからって核をぶち込まれるのは…』

「核…ですか?」

『そうよ…霞が思い浮かべる核とは少し違うわね…私の言う核とは、
大型ミサイルの俗称…とにかく、当たったらジ・エンドよ?』

訳がわからないのか、社は頭を抱えてウンウン唸っていた…わか
らないのも無理はない…AC用語と化した物を知らない人物にいっ
ても意味不明だ

ちなみに、核とは、本当に大型ミサイルの俗称であり、その威力と
命中時熱量、爆風が核ミサイルみたいだというので名付けられたら
しい

『ラナ・ニールセン…貴女の面子なんか知ったこっちゃありません
…しかし、ここにいるのは過去に彼にトラウマになりそうなられ
方をした者ばかり…いい加減にしないと袋にしますよ?』

『ぐ…わかったよ。会えば良いのだろう？会えば…』

余程、核ミサイルが怖いのかIBICことセレ・クロワールは必死だ

装甲が貧弱なIBICに核ミサイル…苦痛を感じる前に死にそうな気がするが…

「ところで…ラナ…さん？はどんなやられ方をしたのですか？」

『…月光だ。』

「『…へ？』」

月光…月の光って事は対艦巨砲か何かそれに付随するなにかだろうか？

『私は、レイヴンズ・ネストに生み出された対イレギュラー用AC…ナインボールを官制する為に生まれたAIだ…が、ネストも亡くなり、のうのうと過ごしていたのだが…あの日までは』

『大体察しが付きましたよ…彼ですね？』

「??？」

着いていけない社を置いて話は進む…戦争の話は彼女にはしたくないが今は致し方ない…蜂の巣にされるよかマシだ

『ああ…私達、レイヴンズ・ネストの最高戦力…ナインボール・セラフが月光…LS-99-MOONLIGHTの事だがとにかく酷

くてな…ミサイルとマシンガンで削ったと思いきや、こちらの想定していない近接戦闘しかけてきやがった…」

『彼、相手の裏を欠くのを至上の喜びとしていますから…パルヴァライザーも躊躇無くとつついたみたいですし。』

『鬼だな…』

顔は笑っているが、内心はトラウマを二人共刻まれている…ハスラー・ワン…ナインボールの対レギュラー戦闘平時部隊のEースAIすら戦慄する機動は、彼が本当に真人間かを疑いたくなる事だったとにかく避けるのだ、死ぬ気で酷いくらいに…三次元の攻撃に未だに慣れないようだが、それでも避ける

「ようするに、奇策が好きな方なのですか？」

『そうですね…とにかく、戦う相手のウィークポイントを傷口をさらに抉るように突いてくる奴ね…』

『それについては同意見だ。イレギュラーというより、チンピラと言った方が正しいかもしれんな。』

『そのチンピラにねっ』うるさいっ！『貴女の方が五月蠅いですよ…では、ラナ。貴女匿って管理者全滅とか洒落にならないから、彼が帰ってきたらお願いしますね？』

『いいだろう…ここまで来たら腹括ってやる。』

彼らは、本当にコンピューターやAIなのだろうか？

物凄く人間っぽいなと社は思ったのであった…

〕後半へ続く〕

第十六匹 【総合戦技評価演習…?前編】 (後書き)

ACMOAのオペレータ、ラナさんの登場…彼女と夜鷹の関係が、夜鷹が伊隅大尉に様付け(心の中で)の理由が発覚するが…経験者はもうわかるだろうな…

現在の管理者格付け

IBIC〓??>??>ラナ(正確にはAIだが)

上は深く考えなくても大丈夫です。

第十六匹 【以下同文、中編】（前書き）

まさか、三つに区切らないと締まらないとは……ここだけは真面目にやりたかった……だって唯一の主人公が人間アピール出来るから（モイ

第十六匹 【以下同文く中編く】

とりあえず、爆薬とロープ、大振りなナイフに鉄板：それにドラグノフ狙撃銃を確保して俺達は施設を出た

「さて、とりあえずジエバンニが一晩でやってくれました的に俺が三分でこのBETAの巣になっている基地に爆薬を仕掛けましたよつと。」

「ちよ、ちよつと待てつ?! BETAだとつ?!」

「そんなのいましたか? ミキ達、普通に基地の中を探索しましたが…?」

意外な事実二人共取り残されがちみたいだ：ああ、気持ちいいつ! カラミテイメイカーとはいいい酒を飲む仲間なのは今明言しておくトラップ仲間は素晴らしいつ! ビバ爆雷! でも、陰謀屋は死ぬつ! 王? んなやつ、シヨットガンで蜂の巣にしてやったわつ! 勿論：奴の居場所をBFFから奪ってからなあつ!

「カサカサ五月蠅かったからな：大型のナニカが動き回っていたのは入った時から気付いていたから、二人に言っただろう? 大声出すなつて。」

「「…」」

開いた口が塞がらないみたいだな…

「まあ、二人にパニックになられても困るし、穩便に始末出来そう

だから黙っていたんだ…ゴメン。」

「…うう…」

「そこまで言われて、許さない道理は無いな…戦争経験から言えば、そなたが1番なのだから当然の判断だろうが…正直、生きた心地がしなかったぞ…」

「だからゴメンって…さて、そろそろだな…」

「「?/?」」

建物： 大型施設レベルになると破壊するのに相応の知識が必要になっってくる

『自分が』安全かつ迅速に…何年も壊し続けると壊し方を何となくだがわかるようになってきた…って言うのは嘘で

俺でない俺が残した記憶を元に爆破しました、まる

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド…

荒廃した基地が内側に飲み込まれるように潰れ、消えていく…

BETAのたむろしていたフロアもすり潰され、作戦第一目標はこれです

後は合流、目標地点にて解散という流れだが…

「ん？委員長達と白銀達も無事目標を達成したみたいだな。」

「む？おおっ！」

「煙が二カ所が上がっていますっ！」

施設破壊は人手が必要な依「…ミッションだ

1番キツイ場所を受け持ったとは言え、中々慣れてるなあ…いいテロリストになれそうだな、みんな

「んじゃ、行きますか…合流地点には明日向かおう。晩飯に野兎とか探しますかね…」

「待ってくれ。」

「なんだよ…何か策でもあるのかな、御剣訓練兵？」

施設破壊という第一目標 + BETAの残存勢力を叩いたんだ…少しの悪ノリは構わんだろう？

「は！その件ですが、私に任せてくださいっ！」

「…は？」

「私にも任せてくださいっ！」

「なんだん…いやにやる気だな。お前ら？」

罪悪感をごまかす為に軽い思考誘導はしたが…変なスイッチでも押したか？

「施設破壊の前のトラップでそなたは怪我をしている…今くらいはゆっくり休んでいてくれ。」

「そうです、ミキ達が原因で怪我をしているのに、その怪我を悪化

させたら後味悪すぎますっ！」

成る程、あくまでも『自分の為』とぬかしたか…よく相手を分析してやる

白銀みたいな元一般人なら未だしも、ウォーホリック（戦争中毒）の俺に『貴方の為』とか言った日には『裏切り対象』になるのは間違いなし…貴方の為とか言いながら近付く奴にまともな奴はいないのは普通の常識だ…真っ黒い腹をかつ捌くならまだしもねえ…

「わかった…じゃ、俺は野営の準備しとくは…」

「任せてくれ…」

「行ってきまーす。」

「はい、いってらっしゃい。」

戦果は期待せず、気長に待つ事にした

とりあえず、野営が出来る場所を探した…出来れば奥に向かって天井が高くなる洞窟がいい、そうすれば野営時に出る煙を外に漏らさずにすむ

「都合よくあるもんだな…っと、やっぱりね…こんなオチか。」

洞窟の奥にチラチラと見える白い影：俺は面倒が嫌いなんだ：

「いっちょよ、大掃除としゃれ込みますか…」

ナイフを構えて奴らに近づく：イラつきが何故か隠せない
白いの：兵士級だったか？徹底的にバラさせてもらう…

「ああ、二人共お帰り。」

「ただいまって、何なのだコレは…」

予定していたところにある洞窟に入った二人が見たのは、鉄板焼きにされている大きな肉塊と血だらけの夜鷹：楽しそうに肉を焼いている

「そんな血だらけになって…だ、大丈夫ですか？」

「ああ、100%俺の血じゃないから。洞窟の奥に居た奴をしとめてさ…いや、大物だったね。」

肉塊をひっくり返し、虚ろな瞳で肉に向かう：カニバリズムの気は無かった筈だが、空腹に勝てるはずも無く適当に摘んで来た野草で血の匂いを誤魔化す

血抜きは奥の川で済ませたから良いのだが、やっぱり臭い物は臭い…うん、臭い

「だ、大丈夫ですか？」

基準を間違えていた…こっちは、破滅を待つしかない消極的民族、片やあつちは侵略にあり敗色濃厚であるうと戦い続ける骨太民族…何が言いたいかというと、腹の出来が違いすぎなのだ…俺が鋼鉄の胃袋なら彼女達は金剛石の胃袋…モール度5・1だ

「ごめん…後二分…」

「意外ともやしなのだな…消化器官が。」

「ぐふう?!」

意外とダメージデカイな…言葉が真っ直ぐな分より痛い俺のように汚れ、地獄ではいずり回るような負け犬に彼女達は眩し過ぎる

「よし、復活…三度目の正直っ!」

「二度あることは三度あるっていいますよね？」

「…」

今度こそ…今度こそ平気な筈だ…

出るもん出した、胃洗浄したかの如く綺麗な筈だっ!

「では、今日は寝るか…30分だけ寝かして…後は起きてる。」

「ぐっすりと寝ると良い。」

「おやすみなさい。」

「ああ、おや…すみ…ZZ」

こうして俺は、夢の中に旅立った…

AMS負荷が無い以上、30分も寝れば俺は回復出来る

『ハッピーバースデー、ハヤテっ！』

俺が18になった誕生日…始めて両親が揃って祝ってくれたのだ
研究者である両親は、よく帰ってこない事が多くて一人の事が多か
ったのだが、今回は研究が一段落付き長期休暇を貰えたらしい
…しかし、今思えば全ては伏線だったのかもしれない…何故なら

「な、なんで…ハスラー・ワンが…ナインボールが家を襲うんだよ
っ！」

突如飛来した赤いACが全てを破壊しつくしていったからだ…ハ
スラー・ワン

当時、最強の呼び声が高い最強のレイヴン…の筈だった

家を失い、親戚の策に嵌まった俺はレイヴンにならざらえなくな
り、がむしゃらに戦って来た…そんな時に彼女と出会った

「お前が夜鷹だな？初めまして、ラナ・ニールセンだ。」

真つ直ぐな戦略眼に的確な指示…

とにかく、彼女とは長い付き合いになるだろうなと俺は考えていた…あの日までは…

「これは…」

彼女が消えて数週間…アリーナのランクも2位にまで上りつめた俺にあるメッセージがやってくる

【私はここで待っている…】

消えたマネージャー…ラナ・ニールセンからだった

彼女が生きていることにホツとし、同時に憎悪した

ナインボールに合わせてやる…彼女が俺を釣るためにいったであらう台詞をまた言ったのだ…

同時にこの時どうでもいい事を思い出した…彼女がナインボール…レイヴンズ・ネストである事を

「よお…合いに来たぞ。」

『遅かったな…てつきりがつつくと思っただが。』

愛機の通信機から聞こえたのは、ラナの力強い声ではなく、男性の…生きている人間の物とは思えない抑揚を感じない声であった

「一つ聞きたい…答える、ナインボール…いや、ハスラー・ワンっ
！…」

『良いだろう、それを知ったところで貴様の運命は変わらない。』

久しぶりに頭にくる物言いだ、相手は管理者…機械だ

何言おうが関係ないだろうからぐっと堪える…怒りを刃に変える為に

「貴様はあの時…俺の…俺の家族を殺した犯人だな…」

『貴様の家系…コジマの系譜は危険過ぎる…進化を誘発し過ぎるのだ。現に貴様は一つの企業を不必要に大きくしてしまったからな。』

「…そうか…」

理解は出来る…コイツが人類をより良くする為に頑張っているのもわかる…が

「俺はな…気に食わないんだよ…」

『…何？』

「そうやって偉ぶって…お山の大将の気になっている奴がむかつくんだよ。」

『…』

管理者…レイヴンズ・ネストは何も言わない…コイツやたら饒舌だった気がするんだけど…気のせいか？

「この際、復讐とかどうでもいい…今この一瞬は…」

俺は、愛機を目の前にいる二体のナインボールに向ける…ブース

ターに火が入り、ジェネレータが唸りを上げ、ラジエーターが熱せられたジェネレータを冷却する…

「力こそが全てだっ！！」

この台詞はかなりフライング気味だがこの際どうでもいい…コイツに、ハスラー・ワンに俺は勝ちたい、力を証明したいっ！！

「ぜ、はあ…はあ…」

目の前には二体のナインボールの残骸が転がる…戦いは壮絶を極めた

二体から打ち出されるパルス弾が迫るプレッシャーに耐えながら、俺は弾丸を二体に叩き込み、月光…イレギュラーナンバーのレーザーブレード…ムーンライトを叩き込み破壊する

「…この先か？」

ここまで来た時に見た無数のナインボールからして、多分ナインボール無限湧きとかだと考えている…やな予感で頭がいつぱいだ…

『久しいな…ホント、不必要に大きくなって…』

「…」

目の前には、赤くこれまで見た兵器とは常軌を脱した姿…

『コイツは、ナインボールセラフ…対イレギュラーを想定し開発されたネストの最終にして最強の機体だ。』

「…なんで、なんでそんなどうでもいい事を俺に教える？」

しかし、その機体からはハスラー・ワンの…男性の声がしない？

『お前には…知っていて欲しかった。私がかを、私は何故生まれかかを。』

「そうか…でもな…」

空になったライフルを捨て、格納されていたハンドガンを取り出す…牽制にもならないだろうが頭を狙って行く…

今は温存したミサイルでダメージを蓄積させ、ブレードで粉碎するのが妥当策だと考える…狙いは相手のブレードを振り切った後…が、それは装備していればだ

『目標確認…排除開始…』

「勝負だっ！」

俺はヘルメットを脱いで対峙した…

「ん、むう……」

リミット30分か…交代だな

「ん…ああ、どっちかわわるぞ。」

回りの悪い頭をたたき起こして状況を確認する…隣には珠瀬が丸まっつて寝ていた…うわあ、罪悪感

「となると御剣か…お、交代するぞ。」

「起きていたのか…頼む。」

音がならないようにハイタッチをして交代する

周囲は既に夕焼けの終わりを告げていた…遠くに夜の帳が見えて来た

「さて、夜の行軍と洒落込みますか…ふあ…」

未だに眠気眼を擦って気にのぼる…木葉が身を隠してくれるから敵に見つかりにくい為、監視には打ってつけの場所だ…こうして、夜は明けた

第十六匹 【以下同文→中編→】（後書き）

前回、後編に続くとか言ったのに中編で申し訳ない…いや、申し訳ない。

個人的にYes AMIDA No BETAな考えです。

アマダに爆殺されるのはご褒美ですが、BETAに撲殺されるのは許しません。

愛嬌のない生体兵器なんてゴジマで焼き殺してくれる！！

…これが済んだら潰れたイベントの説明+ハイヴ攻略+アイツら今
…をやります

…感想を下さい)m——(m

第十六匹 【以下同文、後編】（前書き）

演習編もこれが最後：残念だけど急ピッチで終わらせていきます
（つ、、；）

第十六匹 【以下同文く後編く】

夜も明け、俺達は移動を開始した…目指すは合流ポイントっ！

「…嫌な予感がするな…」

「?どうしたのだ?」

空を見上げ、空を睨み付ける俺を心配したか…とにかく気になったのか御剣が俺に話かける

「いや、先を急ごう…手遅れになる前に。」

「そうだな…いそごう。」

「レッツ、ゴー」

俺達は、森の中にある合流ポイントに向け歩き出す…想定範囲なら仮想敵、それ以外のイレギュラーを合わせて遭遇するのはないだろう…しばらくは

「（急がないと…確か、演習の途中で雨が降る筈…それまでに合流しないと）」

珍しく、白銀 武は焦っていた…何故なら、いくらこの先を大雑把に知っていようと

その場の微妙な変化で変わる『天候』だけはどうしようもないからだ

「この先だね…あ、御剣さん達だ。おーい」

合流地点で待っていたのは、御剣達のグループと榊達のペア…よ
うするに、自分達以外の全員だった…野営の為か、簡単な布の屋根
を作った物の下にみんな居た

「遅かったな…二分オーバーだ。」

「悪い、遅れた…てか、足どうしたんだよ？」

白銀は、足が腫上がった夜鷹を見る…顔は変化が無く、ポーカー
フェイスだが御剣達の様子を見る限り、危険なのは良くわかる

「少し、捻っただけだ…それより、先を急ごう。」

「ちよつと待て、その足で行くつもりかっ?!」

理解できないと周りもうなずく…足とは、人が不自由なく生きる
上で欠かせない部位だ

それを失うような怪我をしているのに、顔色一つ変えずに…歩き方
も普通のままである

あまつさえ、その背には鉄板を背負っているのだ…心配しない筈が
無い

「あ…あのな…コレでも、表面の筋肉が少しいかレただけで問題ないん
だぞ？おまけに骨はチタン合金だし。」

「…は？」

足…いや、脛で木の幹を蹴り樹皮を抉る…痛くないのか平然としている

「AMS負荷…まあ、脳に直接かかる負荷のせいで頭イカレてさ…痛覚無いんだよ。さて、先を急ごう…スコールがもうじき来そうだ。」

「そ、そうだな…だが、詳しくは後で聞くからな。」

「わかったよ…冥夜（ボソツ）」

「…えっ?!」「…」

とにかくっ！俺達は先を急いだ…途中の追求がマジでウザくて散らした（主に白銀を）のは言うまでもない…こいつ等小学生か…

「ここか…」

一同、今回の演習のゴールポイントに来ていた…皆さん、浮かれムードだが約二名程鋭い視線の輩がいた…夜鷹と白銀…男衆だった白銀は、前回の記憶からだろうが夜鷹は知らない…何故ならタケルちゃんが教え忘れているからだ

が、持ち前の警戒心が鉄板を盾にしながら先に進むのを推奨している

「委員長長っ！お」「俺がやるっ。」「え？」

珍しく積極的な彼に委員長こと榊は困惑していた…普段、やる気が無いを総動員したような彼はあまり話さない問題児なのだ…が、やる事には忠実の為そこまで問題視していた訳ではないからだ

「無理しなくてもいいわよ？別に後は発煙筒をあげるだし。」

「榊…お前は今回、誰がこの演習に同伴して来たか覚えているか？」

榊は、何を初步的な事を言っているんだと思いつつながら発言する

「神宮司教官と香月副指令でしょう？何を言っ」なら、何故罷だと気付かない？」「え？」

一同、啞然とする…いきなりなんだと

白銀は何か知っているのかウンウンと頷いている…後で絞めるかこの合法ハーレム野郎は…

「お前ら、演習がこんなにあっさりと終わる筈がないだろう…前回だったか？地雷源を張り巡らす連中だぞ。」

言われてみればと冷や汗を皆流す…経験があるのか一部萎縮しているがスルーだ

「今回も何かあるかわからない…神宮司教官の口から合格の旨を聞くまで油断するな…戦場での油断は仲間の死を招く。」

夜鷹…いや、まさしく鷹のような眼光で一同を睨み付ける

「さて、白銀…鉄板持ち頼むわ…正直辛い。」

「あ、ああ……」

背負った身の丈ほどの鉄板を白銀に渡し、俺は発煙筒を持って歩き出す……硝煙の臭いがすれば狙撃とかわかるが海に面し、風が強いここで望むのは酷だろう

「いくぞ〜」

「バチコイっ！」

白銀が鉄板で俺の盾役をしている……他の連中は岩影に身を隠す

ボシュ……ボ……ボボボボボボボボボボボボボボボボ

発煙筒から煙が上がりヘリがやってくる……がやたらゆっくりだこのパターン、まさか……っ?!

「お「みんな伏せろっ!」うおおっ?!」

ヒュ……ダダダダダダダダダダダダダダダダダダっ!!

機関銃からなのか、大量の弾丸が飛んでくる……やっぱり、助けてくれレイヴン……化け物だ!のパターンか……

が、俺は白銀にグシャツ潰されるように……いや、潰された

白銀は鉄板を突き立て岩影に非難する……潰された俺は鉄板の影に残された

死ねリア充……もげるか赤玉出やがれ

「白銀…あなた、死人に鞭打つような真似してどうするのよっ!」

「そつだぞ…もし、鉄板が厚く無ければ夜鷹は蜂の巣であつたぞ。」

「…薄情」

「ちょっと、見損ないました。」

若干、ビビりのキラいが昔からある白銀 武でさえでもこの状況はしょうがないかなと思つていた

あの後、鉄板の影に残された夜鷹は何か生き残つた…が、白銀の筋力で地面に押し付けられた逃げる気満々で無防備な彼は、頭を強く打ち脳震盪を起こしたのだ…

彼らを強襲した砲台は、レドームに感知した物を自動攻撃するタイプのようでレドームを珠瀬に破壊された砲台は呆気なくその生涯を閉じた

現在、新たな合流ポイントを指定されてそこに移動中だ…

「それにしても、タマは凄いやな…あの距離を当てるなんて。」

「夜鷹さんのアホ面みたら緊張とか吹き飛んだんです…ほら、普段見慣れない物見たからつい…ムフフ…」

つまり、夜鷹が気絶した状況が彼女の笑いのツボにはまり、緊張せずに済んだらしい…アホ面は言い過ぎだと思う

「それにしても、よく寝るよな…プ…」

気絶した彼は、まるで普段の厳しいイメージを壊す小動物的な物を醸し出していた…

ギャップ萌えとはこの事だろうが、残念タケルちゃん…彼は攻略対象じゃない

「昨日、僕から私達を助け…さらに30分しか寝ていないのだ…無理が祟ったのだろう。ゆっくり寝かせてあげようぞ…フッフ…」

「マジか…30分とか昼寝だな。」

「30分は頭を活性化させるのに必要な(以下略)…酷いよ。」

サーセン…彼は、小動物…所詮首輪付きケモノのように變くるしい彼を鑑賞しつつ先を急いだ…

「ん…むう…」

気がついたら砂浜だった…超高速とか

「あら、起きたの…おそよう。」

最後まで言わせてよ…いつか言いたかったのに…ポルポル…

「演習は…どうなったんだ…」

「アンタ以外みんな合格…いや、アンタの場合、全部『契約範囲』内ね…」

そう、全ては茶番だったのだ…俺が彼女達の元に来たのはある依頼が来たから
それは…

『00ユニット候補生の増員支援』

00ユニット…いや固体名カガミスミカでは無く、管理者達の集合体…通称『宝石』の演算支援の為に彼女達が必要なのだ…

宝石は、それだけでかなりの演習力を持つ高効率演算サーキットだが、その真価はAMS特性を持つ人間が近くにいる時に発揮する人間は従来、脳髓に使われないで封印されている部位が存在する

宝石は、遠隔でそれらにアクセスし間借りする事で後に演算効率が向上する

現在、戦術機を介したアクセスが高い効率を誇るので彼女達には衛士になって貰うのだ…ただ、ただそれだけの話しだ

リンクスは、ネクストを操縦する上で封印された部位を使う為間借りが出来ない為、今回このような措置をとる羽目になったのだ

「酷い話だよな…アイツらはなんて？」

「話す訳無いじゃない…アンタと違って、利用されるのに本質的に慣れている訳じゃないわ…」

「成る程、流石は魔女か…使い魔の使役はお手の物か…」

飽きれ気味に溜め息をつく…割と本気で『人間』に戻りそうだったが、もう平気だ…俺はリンクス…ネクストを運用する為の『兵器』

だ

「後、アンタ宛にメールよ…明日ORCAの連中が迎えに来るらしいわ。」

「長いようで短い数カ月だったよ…ありがとう。」

夕呼姉は照れ臭いのかそっぽを向く…

「アンタ…だから白銀とドッコイドッコイって陰口叩かれるのよ…」

「なっ?!…どういう意味だよそれっ!…」

立ち上がるが、立ちくらみを起こしたように夜鷹は崩れ落ちる…
足にはギプスが巻かれていた

「今はゆっくりなさい…長い休暇は終わった証だとか考えときなさい…」

「…ああ、休暇は終わりだ。話…クローズ・プランについては聞いているかい?…」

夕呼姉は、苦虫を噛み潰したように嫌そうな顔になる…過激な事は嫌いなのか?

「あの夢物語ね…アンタ達本気?…」

「ああ…大真面目だよ。世界にはツケを…新たな進化への対価を取り立てないとね。」

クローズ・プラン…現在ORCAが暗躍している計画の一つだ…
やることはただ一つ…

「世界の統一と安泰させる為の戦争…か。まあ、私に止めるのは無理ね…発言する前に消されるのがオチ…かな。」

浅瀬ではしゃぐ皆を見守りながら、夕呼は酒を煽る…疾風は、ギプスを外して歩き出す…体内のナノマシンでもう治っているから
この時から、世界にはゆっくりと濁り水が流れていた…粉碎者は人間に、魔龍は世界には巻き付くように緩やかに…ゆっくりと…

第十六匹 【以下同文、後編】（後書き）

演習の真実とORCAの野望…水没王子は真面目にテロリストをやる予定です

ORCAってある意味宗教ですよ…ほら、企業の悪事を晒すとか今後の予定は帰宅編とオリジナル展開への下準備です…

今後ともMuv-Luv for Answerをよろしくお願ひします（m——）m

後、感想欲しいです（；；；

総合評価162も貰って嬉しいけど生の声とか聞きたいです…or

2

第十七匹 【憂鬱な渡り鴉と時々変態】（前書き）

指摘にあった地の文？を自分なりに増やしてみました…どうなの
だろうか？

最近、自分に地の文増量週間を課していますが、結果は読んでみて
判断してください

第十七匹 【憂鬱な渡り鴉と時々変態】

ただ一人、沈黙の帰りの輸送機の中、夜鷹は考えていた…ORCAに帰ったら何をしようか、今後何が起きるか、自分がこれから何を起こせるのかを…

第十七匹 【帰巢本能…そして、分岐点】

ラストレイヴン…粉碎者、パルヴァライザーとインターネサインの一件で彼は学んだ事がたった一つだけだがある…受動的に動くよりも、能動的に動いた時が良い場合もあるという事だ

自分で情報を集め、状況を整理したほうが情報を与えられ、推理するより遥かにやり易いのだ…が、情報統制が完璧な『3』のような地下世界ではあまり意味が無いのだが

「（しかしまあ…とりあえず、帰ったら愛機の調整しよう…やな予感がビシバシする…）」

それは、主にそれはこれからの事象と言うより愛機の安否を気遣っていた…現在、愛機は月面にあるORCAの武装基地に收容され、対ハイヴ内戦闘用の改修を受けているらしい…アクアビットにトールラス、ラインアークに旧レイレナードの各技術者が兵士級よろしく群がって改造しているらしい…気持ち悪いぞ、普通に

断言しても…賭けても良い、絶対に…絶対に俺の愛機は原型を留めていないだろう…

アクアビットにトールラスだぞ？あのh（…中略…）まあ、とにかく

原型は留めていないだろう…買いなおすべきだろうか？

妙な心配をしていたら、輸送機は深夜2時に横浜基地に到着した…
バカンスをしている他の連中を置いて来ている…

これはある意味彼のヘタレ気質を如実に示しているのかもしれない

「明日には迎えが来るらしいが…誰が来るんだよ…不安だ。」

足は既にリンクスになる際に施されたナノマシンの影響で大体治癒しているとはいえ無理は出来ない…故に大人しく寝ていた

しかし、今までを振り返るとかなり新鮮で楽しかった、いきなり、女所帯に転校生のように転がり込み、そのまま暫くの間、同じ釜の飯を食べる仲も出来た…人間らしくなれたのだろうか？

いや、なれたらう…今こうして、自分を自然と肯定できている
ちゃんと自分の名前に嫌悪を感じている

「……………？」

不意に、妙な気配を感じる…正確には帰って寝て、起きてからだ
ベットの中で何かが蠢いている…正直、いい加減現実逃避はやめよ
う…

戦わなきゃ、現実と

「久しぶりだな…夜鷹。」

「…アンタ、社じゃないな…なにもんだ？」

様子が明らかに違う…普段、俺以上に無表情な彼女が不適な笑みを浮かべている

演技でもない…彼女から自然とにじみ出る気配が社から漂い、夜鷹の不安を掻き立てる

「…ごあいさつだな、かつてのマネージャーが尋ねたのに…ふむ、やはりこの鈍感相手には無駄だったみたいだな…社、ありがとう。」

「あ、おいっ?!」

捨て台詞を残し、何者かは消えた？

社は気絶したのか倒れる…息があるか確認したら、社は暢気に寝息を立てていた…

「何なんだ…いったい…」

事態についていけないのか、混乱気味の夜鷹…とりあえず、社を白銀のベットに寝かせておく…相部屋で良かったと思う瞬間でもある不意に、時間を確認しようと手持ちの端末を確認すると…

『…やあ。』

「うああっ?!」

気がついたら、いつか見た顔がどアップで端末の画面に表示されていた

さらさらとした金髪のポニーテール、どエス一步な顔立ち…しかし、その瞳は

ハイライトを写さない謎の仕様：

ラナ・ニールセン：かつて俺のマネージャーであり、最後には敵として立ち塞がった

彼女がそこにいた：俺はただ、呆然とするしかなかった

レイヴンズ・ネスト：全てのレイヴンを管理、統括していた組織その全体は企業も知らず、主にレイヴンを管理しているとしか知られていなかった

俺は今、そこに呼び出されていた：家族の仇がそこにいると聞かされて…

「ラナ：ラナっ！」

俺は、焼け落ちるニンボール「セラフから彼女：ラナを引つ張り出していた…

「馬鹿だな：たかが、実態を持ったAI：機械じゃないか…」

「そんな、止めるよ：冗談キツすぎる…」

下半身を失い、機械のような断面を彼女は晒していた：目はかつての光を写さず、虚空を見ていた

初めての人：彼女は、その時の俺の大半を占めていた：復讐の怨嗟に取り付かれ、妄執の業火から俺を拾い上げたのは彼女だった…

彼女彼女彼女彼女彼女ジヨカノジヨかのじよ…

家族を失い、心を失った人形の俺に心を吹き込んだのは彼女だった…一目惚れだったのかもしれない…復讐を焚き付ける一言かもしれない…それでも俺は彼女が好き…だった

「あり…ガとぅ…機械の私も助けてくれて…」

「ラ…ナ…」

「人間である私を救い、ネストに縛られた私をお前は助けてくれた…それだけで十分だ…」

「ラナ…ラナ…おい、目を開けてくれ…死ぬな死なないで…頼む…」

「すまない…ありがとう…」

そのまま、彼女は息を引き取った…機械の…プログラムかも知れない…だけど、彼女は最後に…笑っていた
その時から俺は、人を好きになることを辞めた…諦めた…

「…馬鹿…」

俺は、ボロボロのＡＣでその場を去った…この施設ではネストを直接破壊出来ない…なら、破壊できる場所を探すまで、こうして一人の復讐の幽鬼がさ迷い出した

『夜鷹』…最初は皮肉でつけられた名前だが、今では躊躇無く言える…

夜鷹…蔑称『売春夫』…自らを削り、己を殺した…俺は、自分が大嫌いだった…だから、あえてこの名を名乗っていくことにした

意識を浮上させ、端末を見返す…そこには、破壊される前の彼女の姿が居た

憧れ、求め、目の前で自ら破壊した…
思えば、俺が狂いだしたの彼女と会い、別れた時かもしれない

『おい、人を無視するとは良い度胸じゃないか…ええ?』

「…えつと…それ、完全に不良の台詞だぞ…」

『AIに不良なんて…酷いな、お前。』

しかし、久しぶりな割に何故か自然と会話が出来た…何故かはわからない…ただ、自然と笑えたり、自然と冗談が言えたり
まるで、まだ、白銀達と一緒に過ごした頃のように…

『さて、本題に入ろうか…』

「ああ、頼む。」

だけど、楽しい時間はすぐに過ぎる…最初は、多少のふざけはお互いにあった

だが、ラナの一言で引き締まった表情になる、仕事の顔だ

ラナの顔が端末画面から引っ込み、いくつかリストのようなデータが表示される

『私が来たのは、お前に謝るのもあるが…それ以上に現状を理解していないお前に説明をしに来たのもある。むしろ、それがメインだ。』

「そうか…助かる。」

彼女がどのように端末にアクセスし、どのように操っているかは知らないが、ここで余計な茶々を入れたら面倒な事になりそうなので黙っている事にした

ラナが操作しているのか、端末に様々な情報が次々と表示され、必要なものを残して消えていく

『まず、ORCAサイドのハイヴ攻略の状況だが…最近、思うように事が進んでないようだ…最近、観測された新種がコレ…お前達が乗るAC…ネクストと似た固体が確認されている。』

「ほう…固体の特徴は？何かつかんでいるんだろう？」

すると、端末画面内の情報は変わり、ある二機の情報が出て来る……一つは黒い四脚の支援機前提のアセンブルの機体……もう片方は、紫が印象的の中量二脚で中々遠距離での戦闘が前提そんな機体だ

『両方とも、BFFという企業のパーツを使ったACらしい。四脚の方はストリクス・クアドロ、中量二脚の方はプロメシユースというらしい。』

「へえ…前者は取り逃がしたが、後者は背中武装グレネードで吹き飛ばしたな…OGOTOで。」

王小龍もメアリー・シェリーも、かつて一度だけ戦った相手だ
多少の改善はあっても、最初のリンクスである『オリジナル』であ
る彼等は馬鹿みたくに戦術は変えないだろう

一部の例外を除き、オリジナルと呼ばれるリンクスは技術的問題な
のか、AMSの問題なのか、基本的に戦術は変えない…多少のスイ
ッチ（手持ち、格納の兵装を敵によって使い分ける戦術）はあつて
も、彼等にそれは望めないだろうが…

この戦争…もしかしたら、リンクス戦争の擬似的な延長戦になる
かもしれない

王小龍にメアリー・シェリーだけがあちらの手札とは思えない……
アマジীগさえ居たのだ…多分、他のリンクス…ジョシユアやレ
オンハルトも居るだろう

「面白いことになったな……実に俺好みな状況だが、些か面倒だな
……最悪、人類の半分は喰われるだろうがな。」

『だろうな。AC…アーマード・コアはそもそも、強襲を前提に開
発された機動兵器だ。コロニーやシェルター襲われりしたら終わり
だからな。』

しかし、問題はこれがあくまでも集団での戦争という点だ

相手…BETAはこちらのカウンターとしてリンクスとネクストを生
み出したのだろうか、人類としては最悪だ

ネクスト…コジマ技術全般に言えた話だが、災厄と表現されるよう
な機動兵器なのだ…何が動力かは知らないが、アマジィグを見る限
り少なくとも戦闘力は同じくらい…油断は出来ない

『それから、もう一つ…かねてから改修作業中だったお前の機体の
改修が、月面の資源開発基地で終了した。予定していたスペックよ

り多少の向上はあるが…これが仕様だ。目を通しておけ。』

三度端末画面の情報は切り替わり、かなり厳しいACの画像が表示される…全体的に角張、まるでGA…グローバル・アーマメントのフレームみたいだ

「何々…仕様は…はあっ?!」

端末に記された機体の仕様を見て夜鷹は…いや、その一瞬は普通の少年、疾風に戻っていたかも知れないが…彼は目を丸めた

「対ハイヴ内戦闘想定機体仕様書(仮)」

名称：未定(リンクスに名称を任せる)

全長：15m

動力：新型コジマ炉+肩部大容量コジマタンク×2

想定最高速度(オーバード・ブースト時)

・約2010km/h

推定通常速度(通常ブースト時)

・約800km/h

推定最低速度(歩行時)

・約300km/h

「…これは、ふざけているのか?」

『続きはまだある…読んでみる。』

仕様書の内容に額を押さえ、頭痛が痛い状態…ようするに頭が物事の理解を拒否している状態を無理矢理リカバリーする…
そんな彼にラナは追い撃ちをかけるように二枚目の仕様書を端末に送る…

「対ハイヴ内戦闘想定機体搭載予定兵装」

・対酸対衝撃想定追加装甲

グローバル・アーマメント

製作担当：GA

装甲内に各種兵装を内蔵する事で小型を量る物とする…以下目標
頭部

メインカメラアイ保護と生体センサーの充実を目的とする。

内部のカメラアイの設定及び素子を生体センサー用の物に変更
追加レーダーも搭載も視野に入れる

肩部

内部に大容量コジマタンクを搭載を視野に入れる…タンク製作は
トーラス担当の為に各自ミーティングをするように

そして、肩部には大型PA整流装置を兼ねる為、GAは担当のアク
アビットとミーティングされたし

脚部

本機体の弱点、機動力の低下を解決する為に大型ブースターを内
蔵をする

ブースター製作担当はインテオリオル・ユニオンの為、各自ミーテ
ィングの充実をするように…下らない企業戦争を休み、このロマン
の実現の為に尽力せよ

背部

機動力低下に伴う旋回力の低下を補うため、追加の大型偏向スラ
スターの装備を予定…スラスター製作担当はオーメル
と旧レイレナードである…喧嘩しないように…

「宇宙の…法則が…乱れた…」

『よくわからんが、気を確かに…まだあるんだぞ?』

あまりの内容の仕様書…いや、計画ならぬ陰謀書に疾風は天を仰ぐ……
頭を抱え、もういやだと言わんばかりのアピールをするが気になるのか続きを読む

・腕部複合兼用兵装

搭乗想定リンクス『夜鷹』氏の柔軟なAMS特性から、本機体は腕部の武装に複数の武装を集中する事にした
以下、搭載武装案

・パルスライフル

数が多いBETAに対し、牽制用にパルスライフルの搭載を推薦する

対ネクスト戦闘でも一定の戦果が期待できる

推薦部門：インテオリオル・ユニオン

・アサルトライフル

対ネクスト級を推定し、実弾であるアサルトライフルの搭載を推薦

対近接戦闘において、高い信頼性がある為、当部門はこの兵装を強く推薦する

推薦部門：旧レイレナード及びオーメル

・コジマライフル

当部門は、本機体に搭載される予定の『大容量コジマタンク』に着眼し、この兵装の搭載されるを確信した

タンク内のコジマ粒子をライフルに回せば、ゼロタイムフルチャージを可能にする技術を我ら部門は提供しよう

推薦部門：アクアビット及びトーラス

夜鷹は端末に表示された情報を全て消し、溜め息を大きくつく…
端末の端に寄っていたラナが画面中央に戻り、疲れた様子の彼に話し掛ける

「ごめん、寝かせて…寝かせくれ。もう、寝たいんだ…」

『そ、そうか…いや、おやすみ。せめて、いい夢を見るよ。』

「うん、お休み…あ、帰る前に基地いる筈のピアティフさん達とかに挨拶しとこ…」

『律儀な奴だ…いや、メールを返さないから……いや、しかし……だが…』

健気？な事を呟きながら、夜鷹は夢の世界に逃避する…その様子にラナは頭を悩ませる…

結局のところ、彼らは今までみた計画書を見なかった事にするつ

もりなのだ

哀れストレイド…彼がその山吹色の機体を晒す事は無くなってしまった…

夜は長い…枕を濡らしながら、彼は眠りについた

第十七匹 【憂鬱な渡り鴉と時々変態】（後書き）

『ぼくがかんがえたさいきょうなネクスト』と『彼の恋心故の葛藤』を書いてみました…

憧れの初恋の相手に再開しましたの回…しかし、その相手に愛機は原型を留めていないことを聞いて落ち込む…そんなつもりで書きました…

何処に人間性取り戻す要素あったよという方は、サーセン…訓練兵の彼らのいい意味での悪影響を受けたと思って下さい
なにあの青春の縮図…まじ羨まし…うわ、貴様なにをs…(ry

ぐふう…次回からオリジナル展開を突っ走ります、サーセン。

第十八匹 【夜空に浮かぶ狂気の月】（前書き）

最近、別にネクスト作る会社の全ては変態企業じゃないかと思う
この頃……インテリオルのフェルミとか、大アルゼブラのカブラカ
ンとかね

今回、ある人物が最もな理由でそれは正しい行動を起こします

第十八匹 【夜空に浮かぶ狂気の月】

これを狂気と呼ばずに、何を狂気と呼のか：現在、月面のORCA本隊に合流した夜鷹は目の前の光景に冷や汗を流さずにはいられなかった…

彼は現在、新型の開発区画に来ているのだが、目の前の狂気に頭痛が酷い状態なのだ：あの（犯罪の）計画書通り…いや、それ以上のスペックを秘めているだろうかつての愛機に涙が止まらなかった…主に、全力の悲しみの涙で

彼は旧レイレナードの機械的な鋭角のデザインを

ローゼンタールの中世の騎士甲冑を思わせるデザインを

GAの無骨ながらも洗練されたデザインを

インテオリアル・ユニオンの流線的デザインを

アクアビットやトーラスの独創的デザインなど、それらの全てが好きだ

戦う為に無駄を削ぎ落とした、殺す為のデザイン…まさにミリタリー・アートと呼ぶに相応しいデザインを愛していたのだ…

だが、それらの物は目の前で地獄融合のような悲惨な状態で集まっていた

「これは…やばいつて…」

グローバル・アーマメント

GA製のような全体的に角張ったデザイン…

重量二脚を思わせるその機体は、ネクストを納めるハンガーで威風堂々としていた

「お待ちしてりました、疾風様。」

「…………え？」

認めたくないが、目の前の機体が多分自分の愛機なのだろう……
大型の肩パーツに隠れて見えづらいが、微かにレイレナード特有
の腕部パーツが見える……

そんな現実には打ちのめされて正しくorzのような姿勢でうなだ
れていると

ブロンドの髪が長い、美少女と形容してもいい女性、BFFのリ
ンクス『リリウム・ウォルコット』がいた

「あの…大丈夫ですか？」

「ああ、すまない…心配させてしまい申し訳ない。」

そんな落ち込む俺を、屈んで覗き込む彼女…俺は慌てて起き上が
り、はにかんで謝罪する

「……………」

「…どうした？ そんな固まって。」

彼女は顔を俯かせ、もじもじとする……その様子にあるキーワード
が思い浮かぶ……最近、俺はよく笑うようになったみたいだ
帰りに会う人皆に言われた……やっぱり、仏頂面より笑顔が似
合うと

どういう事なのだろうか……つまり、これはあれか？ 『ニコポ
って奴か？』

……んな馬鹿な話あるもんか……そんなスキルあつたらとつくの昔
にハーレム野郎をあんなんなる（主に白銀の事）までのさらばらせ
ておくもんか

それともあれか？ニコポは恋愛原子核にとっては基本中の基本だ

……

「疾風様……いいですか？」

「んあ？……はっ？！はいはい、何だったかな？」

思考の渦に吞まれかけた俺をウォルコットが引き上げる……しかし、その表情はどこか緩い

しかし、なんでカリードにも登録してない俺の本名を彼女が知っているんだ？

「団長がお呼びです。帰って来たら、至急団長室に戻るようになさってください！」

「ああ、了解した。ありがとうな、そんなパシリみたいな事してもらっちゃって。」

カリードランク2の彼女を、パシリとは……これは、彼女が何故俺の本名を知っているか、テルミドルに徹底的に聞かねばならぬみたいだ

彼女は少し、気まずそうにしながら最近の事を教えてくれた

「いえ、アンビエントが任務中に中破して暇だったので……では、まだ不慣れでしょうし、私が案内します。」

「そうか、助かるよ……ありがとう。」

本当は、引きニートなラナ辺りを引っ張り出してナビさせたいが、生憎手持ちの記憶媒体では彼女のデータは入り切らないらしい……

ちっ

散々遊ばれたから、今度はやり返そうと思ったのに

「あ……そうだ」

「なんだい？」

内心、悔しがる俺を察したか否かは知らないが、彼女は私服の白いワンピースの裾をためかせながら振り返り

「貴方の本当の笑顔……初めてみましたが、似合いますよ。」

「……ありがとう」

笑顔は仮面、本当の笑顔は爆弾……誰が言ったが知らないが、これは歴史に残る名言だろう

BFFの白百合は、とても綺麗だったと言っておこう……

彼女と俺は、月面基地を歩き出す……これからの事を聞く、今はこれが最優先事項だろう

「ここが、団長室です……お気をつけて。」

「ああ、ありがとう……って何を気をつけるんだい？ ちょ、ちょ
っど……」

彼女は、俺を月面基地の地下35階……団長室まで俺を案内すると、足早に去っていた……。しかも、『気をつけて』と意味深な事を言って……。怖い、怖すぎる

しかし、ここで引く訳にはいけない……。ORCAと俺は運命共同体だ……。それにウジウジしてても始まらない

とにかく俺は、先に進む事にした

「失礼します、お呼びでしょうか団長？」

出来るだけ淀みなく、俺の心象を悟られないように部屋に入る……。団長室は暗く、一人の男が腕を組んで威圧するようにこちらを見る……。ORCA旅団長……。オツツダルヴァことマクシミアン・テルミドールだ

「まずは、無事な帰還を祝そう。」

「ありがとうございます。」

……どこと無く、普段の声色と違う気がする……。まるで機械のような

「しかし、私は今対ハイヴ内戦闘想定……。という名目で開発中の新型に掛かり切りで忙しいのだ。

急な用があるならデスクの上の番号にアクセスしてくれ……。伝言は以上、マクシミアン・テルミドールだ。」

「……………は??？」

暗い部屋の照明が、少しずつ明るくなり、テルミドールらしき物は正体を現す

それは単にテルミドールが着るスーツを着せ、彼の髪型に似せたカツラを被せた人形だった……まさか……

「あの野郎……ハメやがったな……」

イラ付きを抑えながら、デスクの上にあるメモに書かれている番号を端末に入力し、テルミドールに電話する

数コール後に留守電に繋がる……まあ、流石に旅団長ともなれば忙しいのだろう

「……しかし、出ないな……多分、メモにある開発区画か？」

メモには、繋がらなければ直接来いと書かれている

「フロア……さらに下かよ。地下98とかやる気出し過ぎだろBETAさん。」

ここに来る途中、ウォルコットに基地について大体聞いた
月面ハイヴを攻略し、彼らが作った施設をいただき、改造したら
しい

反応炉は、敵を攪乱する為に残したらしい……定期的にBETAの自殺因子（細胞が新陳代謝の際に死ぬ為の因子……実在する筈）を活性化する情報を流しているが上手く処理されているらしい……やはり、コア（あ号）が邪魔か……

メモを再度確認した後、部屋を出てエレベーターで下のフロアに歩みを進めた

「団長、夜鷹……0024にただいま帰還しました。」

「ご苦労……ふむ、僅か数カ月なのにすっかり軍人だな。」

「茶化すなよ……ムカツク。」

テルミドールの想像以上の軽いノリにイラ付きつつ、開発されている複合武装を見上げた……なんでも、装甲は開発に時間を使えなかつたらしいが、複数の武装を一つに纏めるために色々と大変らしい

「さて、帰還祝いは後々にしておいて、問題はコイツ……AGUN
ニ
IとRUDORだ。」

「ほんと、欧州の人は神話好きね……町を焼き尽くすとか、予定スベックでは洒落になってないみたいだが？」

テルミドールが居たのは、制御系のプログラム等を製作する為の
区画……武装を担当する地区みたいだ

武装のハード自体は問題無いらしいが、従来の制御では武装だけでプロトタイプネクスト・アレサ並に負荷がかかりすぎる為に奮闘
中らしい

「くそ……やはりダメか……高度なAIでもあればいいが、今更育てていては、時間がいくらあっても足りないな……」

テルミドールは俺をほつたらかして、武装が表示される端末に向きあい、頭をかく……天才と言われ、自身の愛機であるアンサンクのプログラムも自らやるこだわりは感服するが、そんな彼も複合武装の出力調整に頭を抱えていた

いつかないのだ

奴が殺しという単語に対し、無邪気な子供のように食いつかないのだ

正直、彼に対するテルミドールの評価はあまり良くなかった
殺しに対して冷徹で、自分の命すらもチップにする……そんな自殺
志願者にテルミドールは良い印章は持てなかったのだ

しかし、今は余りいい顔はせず、やれやれといった様子だ
彼は変わったのかもしれない……良い意味で

「高機動ユニットに関しては、向こうで聞け。まあ、専用のVOB
みたいな物だ……中々、ぶっ飛んでいるぞ？」

「だろうね……更衣室って何処？」

「ウォルコットに案内させる……ああ、私だ……すぐに来てくれな
いか？愛しの兄様がお困りってうあっ?!」

面倒と言うより、どちらかと言うとやれやれと言った風情……攻
撃的な獣はそこにはおらず、代わりに甘い男と表された夜鷹(Ni
ght hawk)が居た

案内させる為にリリウムを呼んだテルミドールだが、リリウムが
大声でも出したのか、耳を抑えていた……

『レイヴン、こちらの用意は整いました……そちらは?』

「ACCS（アクチュエータ複雑系）、及びIRS（総合制御システム）に異常なし……こちらで見つかる異常は無い。」

本当に暇なのか、ウォルコットがインカムを使ってこちらに問いかける

普段の平淡な声は、こう言った場面……あからさまに危険な物を扱う際は緊張が張り詰める……本当に危ないんだなと、再認識させられる

「高機動ユニットに異常なし……FCS（火器官制システム）の同期も確認……いけるぞ。」

『承知しました。地球では、フィオナ様が現場でのオペレーションを担当しています……ご武運を。』

どこと無く、しょんぼりとした声色だが、俺がしょんぼりしたい白銀とは聞いていた事……沙霧氏が起こしたクーデターとは違ってみたいだし……

この化け物機体のデータも持って帰らなければいけないし……任務終了後は多分、BIGBOXに行く事になるだろうが、現状で問題になる事は……

ごめん、ありまくる……高機動ユニットと聞き、感の良い奴は気がつくだろうが……

「（しかし、まさか鳥みたいになるとは……アスピナだな、きつと）」

愛機はさながら、復讐の黒百合の様になっていた……黒くもないし、丸くて硬い訳ではないが

『それでは、発進シークエンスに入ります……第二ゲートオープン、リニアカタパルトの出力安定……タイミングは貴方に預けます。』

「I have Control……あ、台詞被った。」

至極、どうでいい事を気にしながら俺はある事を失念していた……

……この機体、単独での大気圏突入能力あるのか？

しかし、慣れとは恐いもので……まあ、良いかと思ってしまうた

……どの道逃げられない

し、もはや遅い

そして、始まった競馬は誰かがゴールするまで止まらないように、俺と愛機は……月面から打ち出された

ところ変わって、ここは国連軍極東支部……通称、横浜基地のP

エクステンジ

X……今は、食堂程度の認識で良いです

とにかく、総戦技評価演習を無事に終えた彼らを待っていたのは、戦術機適正検査と言う衛士への登竜門……という名の通過儀礼というか、結果を知る武としては生存と言う点では、正直どうでも良いに部類するイベントであった

夜鷹のリタイアは事前に聞かされていたが、こつも素っ気無いと気になるなと思いつながら、PXにあるテレビで流れているニュースに驚愕する

「これって……クーデター?! (嘘だろ…前はもつと後の事だったのに……)」

内容は日本帝国軍内にいる一部の過激派によるクーデターらしい

主犯格は『沙霧 尚哉』……彼は、昔からORCAの存在を危険視していた人物で、圧倒的武力と政治力を持つORCAの排除は国家……及び、国際的な急務であると言つ訴えて始まったのが今回のクーデター……ORCA側からのコメントはただ一言……

『低脳の諸君には、本当の敵が誰なのか理解できないと見える……非常に残念だ』、

これが、ORCA旅団長マクシミアン・テルミドールのコメントらしい

ちなみに、教えてくれたのは気の良い衛士の男性で、こういった問題に関心があるらしく、聞きたい事があつたら、PXにいる時にも聞いてくれとの事……

彼のような一般の視点と、夕呼先生のような裏の視点……今後は、二つの視点で物事を考えねばと、武は思った……が

「え……と、コレは……一体……」

「アンタ、男の子だしいつもお腹減ってるでしょう？今日は、サービスするわ。」

えっと、なぜそんなに黒いんですか？ 委員長？

「僕のハンバーグ、半分上げるね？」

美琴……それは、優しさじゃない……人を貶める策略だろうか？

「ヤキソバ……食べ。」

もう、何も言つまい……今回の犠牲者、戦術機適正検査での腹い

っばいに食べさせ、気持ち悪くさせ、その人の色々と危ない状況にさせると言う『洗礼』を受けるのは俺で決まりらしい……まあ、あれだ……

「あがあ~~~~~!!」

もう、叫ぶしかないと思うんだ、俺……アイツ、まさか逃げたんじゃないと思う頃には俺は検査を終えた後だった

第十八匹 【夜空に浮かぶ狂気の月】（後書き）

新型の戦闘は、次回……どう考えても黒百合です
フックサレナ
本当にアリガトウゴザイマシタな回……名前どうしよ……

第十七匹 【月夜を舞う鷹】（前書き）

新型ネクストの無双回……名前案を考えてくれた人はごめんね
代わりに最終的な機体に使っわ……ORCAのチートはまだ終わら
ない

第十七匹 【月夜を舞う鷹】

月のある、地球の衛星機動上を重力と大気の抵抗が無い為、時速3040kmで新型機……朦朧とする意識の中、彼はストレイドやフラクタルでは味気ないな、など考えながら……『すっ飛んで』いた

『レイヴン、そろそろ地球のフィオナ様に変わります。私の出来るサポートはここまでですが、ご武運を。』

「了解した……ウォルコットもゆっくり休めよ。」

高機動ユニット……背部スラスターの間に装備した大型の流線型ロケットから出るコジマ粒子特有の美しい緑の軌跡を光の尾の様に引く……肩部大型コジマタンクは、フライマル・アーマー大型PA整波装置を兼ねており、完全防御膜と化したそれはスペースデブリを跳ね飛ばす

『こちらBIGBOXのフィオナ・イエルネフェルトです。現場までこちらがナビゲーションします。』

「こちら、夜鷹……機体名ナイトホークだ。ナビゲーションを頼む。」

ナイトホーク……夜鷹は、夜行性の鳥類だ……夜空しか飛ばないシャイな鳥である

最初、自分を皮肉るのに売春夫としての意味で付けた名前だが、今はそれから決別する意味で付けてみた

『ナイトホーク……了解しました。ナイトホーク、デブリに隠れた

光線級に注意しつつ、日本の新潟エリアを目指して下さい……後ろから強襲する形で接敵、その後、殲滅という手筈をお願いします。』

「りよ、了解……新潟か……さて、久々の仕事だ。楽しくとは言わんが確実にこなすか。」

高機動ユニットに隠れる形で格納されているレイレナード製アサルトライフル『M A R V E』と同じ製造元のマシンガン『H I T M A N』の感触を確かめる……敵は戦術機だ

戦術機の持つ突撃砲は、ライフルと言うよりマシンガンのソレに近い……なら、弾幕の張れるか否かで使える戦術が大きく違う

生憎、背中のマイクロミサイルは緒事情（ポッドのハッチが開かない）で無理だった為、急遽マシンガンを載せ、格納にレーザーブレードを二本積んでいる

「しかし、相手は沙霧さんか……殺りたくはないな……降伏しなきゃ殺すけど。」

俺じゃ無い……面倒だな、便宜上、K（香月）俺は、前回彼に世話になつたらしい

K俺は、上手い事クーデターを抑えたらしい、代わりに彼らのラストレーションは全てハイヴ戦に行くように仕向けた所を考えるに、K俺は参謀タイプみたいだな……脳筋な俺には無理だ……手のひらに人間転がして遊ぶのは趣味じゃない

『間もなく、大気圏突入……高度2000mで高機動ユニットは分離し、そのまま強襲して下さい。』

「了解……うお、やっぱり振動凄いな……」

前回、宇宙港の様に存在した第五艦隊を破壊した際は、破片に隠れて落ちたから、今回が初めての単独大気圏突入だ

強固に張られたPAは、戦闘用の自弾を通す為の薄いものではなく、突入用に調整されたより強固な分厚いものだ

摩擦で真つ赤に輝くPAは減衰する様子は無く、ナイトホークは無事に地球にたどり着いた

「（少し、早まったかもしれない）」

沙霧 直哉は悩んでいた……愛機の『烈士』とマーキングされた不知火は、賛同者達と共に京都に居る殿下の元に急いでいた

ORCAは危険な存在……尊敬する人に聞いた最後の言葉の一部だ
彼らは、謎の行為が度々目立っているのだ……今も続いている欧州戦線での戦闘に協力したかと思えば、アメリカの持つ宇宙港を襲撃……

まるで、BETAと人

『助けてくれっ！てk……』

「おい、どうしたっ！応答しろっ！」

『大尉っ！現在、我々富士教導……』

立て続けに二つの中隊の反応が喪失……アメリカの最新の戦術機のラプターでも集団でも厳しいが、多分敵は……

『反応喪失…… および、大規模のECMが発生…… 気をつけてください。相手はネクストです。』

ORCAが独占している人型機動兵器…… 『アーマード・コア・ネクスト』は、稼動時に発生するコジマ粒子は致命的な電磁波障害を発生させる

普通の電子機器ならソレだけで危険だが、ネクストの投入を予測して調整された烈士仕様の不知火はECMを物ともしない……が

『第五、第七部隊の反応喪失…… 大尉、気をつけてください。』

本来からのスペックと技術の差により、クーデターに賛同してくれた同士達は瞬く間に消えていく…… 誰だ、相手は一体……

「っ?! 皆散開しろっ!」

火器の発する赤外線照準に反応し、クーデター部隊は散り散りになる、しかし、それこそ相手の思う壺なのだ

『た、助けてくれ…… 死にたく』

『い、い』

「糞っ! 何なんだ…… 敵の姿すら見えないなんて…… 敵は何をしているんだっ!」

分散したところを機関銃のような弾丸の雨で手足をもがれる戦術
機達

四肢は? がれ、大地に叩き付けれる

「は〜い、注目。帝国軍、第五計画の犬は君達で良いのかな？」

『まだ若いだと…ふざkがあああああ?!!』

口答えした敵機の関節にMARVEの弾丸をかます…いくら機動力が高かろうとも、人間から機械に動作する場合、ラグが発生する故に、こちらと相手の差はコンマ0.1秒ほど…だが、その差がこうして大きく出ている

人間と機械の融合…まるでSFだが、ソレはこうして地獄絵図のような光景を作り出している

「俺は、あくまでも『話し合い』に来たんだが…喧嘩なら買っぞ？」

今までのネクストとは違い、明らかに巨体に部類される13m級の機体…まだ、試作機と言うか、何となく作ってみた程度で、機体に塗装を施されておらず燻し銀の装甲を露出していた

『私は、今回の責任者の狭霧 直哉だ…出来れば、日本語を流暢に話す君を撃ちたくはない…見逃して欲しい。』

「ほう…勝てるってか？ この俺に？」

彼は…夜鷹には、プライドは基本的には『無い』…だが、『実力』を疑われるのはとことん嫌う主義だった

ソレが、リンクス戦争激化の原因となったのは当事者達しか知らない

「『アンタ』を撃ちたかないが…コレも仕事だ、精々足掻いき苦しめ。」

『まて……プッン』

相手との通信を遮断する……AMSの脳内使用領域を更に増やす……感情は灰燼に帰し、思いやりは深海に沈める
この時、彼が正しく『殺戮機械』と己をする……少し前とは違うのは、少しだけ理性的な面を残しているところだろう

戦い……否、断じて否……これは、戦いではなく虐殺であった
一個大隊はあったクーデター軍は、ものの20秒足らずで消えうせていた

その戦術機も四肢を失い、官制ユニットはへこんで開かなくなっている

変わった事言えば、ナイトホークの両手の武装が、格納されていたレーザーブレードである

オーメル・サイエンス製の『EB-0600』が変わっている事くらいだ

「（やっぱり、狭霧さんは強い……へんな意地張らないで、初弾で潰しとけば良かったか？）」

しかし、烈士仕様の不知火が一機残っていた……狭霧機だ

彼の類稀な戦闘経験と己に嘘がつけない真っ直ぐな精神が、戦場に彼を縛り付ける

「人間の執念……か。」

『……なに？』

「気にするな……すぐに楽にしてやる。」

規格外のQBで不知火に接近し、そのまま上半身と下半身を泣き別れにする……クーデターはこうして終わった……クーデター『は』

『レイヴンっ！ アンノウンがそちらに向かっていきますっ！』

「ああ……よくわかる』よ、』ヤツ』だ。」

赤銅の機体色に青い光が印象の機体……パルヴァライザー……縛られた粉碎者

破壊すればするほど進化する悪魔……俺に似ているとかそんな話ではなく、正しく『同一存在』な訳だが今はスルーしよう……敵さんが来た

『ミツケタ……』

見た目は中量二脚タイプのようだが、大きさが1.1m位……ネクストと同一規格……速力的にネクストのソレに近いところをみると、敵さんも馬鹿ではないみたいだ

てか、パルヴァライザー相手にブレオンとは悪魔じみたシチュだな……

「……っち、勝負だっ！」

『モクヒヨウ ヲ カクニン……サクセンコウドウ カイシ』

直射レーザーと湾曲レーザーで攻撃するパルヴァライザーをナイトホークが追隨してブレードで切り裂く

生体装甲なのか、肉が焼けるニオイが風に乗る……人が焼けるニオイが……

「糞が……ただでさえ固い癖に、何で速くなるんだよっ!!」

回避パターンを組み替えたのか、じよじよに回避率が上がるパルヴァライザー……が、もう遅い……ナイトホークを包む緑の幕が光り輝く

「コイツで、とどめだ……っ!!」

アサルト・アーマー

AA……相手のPAを剥ぐ為に自分のPAをぶつけるという発想で生まれたこの兵器が、周りの自然ごとパルヴァライザーを焼く……

……山はえぐれ、草木は一本も残さず消えている

ナイトホークに搭載されたPA整波装置が、そのままAA増幅機……

……アサルト・アンプリティファイヤーになったのだ

『アンノウン撃破……手痛い犠牲が出ましたが、帰還しましょう。』

「……了解、ナイトホーク……帰還……する。」

初めての機体で高機動戦闘だけではなく、AAまで使ったのだ……AMS負荷で頭がイカれそうだが、なんとか持ちこたえつつ帰還した

「一先ず、ご苦労様でした。」

「ありがとう。」

日本の領海まで来たBIGBOXに回収され、フィオナから今回のミッションレポートを受け取る

「やはり、BETAはじょじょですが対ネクスト戦闘を意識したようです。パルヴァライザーの出現がいい証拠です……レイヴン？ 大丈夫ですか？」

「……ああ、まさかアレサ並の負荷とはな……いや、あの性能でアレサ程度の負荷で抑えているのが凄いのか？」

「レイヴン……」

ナイトホークは、プロトタイプネクスト・アレサの正式な血脈である

違う点は、現在のネクストをベースに追加装甲と武装でその性能を引き出しているところか

「私は、ナイトホークに乗るのは推奨しかねます。」

「ジョシユアを殺した機体の子孫だからか？」

「……ええ、あれは危険過ぎます。」

プロトタイプネクスト・アレサは、乗る者全てを殺して来た山猫

殺しの機体だ……前に、衛星軌道掃射砲防衛で必要を迫られて乗ったが、代償として円形脱毛症になった

『修正』が施された俺でさえこのざまだ……ジョシユアはもつとやばかったらうな……

「フィオナがなんと言おうと、俺は必要なら乗る……パルヴァライザーを破壊しなければ、被害も著しいし何より……」

「…何より……？」

夜鷹は額をかきあげ、天を仰ぐ……彼はこの戦争の最終的な終着点を知っていた……コア（あ号）な破壊によるBETAの指揮系統破壊による攪乱作戦……成功すれば、人類の勝率は五分五分になるだろう

が、ORCAはその先を考えており、俺は賛同しかねているのが現状だ

「国家解体戦争に参加したく無いしな……悪い、少し寝る……次の標的は知っているけど、詳しくは後でね。」

「ちよ、レイヴン……ああ、もうっ!」

彼は、次の標的に向けて仮眠を取る為に退室する……次の標的は、欧州前線のハイヴ……『リヨンハイヴ』だ

次回までには、腕部複合兵装……『アグニ』と『ルドラ』以外の調整が済むらしい

フィオナは、不安が拭い切れなかった……彼の左手がびくりとも動いておらず、歩き方がぎこちなかったから

高いAMS負荷は、そのままリンクスにダメージとして後遺症として残る

幸い、手足が動かない程度なら数時間程度で完治するが、明らかにナイトホークは人間の許容量をオーバーした化け物である事をフィオナは確信した

月夜を飛ぶ夜鷹は、その日輪では決して照らされない雄々しい姿を嫉妬され、地に墜ちる

第十七匹 【月夜を舞う鷹】（後書き）

と言うわけで、リヨンハイヴ終了のお知らせ…触手が許されるのは二次元までだっ！ 観念しろ……BETA的な展開になります。

夜鷹……ナイトホークは空を飛ぶ……別にパクリでは無いが、完璧に人様の小説の機体名と被ってしまった……orz
でも、見た目は似ても似つかないずんぐりむっくりだからいいよね？

追伸：汚い挿絵（ロボット系）が欲しい人挙手

第十八匹 【夜鷹が舞う闇】（前書き）

今回、一部納得が行かない所があるだろうけど

『ごうしないと終わらないんだよ！！』

の一言で片付けて下さい。

最後のあとがきで、アンケートがあるから協力して下さい

第十八匹 【夜鷹が舞う闇】

正式に、背部のスラスターにミサイルポッドが追加された変更されたのは、スラスターが偏向ノズルになり微細な機動が可能になった点

そして、ミサイルが予定されていたマイクロミサイルから、ラインアークのホワイト・グリントが使用した分裂ミサイルに変わった点……が、それだけではなかった……

『しばらく振りだな……』

「やっぱり、ラナか。」

『やっぱりとは、失礼な奴め……お前が処理していた情報の七割を私が変わりに処理してやる……いや、今更だからいいか。』

コクピットの後部AMSユニットアレゴリー・マニピュレイター・システム関係に、更に『宝石』と呼ばれる高度演算ユニットが追加された

これに戦略演算AI『ラナ・ニールセン』をインストールし、俺にかかるAMS負荷を軽減するのが目的だ

ラナ……彼女は、ORCAのオペレーター『鑑 純夏』とORCAが独占しているネクストの间接部『ACS（アクチュエータ複雑系）』のデータと交換したらしい……思い切ったが、ACSは多分相手さんには、死に技術になるぞ

ACSの特徴は人間の间接の如く柔軟性だが、同時に人間のような繊細な制御が必要なのだ……戦術機には些かオーバースペックだろう

今頃、頭掻き筆って喚く連中の姿が目に見え……ドンマイ

「それにしても、貴方がこういった機体に乗る日が来るなんて……信じられない。」

「おゝい、素が出てますよ〜ファイオナさん。」

ファイオナ・イエルネフェルトは、対外的には清楚かつ知的な性格で通っているが、年頃らしい感情を剥き出しにする時がある……が、やはりそれも他所様の前でやらないというプライドを有しているが

「さてはて……リヨンハイヴって事はフェイズ5くらいが打倒だが、フェイズ6を相手にする気合いで行くか〜」

ファイオナの性格談議に危険性を感じ、丸投げして次行われる作戦について確認していた

始めに俺が高機動ユニット+テールミサイルポッドユニットを付けて強襲、人間の常識と正気をどぶに捨てた速度で接敵して爆撃……残念ながら腕部複合兵装のアグニとルドラは調整が間に合わないらしく、出番は年越し辺りを計画している『オリジナルハイヴ』の殲滅作戦での使用が初めてになるようだ……出し惜しみってレヴェルじゃないな……

「今回、二機のネクスト級……例の中量二脚と四脚の目撃情報だけではなく、プラズマ弾を連射する石兵級ゴレムと高い追尾能力を発揮する分裂ミサイルを発射する座天使級オラフニムの多数存在が確認されています……出来れば、そちらの廃除もお願いしたいとの欧州前線連合軍のリクエストです。」

「まあ……サーチアンドデストロイ、臨機応変に行くさ……問題は、今回の依頼は俺一人でなのか？」

BETAは、高い演算能力をもつ機械に引かれる習性があり、脳内で機械的演算をこなすリンクスも例外でないらしく、戦術機を無視してネクストを攻撃する姿がよく目撃されている

ナイトホークは、まがい物とは言え人間の脳と同等の演算が可能な『宝石』を積み、それに皆のトラウマであるナインボールの官制AIの片割れがインストールされているのだ……奴らが反応しないはずが無い

「今回の突入に参加するリンクスは五名……ウィン・D・ファンション、メイ・グリーンフィールド、霞 スミカとそして……」

「……そして？」

「……リリウム・ウォルコットです……レイヴン？ どちらに？」

なんだよ、そんなオチかよとつまならそんな表情で立ち去る夜鷹

……AMS負荷のダメージが余程堪えのか怠そつに歩き出す

「ウォルコットなら問題無い……エセ策謀家と女王（笑）の命日だな。」

夜鷹は、怠そつながらも、心は愉快なのか軽いあしどりでキャットウォークを歩いて愛機の調整を始めてしまう

その瞳は、珍しく哀れみに満ちていた……フィオナがその表情にキユンと来たのは本人にとっては内緒だ……その様子を見た整備班の連中は、コレはレースに大判狂いがなどばやきつつ作業を続けた

各火器換装作業と各種調整が最終段階になり、ハンガー内の緊張が高まる

汗が飛び、怒号が飛び、油が飛ぶ……ハンガー内はまさに戦場のようだ

夜鷹は、ナイトホーク内で待機していた……最終調整をする為だ

『坊主っ！ 後はお前さんの仕事だっ！』

「了解……AMS接続開始……各種兵装の確認……完了。問題無いよ、班長。」

各種不具合の修正と、自分好みに微調整する作業……一見地味だが、かなり重要な作業だ
これを怠ると、不要になった武器をパージしたりなど出来なくなるからだ

『後は、インド洋に着いたらBIGBOXのリニアカタパルトでズドン……だ、それまで英気を養つとけ。』

「あいよ……ふ、あぁ……ねみい。」

時間は深夜の二時、彼なら普段は寝ている時間だ

彼は、ネクストのコクピットシートに腰掛けたまま、寝てしまった

「レイヴン、インド洋に到着しました。まもなく、作戦予定時間になるので準備してください。」

「ん……ああ、了解した……」

機体の中で居眠りしていた夜鷹をフィオナが揺すって起こす……少し寝ぼけているのか、目を擦り辺りを見回す

「あちゃ〜……首いてえな、ほぐしてくる。」

狭い場所で寝ていた為、体が固まったようだ……手を上に伸ばしてのびをし、体をほぐそうとしている

「ふふ……」

「な、なんだよ……いきなり。」

その歳相応（夜鷹は一応18で、フィオナより歳へ検閲に削除されました）の様子に思わずおかしくなったのだ

フィオナは、彼の老いた姿……あの世界の最後の渡り鳥の姿を見ていたのもあり、ほほえましい気持ちなのだ……笑うことすら無かった彼が、こうして人間らしい表情をする事自体が凄い事だと彼女は思っているし

「ほら、出撃まであまり時間ありませんよ。顔を洗ってきたらどうですか？」

「そうするよ。ん、ふああ〜ねみ。」

夜鷹は、のそのそと歩き出すと歩き出す……とても出撃前のリン

クスとは思えないと整備班皆で大笑いしていた

しかし、仕事はちゃんとやるようでは換装作業は終わり後は、動力源の安定稼働を待っている状態だ……ナイトホークはあくまで試作機……意外とデリケートでやわらかなんです

意識をハッキリとさせ、準備万端とした様子で機体に入り込む夜鷹……服装は、普段着を兼ねている作業着から、パイロットスーツに変わり、脇に大きなヘルメットを抱えている

機体のコンディションは完璧、もはやネクストと言えない形状だが戦闘力は折り紙付き

反面、代償も大きいそれは些細な問題だ……元々、短命なリンクスが多少長生きしてもなら変わり無い……あるのは、代償で受ける脳髓の苦痛と心の痛みだけだ

「こちら、ナイトホーク。準備は整った、耐Gジェルの充填も確認、いつでもいけるぞ。」

『了解、ナイトホーク強襲特化兵装のスタンバイ確認……リニアカタパルトの充電も完了、いつでもどうぞ。』

BIGBOXに、三基ある内の一つのハッチが開き、外気がカタパルト内に流れ込む……頬に風を感じるイメージがAMSを介して頭に流れ込む……そういえば、いたな……ラナ

『……ほう、調子は良好のようだな。さて、仕事の時間だ……依頼

内容を再確認するぞ。』

少々、イラついた様子でコクピット後部のユニットにいるラナがAMSで直接頭に情報を叩きつける……虐めだ

〈依頼主〉

欧州前線連合軍

〈内容〉

現在、欧州で猛威を振るうBEATの根城を叩く協力をして欲しい。

相手は物量でこちらを叩こうとするだろう……いくらネクストの戦闘力があっても

10億を越すBEATの大群は骨が折れるだろう

だから、今回はこちらが連中を引き付ける……こちらの戦力はあまり残されていない

長い時間の陽動は期待できないから注意してくれ。

〈作戦目標〉

- ・ 光線級×???
- ・ 重光線級×???
- ・ 突撃級×???
- ・ 要塞級×???
- ・ 反応炉×1

〈成功条件〉

- ・ 反応炉の破壊

『以上だ、中々無茶を言ってくれ。』

「（俺としては、AMSで痛めつけてくるお前が怖い……）」

『なにか言ったか？ ええ？』

コイツ、ナイトホークの大半を乗っ取ってないか？ AMSを介しているとはいえ、人の思考を覗くともう、ただのAIの範疇に納まらぬか？

ナイトホークがいるカタパルトの電荷が臨界点を向かえ、火花が散る……

『さっさと行け！』

「な、ナイトホーク……発進する！」

リアカタパルトが唸りを上げ、機体を音速を超えた弾丸のように打ち出す……

100mあるカタパルトから打ち出されると同時に、大気の壁を強固なPAで対抗して

突破する……突破と同時に白い波紋が空に広がり、夕暮れ前の蒼穹に夜鷹が飛び立つ

欧州前線は混沌を極めていた……突撃級の死体が乱列し、重光線級が味方誤射を犯す……BEATにとって、ネクストは優先して打破

すべき災害……が、その災害がさらに悪化してやってきた

『ちわく三河屋でえくす。』

『真面目に……やっているな……っち』

ヴァンガード・オーバード・ブースト
V O Bユニットを兼ねているテールミサイルポッドユニットから、大量のミサイルが滝の様に降り注ぐ……ナイトホーク光線級類のB E A Tの猛攻をまるで地雷源でタップダンスを踊るように回避する

『地上のB E A Tの反応の四割が消失……O R C Aの増援だっ！』

『ここからが本番だぞ、お前らっ！』

狂気の沙汰の行為すら士気を上げる要因になる……欧州前線のしぶとさには感服しながら、空になったテールユニットを切り離し自爆させる

ナイトホークに攻撃しようとした光線級がレーザーで撃ち抜くが、破片が降り注ぐ損害が大きくなる

ナイトホークは、たやすくリヨンハイヴに突入した……テールユニットと一緒にパージする筈の高機動ユニットを装備したまま

『6時方向からレーザー……次は7時だ。』

「もはや、味方誤射はお構いなしかよっ?!」

中層までは、空気の壁で押し潰し、ひき逃げていたが、大きなホールに到達と同時に光線級類の熱烈な歓迎に会い減速を余儀なくされ、この様だ

「6……15……26っ?!」

もはや、撃てば当たるの状態で床にびっしりと光線級類が密集し撃ってくる……勘弁してくれ……じゃないと

「アサルト・アーマーしちまうだろ？」

緑の光がホール全体を吹き飛ばす……アレサのアサルト・アーマー機構から技術転用し、肩……もはや両サイドのどかいアーマーに仕込まれたアサルト・アンプリファイアで強化したという狂気の技術……ラナなしで使ったら、脳への強い負荷のせいで鼻血が出た

『残敵ゼロ……まで、ECMが展開されいるっ?!』

「BEATがECM……マジか。」

BEATがECMを使う……ということは、ネクスト級の敵の接近を意味している
両手の火器を確認し、身構える

『後方から急速接近する機体があり……これは、四脚のネクスト』
ストリクス・クアドロ』だ……お得意の後方支援で無いことは

……』

「はい、そこだよな。」

『うち……やっぱ、やな奴だよあんたは。』

わき道から来た突撃級と要塞級に乗っていたのか、よくわからんが紫の中量二脚級ネクスト……プロメシユースが居た

なるほど、王小龍があえて囿になり、プロメシユースの狙撃で決めるつもりだったみたいだが、先ほどのAAで全部ダメになったと見える……ホールの大半が吹き飛んだし

スナイパーで装甲を削りにくるが、さすがGA……なんとも無いぜ

「無駄だよ……なんなら、またグレネードで焼いてやろうか？ プロメシユース？」

『もう、あの時とは……て、アンタ質問したなら聞け！』

装備したアサルトライフル……MAREVで牽制と見せかけて撃ち抜き、出口にじりじりと移動する……二機の遠距離適応機体は本当にウザイが、あくまで反応炉の破壊が目的……一々相手にする必要が無い

『アンビエント、目標を確認しました……この糞共を排除します。先に行ってください。』

「了解した……片手間程度には削っておいた。後は頼む……後でなんか奢るよ。」

『期待させてもらいます……では。』

合流したアンビエントに後は任せる……こんなに早く見つけると

は、コイツらをずっと探してさ迷っていたな……アイツ折角なので、ミサイルに三発撒いて離脱した

ナイトホークが離脱した後のホール……ミサイルが巻き上げた土砂や死体が辺りに充満し、敵も手が出せない中、アンビエント……リリウム・ウォルコットは憤怒の炎を瞳に宿していた

「さて、ようやく見つけましたよ……ペテン師ジジイ……」

リリウム・ウォルコット……BFFの白い百合と今言われているORCAには少ないECMを装備したネクストで、高い実績に皆の信頼も厚いリンクスの一人だ

そして彼女は今、BFFの内部にも詳しい人物……セレン・ヘイズにある事を聞き、絶望と戦慄に叩き落された事を思い出していた

【王小龍は、ウォルコット家の復興する気など元から無かった……アイツを陥れる為に独立憲兵の連中が命掛けでもぎ取った情報の一つだ。信憑性は高い。】

初めから、彼を全面的に信用していた訳ではないが叔父と叔母の悲願であった家の復興の一番の近道だと思っていた

彼の後ろ盾を得れば、また名家ウォルコット家の復興は出来ると思っていた……しかし、セレンからあの事聞き、改めてBIGBOXに居るBFFの社員に話を聞いたら、確かに彼はリリウムを捨て駒にするつもりであった……それだけではなく、リリウムを使いBFF内での地位を確立し、私腹を肥やしていたらしい

「貴方方にはこの薄暗い穴蔵で果てて貰います……お前らのせいで死んだ両親の仇……とらせて貰う！」

そして、王小龍の権力争いが昔リリウムが住んでいたコロニーで行われ、家はその時に崩壊、両親はリリウムをコジマ汚染から守る為に対粒子シエルターに隠してそのすぐ外で粒子に犯され死んだらしい

『貴女……死ぬわよ？ 私と貴女は違うもの。』

「ほざけ、貴女より私が強いに決まっていますでしょう？ それに貴女達は先ほどの大規模なアサルト・アーマーに巻き込まれて致命傷を負っている……というか、既にストリクス・クアドロは大破していますね……きつたない中身晒して、汚らわしいですね。」

挑発するリリウムに、それに乗るメアリー……漁夫の利に乗る形だが、ここはハイヴであり、戦場ではない……損傷は無いに越した事は無いかと、手に持つアサルトライフルでプロメシューズを撃ちながら間合いを詰める

「貴女……良い的ね、そんなに無抵抗だと心が痛みます。」

『……くっ！』

流石のリリウムも、呆れずにはいられなかった……いくら、アレサ級のアサルト・アーマーを受けとはいえ、己の得物を取り落としとは正直、あきれ果てて物が言えない

「その感情を持って地獄に帰りなさい……下郎が。」

『そんな……いや、私が負けるなんて……いや……』

プロメシユースのコアをレーザーライフルで貫き、蹴り倒して死亡かどうかを確認する……同様に、アサルト・アーマーに巻き込まれたストリクス・クアドロにトドメをさして蹴って確認する

こうして、彼女の静かな復讐は終わりを告げた……その後、他の二人と合流して先行しているナイトホークを追った

第十八匹 【夜鷹が舞う闇】（後書き）

旧BFFの汚点をアサルト・アーマーで掃除したでござるの巻
…正直、4の頃にOGOTOで正面からメアリー焼いた俺は馬鹿？

そんな事よりアンケート…続編の簡単な舵取りです

A、ドタバタバイオレンスラブコメ希望（マヴラブAL行き）

B、AC以外に乗っているとこみたいな（ナデシコやら知っている
範囲でそこ行き）

C、いや、ACで行こう！（ACで他の作品行き）

D、もう…休ませてやれよ（なし）

Aを選んだ場合、主人公はオルタ後の世界……ファンディスクの
オルタード・フェイブルに行きますが、やったこと無いから重要そ
うな事件以外はオリジナル展開……これの後にBやCに派生可能

Bは、あえてACという恵まれた兵器を置き、別の奴を使ってみ
ようという試み……単にAC無双以外の事がやってみただが…ガン
ダム、てめえはダメだ。

Cは、Bの選択肢と基本は一緒だけど、大きな違いはACに乗っ
て戦うこと……それだけ

Dは、そのまま……他の作品更新してって人向け

第十九匹 【旧支配者の奴隷】（前書き）

タイトルで何事か察した人は、何も言わずにいてください……汚染されていない人達の為にも

それでは、十九匹…はじまるよ

第十九匹 【旧支配者の奴隷】

アンビエントに二機……いや、ストリクス・クアドロはトドメさしたから一機だな
それをまかせて数分……大きな隔壁のような場所に出る

「^{ゲート}門級を確認……グレネードを使う。」

『背部スラスターの一部の使用を中断……グレネードスタンバイ、いけるぞ。』

巨大化したスラスターにグレネードを仕込む案は、有澤重工の案で大火力の実弾兵器が一つくらいあってもいいだろうと仕込まれたのだ……名前はKUSATU……レンツ力を使い榴弾を音速並に加速してぶち当てる馬鹿兵器だ
あまりの早さに、爆風が弾丸が進む方向に集中する特性もあり、中々使いやすい

「さて……藪蛇みたいな感じだが、開いてくれよ……!!」

機体の制動をラナに任せ、グレネードを脇に抱えるように構える
KUSATUの砲身から静電気のような光が漏れ出し、帯電が臨界点である事を告げる

「出力安定……いけるか？」

『いつでも良いぞ……いいか？ 間違ってもハイヴは崩すなよ？』

「無理に決まってるだろ、たく……いけえ!!」

プラズマ化した榴弾が門級の頭脳ともいえる部分に当たり、着弾した瞬間……『爆ぜた』

跡形も無く消えたのだ……開いた口が塞がらなかった、爆風が門に当たり表面を焦がす

これ、下手に密室で撃ったら自爆しかねない威力だぞ？

「さて、後は門をぶち抜いて……？」

『扉の向こうに高エネルギー収縮を確認っ！ 離れろっ！』

ナイトホークが離脱したところに、極太レーザーがハイヴの壁や床を焼き払う……数体、プライマル・アーマーに阻まれて居たらしい小型種が焼かれた音が聞こえる……はい、これはヤバイっ？！

『遅かったじゃないか……』

『敵機確認……プロトタイプネクスト・アレサと断定……気をつけろ、さっきのマヌケな連中とは訳が違うぞ。』

スーツに包まれた体から、油汗が絶え間無く滲み出る……かつて、瀕死寸前のアナトリアを襲い壊滅させた悪魔……『プロトタイプネクスト・アレサ』

全てのネクストの母と呼ばれ、初めて乗った哀れなリンクスの名前からアレサと呼ばれているらしい

『言葉は不要か……行くぞっ！』

「ちいつ?!……ふざけんなっ！」

アレサの武装は、アサルト・アーマーに五連ガトリング砲、そしてコジマキャノンなのだが、コジマキャノンが門級の分厚い隔壁を内側からとはいえぶち抜いた出力のレーザー砲に変わっている……隙を作るだけの兵器から、最悪の面殲滅兵器に変わるとかやばいだろオイっ！

『ふ、あの時より腕を上げたなレイヴン……気配で貴様がわかるよ。』

「ざけんなよ、ジョシユア……」

しかし、そんな事より俺が虚しいのはソレじゃない……何が虚しいかと言つと……

「……お前、『旧支配者』共の力借りてでも俺と戦いたかったのか？ お前……だって……」

『腕を上げたが、温くもなかったか……言っただろう？言葉は不要……か。』

弱き魂を汚れさせ、弱き魂の狂気を引き出す悪魔共……いくら末端とは言え、オカルト相手に戦争とは笑えない

敵の本当の名前は、『シヨゴス』……旧き神に喧嘩売る骨太集団の奴隷種族の後に奴隷相手に人間は絶滅寸前になっていたのだ
縛られた者だった俺が解放された先に見たのは、自分のそっくりさんに天体規模の宗教戦争を任されたのだ……地球vs深きものと言つ最悪の戦争のだ

そもそも、情報と駒を揃えられるなら自分で行けと……だが、今は今だけは我慢なら無い

「黙れ……貴様は俺の戦友を墮しめた下郎だ。これ以上、てめえらをのさばらせておくかあつ！！」

『ぐつ?! ……そうくるか』

頭を完全に戦闘モードにして戦う……ラナが五月蠅いが知るものか
ナイトホークは、マシンガンで壁際に追い込み、アサルトライフルで間接付近に向かって撃つ……対してアレサはガトリング砲で牽制しつつレーザーをチャージするが、ナイトホークの猛攻に思うように行かない

しかし、年季が違った……大型兵器を扱うという点では、彼の方が一枚上手だったのだ

細かい機動、攻撃時の隙……機体スペックで押せているが、長期戦は危険すぎる

そもそも、アレサの戦闘力は頭二つ以上突き抜けているのだ
それにジョシユア・O・ブライアの持つ戦闘機動に対ネクスト戦闘用に最適化を連中から受けた可能性を考えると……やはり、こいつはここで倒すべきだ

「くす……もーらい」

『く……左を持っていくか、貴様は』

グレネードで左腕部に装備されたレーザーを腕ごと破壊する……
流石レールグレネード、装弾数3に目を瞑れば最強かもしれない
アレサとナイトホークは、お互いの間合いを離し、体制を立て直す

『踏み込みに躊躇が見られるが……成る程、お前が生きた戦場は決して温くわなかつた訳か……よかつた、後は……頼む……む。』

「おい、待てっ?! お前、おいつ!!」

突如、アレサは崩れ落ちて地面に倒れ込む……アレサの装甲や間接部の隙間から、赤黒い液体が漏れだしカメラアイの光が消える……まさか、また戦わされたのか……ジョシユアは？

『成る程、存外そんなもんか……』

「つち……増援か。」

軽量二脚のオームルのネクスト……かつて天才と呼ばれた存在、セロが居た

こちらとやる気がないのか、アレサの残骸を眺めていた

『いや、やる気はあるんだが……天才なんて言葉、どうでもいいがやられっぱなしも趣味じゃないんだ。』

「むごつたらしく殺してやるよ……セロの天才小僧。」

『おいおい……一応、お前俺より年下だろ今は？ まあ、いいがな。』

残弾を撃ち尽くしたライフルをパージし、ブレードに換装する
分裂ミサイルで牽制しつつ隙を伺う……戦い方が上手くはなったが、やっぱり粗いな

隙を突いてブレードで敵の腕部を斬り飛ばし、返り血を浴びる
レーザーブレードの為か、患部が焼けて余り出血は無い……敵も生物だっけ忘れてしまっていたな

『くくく……やっぱお前は別格だよ。クリティークやプリティブ
ライトとは大違いだ……戦い方に隙が無い。』

「……………??」

『俺は、あんな化け物共の言いなりなんかなりたくない……だから、
他の再現されたネクスト達を殺して、ここに逃亡して来た訳だ。』

ああ、中には居ない奴も居たが関係ないか……悪いな、介錯だっけ
？ 頼むわ……』

戦闘能力を示すためか、セロのネクスト、テストメントは頭を垂
れて膝を着く

テストメントには前進から血のようなナニカが垂れだし、時折痙攣
を侵したように機体が揺れる

「せめて、安らかに眠れ……もう、利用されんなよ？」

『すまない……な……』

テストメントのコアをレーザーブレードで貫き、テストメントの
カメラアイの光は静かに消える

ナイトホークは、スラスターをレールグレネードに変形させて限
界まで電圧を上げていく……目の前の反応炉を木っ端みじんに吹き
飛ばす為に

『まったく、無茶をする……レールグレネードの加電圧、尚も上昇中……帰りに響くから、これくらいが限界だ。』

「……つち、レールグレネードのモードを充電から発射に移行……塵も残さず消し飛ばしてやる。」

せめて、犠牲になった二人の戦士に捧げる鎮魂歌のように……ナイトホークから放たれた光は、反応炉に着弾し……反応炉がある部屋を光に包み込んだ

こうして、佐渡島ハイヴ攻略戦と平行して行われたリヨンハイヴ殲滅戦は幕を閉じた……総合的な犠牲者は12万名

ハイヴ攻略戦にしては少ない犠牲者であった……欧州前線連合は、ORCAの傘下に下り、ORCAはまた一つ世界を手にした
レールグレネードの反動で前面装甲がガタが来たナイトホークは、無事帰還したがオーバーホールをしなければいけなくなった

次の任務はいよいよオリジナルハイヴ制圧……ORCAにとって、世界にとって大規模な戦争になるだろう

↓以下、BIGBOXと月面基地の通信記録から一部抜粋↓

『メルツエル……地球の状況はどうなった？』

『悪くない状況だが……どうやら、敵はまがい物だがネクストを運用しだした……急がないと面倒だ。』

『ああ……こちらもアグニとルドラの開発も終わり、後は地球に下ろしてナイトホークに積むだけだ。それに、【保険】も仕込み終わったしな。』

『そうか……そちらは変わり無しか、こちらマズイ事なった。敵の正体がわかってしまったよ。』

『ああ、まあ……どうせ奴の事だ。全部教えなかつたらう？』

『ああ……ただ一言、【シヨゴス】と言っていた。どの文献にも載っておらず、奴に聞いたらオカルトの一種らしい。』

『……【シヨゴス】か、面倒だな。更に保険をかけておくか？』

『???……まあ、慎重にやり過ぎるなんて相手じゃないからな、一応いくつか策は練っておこう。』

『頼むぞ……人類に、黄金の時代をつ！』

『時代をつー！』

く以上で通信記録終了く

第十九匹 【旧支配者の奴隷】（後書き）

所事情で、ラスボスのネタバレを決行……ニコ厨で怖い物見たさ
で知的好奇心溢れる方は、何の事かよくわかると思いますが一応解説

・シヨゴス

クトウルフ神話で旧神（所謂、いい奴）に封印された旧支配者『

クトウル』のに仕える『奴隷種族』

見た目も立場も似まくっているから御登場願いました……触手ら
めえ……

これ以降は、作者の回復したSAN値が恐怖でマツハなのでググ
ツ下さい。

怖いのがメな人は、ふーん程度で次回を楽しみにしてください
……調べるなよっ！！

第二十四 【濁り水】（前書き）

本当は、この回で終わりたいかったけど広げた風呂敷を畳むための準備回に変更しました。

第二十四 【濁り水】

ナイトホークのオーバーホールは完了し、機体色は美しい山吹に塗装されている

両手には、かねてから開発されていた専用の兵装……『アグニ』と『ルドラ』があり、その有り余る威圧感をバリバリに放出している

「これが、ナイトホークの完成形……か。」

「そつだ……所詮、破壊の為の力だ。」

一人、キャットウォークで愛機を眺めているとチエックシートを乗せるようなボードを持ったメルツェルがやって来た……彼の表情は、何処か暗く疲れ果てていた

「いやに苛烈だな……何かあつたのか？」

「何、アメリカの非協力的姿勢にそろそろ頭来てね……『脅し』をして来た。」

成る程、アメリカが進めていたオルタネイティブ5を潰したのうちだもんね……まあ、これだけの兵力あるのに信用できないアメリカさんのチキンっぷりは良い道化だけどね

まあ、俺の見立てが正しければ国家解体戦争に参加出来ないのが非常に悔やまれる

「脅し??……ASミサイル降らせるとかか？」

「……ああ、悪いか？」

「え？ 凶星なの??」

最近、エイプールの姿を見ないと思っただらそういう事か……確かに、アメリカのラプターのステルス性能には、相手を自動追尾するASミサイルのが相性的には確かに良いが……

「なんか、扱い悪くないか？」

「BEATみたいな生物兵器にASミサイルは相性良くないんだ……」

生体センサーの付いたASミサイルはとても高価だそうで、エイプールの借金がなんとか返済し終わった今は使いたくないんだそうだ
メルツェル……最近、皆のおかん状態じゃないか？

「どの道、この程度の驚異に対抗できずに足を引っ張り合うだけの国家なぞ不要……というのが私やテルミドールの考えだ。」

「言ってるな、協調性ゼロと言うか……自殺願望持ちが多すぎだよな。」

国家解体戦争……元々の大義名分は、統率力を無くした国家に対し、企業が『お前達はいらぬ』と戦争を始めたのが始まりだった……後々、それはアサルトセルがばれないようにする為の工作活動の一環と聞いたときは笑ってしまったが

「オリジナルハイヴを制圧し、BEAT残党狩りに躍起になり、疲弊した世界を叩く……今回の作戦で死ななければ、その戦争に参戦

出来るかもな？」

「まあ、あまり興味は湧かないな……頭の隅には入れておくよ。」

ナイトホークがあるハンガーを出て、自分の部屋に戻っていく夜鷹……その姿を見送ったメルツエルは、ナイトホークを見上げる

「良くも悪くも、コイツは切り札だ……あまり切りたくはない、最悪の切り札だがな。」

メルツエルは、そう言い残すとキャットウォークを伝ってハンガーから出ていった……来るべき、決戦の為に

本来、ヴァンガード・オーバード・ブースト VOBとは、本来圧倒的物量を誇る超弩級大型機動兵器：アムス・フォート AFと戦闘を意識して作られたあくまでもネクストを『運ぶ』為の物だ……

断じて兵器を搭載し、更に推進力を強化して強襲性を向上しましたと言つて、単体で大量破壊するような代物じゃない

「なんなんだ……これは……」

夜鷹の目の前には、謎の物体が居た……角ばったフォルムに大量のコジマロケット、上部の装甲部にはミサイルポッドのような物が見受けられる

「ソイツは、ストライク・ヴァンガード・ユニット S・V・U……広域強襲を想定したユニットだが、やり過ぎて持て余していたんだ。」

「持て余すもん持つてくんなよっ?!」

気がついたら、隣にメルツエルが居た……相変わらず無表情だが、
疲れた内面が伺える

参謀は大変だな……テルミドールは子供っぽい感じがするから、必
然的に先見が得意な彼が苦勞するはめになるのだ

「お前なら問題ないと判断した……それに、前回の作戦から連中、
オリジナルハイヴの警備を強化しているようだ。」

「成る程、並の突破力では突入すら困難な訳か……面倒だな。」

メルツエルは、手持ちのボードから何かの地図を取り出し、壁に
マグネットで固定する

更にマジックペンでいくつか補足を書き足していく……

「座天使級が数体がモニュメント（ハイヴの地上建築物、何故ある
かは至って不明）周辺を哨戒しており、光線級類が多数徘徊してい
るようだ……普通なら近づく事すら出来ない。」

「ガチガチに固めてきたな……好都合だけだな。」

強固な守り程、崩れた後の無防備さは大きいものだ……おまけに、
ネクストの強襲が怖いのか、光線級類を外に徘徊させる始末……光
線級類は、燃費が良くないから普段は中にいた方が良いものを……
愚策だな

「まあ、策としてはお前が強襲し穴を開け、そこから雪崩込むよう
に防衛網に穴を開ければ問題ないだろう。」

「さらっと言っけど、一番苦勞するの俺だよねそれ？」

「気にするな……私は気にしない。」

上司に恵まれない（ラナしかり、メルツエルしかり）な自分、O
RCAに労働組合はないかな……なんて考えていたら、すっきりし
た表情のリリウムがやってきた

「お疲れ様です、メルツエル様、疾風様。」

「ああそうだ、ウォルコットに聞きたい事があつたんだ。」

夜鷹はリリウム・ウォルコットに向き直り、彼女の身長に合わせ
るように屈む……そして、ウォルコットの両肩を掴み逃がさないと
言わんばかりの態度をとる

ウォルコットは、顔を引きつらせてメルツエルを見るが既に居な
かった

「なぜ、お前が俺の本名を知っている？ 正直に答える……偽ると
為にならないぞ？」

「は、はい……」

ウォルコットに夜鷹は、普段見せないような綺麗だが寒気がする
笑みで掴んで拉致する……カレードにも、アスピナ機関にも登録し
ていない本名を知っているなんておかしい

俺は、この疑問は解決しなければいけないと思った……断じて、ウ
オルコットの怯えた顔が可愛かったか思っただけ……

BIGBOX内のとある一角……自販機が並ぶサロンのようなスペースに夜鷹とウォルコットは居た
夜鷹はカフェオレ、ウォルコットはホットミルクを飲んでいる

「なるほど……今のリンクスは大概、この世界で大きな支持を得た所謂『英雄』と呼ばれた者達と？」

「ええ、テルミドール様は一人でBEATの大群を引き付け、軍の存続を左右した存在……メルツエル様は、その先見で現在の対BEAT戦闘の先駆けになった戦術を考えた存在だそうです。」

「ふ〜ん……まあ、要するに俺の……この世界での俺の記録を元に判断したわけか？」

ウォルコットは、ポケットを探り携帯のような端末を出し、目的の情報を画面に出してから夜鷹に渡す

「貴方のご両親……『弧島 雄介』様とその妻である『弧島 静香』様は、現在の戦術機オリジナル……アメリカのファントムの原型になった宇宙開発用の大型MMU（Manned Maneuvering Unit「船外活動ユニット」）を開発した功労者だそうです。」

「俺は関係ないんぞ」まだ、続きがあります。「……頼む。」

いつに無く強気な彼女におされ気味な俺……おのれ、キング・オブ・ヘタレの先輩を助けた報いがここに来て……！！（逆恨み）
ウォルコットは、一度俺から端末を受け取りいくらか弄くり、俺の再び渡す

「貴方は、日本帝国軍の戦術機……『不知火』の基本構想を僅か15歳の頃に完成させ、17歳の時に持病の心臓病で亡くなったそうです。」

「ほう……そういう事か。ありがとう、大体理解した。」

俺は、端末をウォルコットに返し一言礼を述べてその場を去った……英雄か、丸で向こうからしたら亡霊を見ている気分なんだろうな
だが、関係ない……明日、『全て』の因縁に決着を付ける
たとえ死んだとしても、それは賭けに俺が負けたか相打ちになったからだ

連合軍極東支部横浜基地の地下ハンガー……ここには、特殊な機体や副指令の特命で引き入れた機体が居た……XG-70d 凄乃皇・四型否、XG-70c 凄乃皇・伍型は、ここに居た

「なんか、凄乃皇・四型とえらい違いますね？」

「当たり前でしょう？ これは、ムアコック・レヒテML型抗重力機関からアンチプロトリアクターに変更しただけで悪魔みたいに激変した機動要塞なのよね。」

「へえ……まあ、俺には意味さっぱりなんですけどね。」

あほ面を晒している青年……白銀と、やや疲れ気味の女性……香月は、ハンガーに掲げられた兵器を見上げていた

ORCAが保険として、横浜基地に託した物がこれなのだ……オルタネイティブ5関連施設を強襲中に接収した物に、武装を殆ど変更せずに新開発の『アンチプロトリアクター』の実験機として改良したのがこの機体だ

既存のコジマ式常温核反応炉の技術に、『G元素』という今まで見なかった物質の本質の解析、理解し、二つを融合したのがこのアンチプロトリアクターなのだ

「人間並みとは言え、たかがAIの為にこれほどの物をポンと出しちゃうORCAは凄いわ……良い意味でも、悪い意味でも。」

「……そうすか、アイツ大丈夫かな？」

「疾風なら問題ないわ……欧州のリヨンハイヴで、ネクスト二機を倒した後に反応炉を破壊したそうよ。」

「……マジで？」

「地上最強は伊達じゃない……って事でしょ？ アンタも、悔しかったら精進なさい。」

「はい！」

彼らはまだ知らない……こうしている最中も、濁り水はゆっくりと世界を侵している事に……そして、史上類を見ない武装集団に利用されている事に……元旦、世界は一新する……ORCAによって

第二十四 【濁り水】（後書き）

本当の気持ち、本当の自分、本当の事……そして、この世界の真実が今、明らかになる次回……【マヴラブ】

遙かなる思いを胸に抱き、青年は渡り鳥になった……そして、彼が止まれる止まり木は、きっとまだ見つからないだろう

ちょっと趣向を変えてみました……次回、本当の最終回です。
エイプリル・フールとか関係なくマジで。

最終匹 【答えの先に待つもの】（前書き）

明日、大学の入学式です……言い訳終了

最終匹 【答えの先に待つもの】

晴れ渡る青空…… 人類の決死の覚悟で望む作戦が始まった
作戦名は【桜花作戦】…… 様々な皮肉と決意を込めて付けられたそ
うな

しかし、ORCAでの呼称は【Start And End】……
… 終焉為の再生という、なんともテルミドルらしい皮肉の塊だった
彼にとって、これはあくまでも通過点…… いや、クローズ・プラン
の通過点にもならないような些細な事なのだろう

第二十一匹 【マヴラブ〜答えの先に〜】

『作戦の説明は以上、要は夜鷹…… お前だ。』

B I G B O X内のホールで行われた、大規模の作戦説明…… ナイ
トホークで先行し敵を攪乱ないし殲滅、その後後ろから内部突入組
と地上制圧組がV O Bで接近するらしい
ヴァンガード・オーバード・ブースト
良くも悪くも、過労死するのは俺の運命さだめなのだろうか？

『いいか…… 我々にとって、この作戦は試金石だ。あの地球の寄生
虫共を掃除し、世界に我らの力を示さなくてはいけないっ！！』

沸き上がるホール内…… 元々は、企業に切り落とされた連中の集

まりだったラインアークと変わり無いような存在だったORCAも、彼のカリスマでまとまり、まるで一つの固体のように活動したもはや、新仰宗教の一種だがテロ組織なんてそんなもんだラインアーク過激派のリリアナだっ

「久しぶりだなあ……疾風？」

「せ、セレン……さんっ?!」

ORCAについて、再考察していると後ろからセレン・ヘイズ……現在、リンクスとして活動を再開せざるえないほど人手不足のORCAだが、たまにこうして会うことになる

「お前、最近色々大変らしいな……ええ？」

「ああ、新型にAMS特性が合ったから色々やっているよ。」

前回の作戦内容を踏まえ、色々吐かされた……国家解体戦争を再び起こそうという意見にはセレンさんも概ね賛成らしい
疲弊しきった国家から再生の早い企業経済の方が良い場合がある
だろう……だが

「なあ、セレン……いきなり、『故郷を捨てる』なんて言われて普通納得できるかな？」

「ほう、お前にしては詩的な言い回しだな？」

「茶化さないでくれ……人して意見が聞きたいんだ。」

セレンは、顎に手を添えて考え出す……しばらく考えた後、何か

思いついたのか

夜鷹に向き直り、柔らかい笑みを浮かべて話す

「お前もつ、答えを出したのだろうか？ 何を今更躊躇う必要がある？」

「う……まあ、そうだけさ。」

「お前が見つけた道だ、誰も責めはしないさ……」

そういつて、夜鷹の肩にポンと手を置き、セレンは歩き去る……しかし、その方向は

「あれ？ あつちつて俺の部屋がある区画じゃ……インテリアは逆方向だし……はあ」

今夜は、まともに眠れないだろう……そう覚悟し、自分の部屋に向かつて歩き出す

その夜、彼はモンモンとした夜を過ごす羽目になった

作戦日は2002年 1月1日（火）……元旦で正月の日、なんでこんなめでたい日に気持ち悪い生物兵器をたたかわにやならんだ、どうせなら爆熱 愛玩生物AMIDAをださんかいとかどうでも良い事を考えていると、リニアカタパルトに見慣れない機体……いや、正確には何度も見たが、ORCA的にあつては不味いものがある

『こちらステイシス、オツツダルヴァだ。 リンクス、見当を祈る……』

「任せてくれ、アンタが水没する前には全て終わっているさ。」

ステイシス……軽量二脚級ネクスト『ライール』は、オーメル・サイエンティック当時最先端のネクストで、高機動近接戦闘を意識して設計された機体である

ステイシスは典型的な中距離戦闘を意識したアセンブルだが、今は近距離戦闘を意識したアセンブルに変わっており、右手にレイレナード製アサルトライフル、左手に同社のマシンガン、右背にはプラズマキャノンを装備していた

『私が先行して無駄撃ちさせてやろう……いいな？ 確実にハイヴ内部に潜入しろ。』

「あんたもな、軽量機体だから一瞬の気の緩みが死につながるぞ。」

『ふん、言っている。 ステイシス、オツツダルヴァ……参戦する……』

ステイシスはVOBで先行して出て行った……リニアカタパルトで瞬時に音速まで達した機体は、白い雲を引いて戦場に飛翔した

「こちらナイトホーク、疾風だ。 これよりハイヴ攻略戦に参戦する……」

『了解、ご武運を……』

「任せとけ。」

多分、オペレータールームに居るだろうフィオナにサムズアップして答える……ナイトホークは、電圧の臨界点まで達したカタパルトから撃ち出される

高機動ユニットにさらにSOBユニットを装備したナイトホークは、人類が未知の領域を飛んでいた

地上スレスレを飛行している為、大地はえぐれ、BEATは吹き飛ばす……BEATの血飛沫のせいでナイトホークが飛んだ道はまるで赤い絨毯のようになっていた

「エンゲージ……SOB開放、もう好きにしてくれ。」

パージしたSOBユニットから、大量の分裂ミサイルや大型ミサイルが飛び出し、座天使級や光線級類を殲滅する……音速で接近され、BEATは反応出来ずに蹂躪される
こうして、ナイトホークはオリジナルハイヴ内に突入した

『蹂躪』……一方な展開や暴力、虐殺によく用いられる比喻表現だが……今使わずにいつ使うのかわからないくらい自体は酷かった
思考ルーチンを組み替えたのか、BEAT達が味方ごと攻撃して来るがそれすら振り切り、ナイトホークは『飛翔』していた

疾風という少年が追い求め続けた『自由の象徴たる翼』を皮肉にも彼は戦場で得たのだ……もし、神なんて存在がいたらかなりのサディストだろう

戦場は彼を大人になる前に『兵器』にしてしまったのだから

「山無し谷無しの攻略戦だな……いや、レイヴンズ・ネスト襲撃よりマシだけどな。」

あれは山あり谷底の戦いだった……泥沼化なんてレベルじゃない……上からしたに上がる時に、上に上がって達成感に浸っているとMTに打ち落とされるなんてしばしば、竪穴式通路にいるニンボル二機とか泣いた

『その話を私の前でするか、普通……^{ゲート}門級を確認、反応炉か。』

「高機動ユニットをぶつける……パージしてくれ。」

『まあ、ひびくくらいは入るだろう。パージしたぞ……着弾を確認。』

高機動ユニットは、コジマタンクを内蔵した所謂、バッテリーのようなものだ

しかし、コジマ粒子がいけなかった……オリジナルの方の粒子を詰め込まれている為、現在ナイトホークが通ったシャフトは深刻なコジマ汚染が期待される

いずれ、コジマ粒子は、毒がじわじわと染み入るようにハイヴを浸蝕し、内部の敵味方を問わずに死滅させるだろう

「しかしまあ、本当にひびしか入らないたあ……何で出来てんだよ、これ。」

『さあな……まずはこじ開けるのが先決だ、アグニとルドラのコジマライフルの使用を推奨する。』

「切り替えは任せる……さて、本番だな。」

今頃、他のリンクス達がハイヴの中や外で攪乱し、陽動していてくれている……急がねば

ナイトホークは、手に持つアグニとルドラに搭載されている一番大きい砲身が緑の光を点す……後は引き金を引くだけでコジマ粒子が隔壁を破壊する為に射出される

『チャージ完了……各種姿勢制御系やスラスタに異常なし、派手に暴れる……疾風っ!!』

「了解っ!! つけえっ!」

片方の砲身から放たれた緑の光が門級の隔壁に入ったひびに染み入り、内部から構造を破壊する……

ナイトホークは、内部に入り込み、放たれていない方を構える

『……超弩級災害と接触、上位存在の攻撃が必要とハ「こんにちは、死ねっ!!」……』

原作ラスボス、接触五秒で蒸発……コジマライフルから放たれた

緑の光が、上位存在を消滅させ、辺りにうごめく触手の動きが止まる……哀れなり、上位存在

『作戦目標の破壊を確認、作戦の第二段階終了を確認……後は、反応炉を破壊するだけだ。』

「わかった、さっさと」全く、風情がない奴だ……」誰だっ!!」

目の前の反応炉を兼ねたBEAT……ブレイン級に突如突き破り、何かが現れる……蒼い装甲に特徴的なフォルム、パルヴァライザー最終生産仕様であった

ミサイル迎撃性能の向上に加え、レーザー系攻撃の向上や耐久性の向上など、前生産機のパルヴァライザーより幾分改良が施されている

『待ちくたびれぞ……俺、このほの暗い場所ですつと居たからなあ。』

「……俺は誰だつて聞いてんだよ、何もんだ？」

ナイトホーク内の計器がいくつか揺れ、何かの計算している事を示す……結果が出たのか、計器が静まる

『声紋による簡単な推測だが……奴は、お前だ。』

『AIは優秀みたいだな……まあ、俺が本当のラスボスみたいなものさ。派手にやろうぜっ!!』

「っち、迎撃するっ!!」

月夜を飛ぶ鷹と粉碎者は激突したっ!!

同時刻、A 04こと凄乃皇は同じく反応炉入口まで到達していた……道中の敵はその殆どが轢き殺され、生き残ってもコジマ汚染で内側から破裂して死んでいた

凄乃皇が無事なのは、二基のアンチプロトンリアクター由来の高出力のラザフォード力場によるでコジマ汚染を機体に届かないようにしているからだ

しかし、変わりに代償して00ユニット並の高度なAIを搭載しても、機体制御に全て持って行かれる為、人員が沢山必要なのがネックなのだが

「（道中にBEATおらず、変わりに血のまみれのシャフトだけ……気をつけないと。」

「間もなく、反応炉に到達します……みなさん、警戒して下さい。」

白髪の少女……社の一言で、皆警戒に移る

道中のグロイ光景以外は、本当に暇だったから多少緩んでいたのだ

「まるで、誘っているみたいにも居なかったね。」

「外気に未知の環境汚染を感知……どうやら、先行したORCAの機体『ナイトホーク』が行ったものと推測されます。幸い、凄乃皇のラザフォード力場には干渉しないようですが……」

計器を弄っている社が皆に解説する……ナイトホークは強襲殲滅を前提に開発、設計されたネクストだ

今までが手を抜いていたようなもので、ネクストの本分はあくまでも強襲の為、ハイヴ攻略……いや殲滅戦には向いている機動兵器なのだが

突然、凄乃皇内部がアラートが響き渡る

「前方に二つの高エネルギー反応、片方は友軍信号からナイトホークと断定……もう片方は敵と思われます。」

「正念場だな……ゆこうぞっ!!」

反応炉がある部屋に入った途端、凄乃皇の機体が大きく揺れる……ラザフォード力場に何かが激突したのだ
傷だらけの山吹の機体、ナイトホークだ

「うち、重役出勤かよ……足手まといだから失せる。」

そういうと爆音と共に青い機体とぶつかり合う、多分青いのが敵なのだろうが、あ号標的のような残骸がブレイン級を残して消し炭になっているところを見ると目標は反応炉だけだろう

「少し、耐え凌いでくれっ！ 反応炉を凄乃皇の苛電粒子砲で焼くっ……!」

『そうかい、勝手にしろ。』

通信を切った後の戦いは、熾烈を極めて理解が出来なかった……残像しか見えないのだ

山吹の風と青い風が切り結び、戦っていた……援護しようにもFCSを振り切つてしまい撃つに撃てない

「武さん……苛電粒子砲のチャージがすみましたが、いつでも撃てます。」

「わかった……目標の補足確認、コンデンサの蓄電、チャンバー内の加圧正常を確認……カウントを。」

「……3、2……1……いけます!!」

「いけえええええええ!!」

凄乃皇から放たれた破滅の閃光は確かに反応炉を捉え、破壊した筈だった

舞い上がった土砂が晴れると、赤みがかった光の壁が存在した

『ああ、言い忘れていた……俺が居る限り、その壁は消えない。まあ、ゆっくりしてけよ……』『親友』。』

「……まさか、その声……嘘だろ……」

『嬉しいようであまり嬉しくないな……まあ、察しの通り俺は疾風さ……そこ無残に這い蹲っている』弧島 疾風』とは違う、『香月疾風』とは俺の事さっ!』

青いパルヴァライザーはまるで手を広げるように動き、アピールする

香月 疾風……夜鷹こと弧島 疾風の平行存在であり、因果の奴隷因果を少し操作し、リンクス達をこの世界に導き、夜鷹を導いた男

「なんで……なんでお前がBEATと居る! 答えると疾風!!」

『その馬鹿は都合良く寝てるみたいだし……まあいいか、早い話がお前と純夏……お前達のせいだ。お前が最初にこの世界に流れ着いたとき、因果的に軽い存在である俺は、お前と一緒に流された……しかし、世界って皮肉屋でな……バランスを取る為に俺はBEAT寄り流されたよ。まったく、それからは最悪だったね……だからコレは復讐なんだよタケル……』

要約すると彼もまた、因果の悪戯の被害者なのだ

だが、その感情を、その因果を利用して彼はこうして居るのだ……自立殺戮防衛兵器『パルヴァライザー』……彼はこれの頭脳として埋め込まれているのだ

『いい加減良いかな？ もう、自分が抑えられねえんだよっ!!』

青いブレードをナイトホークの右肩に突き刺すが、右肩付近の装甲の周りが火花は飛び立ち、カメラアイが光り動き出す

「いい加減にしるよ、この……雑魚がつ!!」

『パージしただと?! な、抜けないっ?!』

装甲をパージしたナイトホークは飛び出し、左肩の装甲もパージしてぶつける……その後、胸部装甲、脚部装甲を強引に当てていく
ナイトホークの中身……夜鷹の考える一番扱い易いアセンブル……頭部のHD-HOGIUREに腕部が063AN03、コアにSOLUH-CORE、脚部が03-AALIYAH/L
HD-HOGIUREの寝ているアンテナが起き、カメラアイが再び発光する……背中・腕部武装はそのままだが、先ほどとは圧倒的な『ナニカ』が違った

「……爆ぜる。」

『な、があ?!』

青パルヴァライザーに積み重なるパージした装甲を撃ち、肩装甲内のコジマタンクを爆破し、吹き飛ばす……が、パルヴァライザーは赤い障壁で防ぐがかなりダメージを食らったようだ……とところどころから火花が散っている

「お前が誰とかどうでも良いが、俺の名を語るんなら相応の覚悟は見せてもらおうか、ええ？」

『そう言われてもなあ……来いよ、この瞬間だけは……』

「カこそ全てだつ!』」

二機は、お互いボロボロの体をおして戦う……ここまで来て手が出せない状況に、歯噛みする白銀達だが、チャンスは意外とすぐに来た

ナイトホークの投げた銃が青パルヴァライザーに直撃した時に、背中のグレネードを接射してトドメを刺したのだ

爆炎を上げながら落ちていく青き粉碎者……その様子を見ている山吹の自由の鷹は、武装をパージし、格納してあったレーザーブレード、EB-O700に換装して近づく

『ほんと、容赦ないな……が、これで俺は……解放される。』

「そうかい、とつと死ね。」

コアにブレードを突き刺し、トドメをさす……誰もが安堵する中、

突如ナイトホークが複数の触手に貫かれる

無残に碎け散る機体……白銀達は思考停止に陥るが、白銀だけはある事を思い浮かべる

【あ号標的の再起動ないし再生】

コジマライフルの直撃を受けてなお、上位存在は生きていたのだ
虎視眈々と反応炉の中で反撃のチャンスを狙っていたのだ

「くそ……アイツ生きてやがったのか?!」

「機体制御が利きません……ラザフォード力場消失……機体中央の緊急用ハッチがオープン……」

「なんだって?!」

絶望的状况に更に追い討ちをかける様に、凄乃皇の制御が出来なくなる……守りの要たるラザフォード力場が消失し、無防備の機体を晒してしまっていた

即座に弾幕を張り、触手を撃ち落していくがいつまで持つかかわらない

しかし、凄乃皇の開いた謎のハッチから8m大の四角いコンテナが飛び出る

「凄乃皇の二つある内、一つのアンチプロトンリアクターの反応が消失……射出されたコンテナがリアクターだと思われませぬ。」

「何がなんだかさっぱりだぞ……畜生!!こんな目の前に居るのに……!!」

状況は、彼らの味方はしなかった……『彼ら』ではあるが

「あぶねえ、オツツダルヴァ式緊急脱出が出来なければ危なかった……」

『単に、緊急脱出用のレバーを誤作動させて機体から強制排除されただけだろう……』

紙一重の勢いで彼は機体から脱出していた……愛機を捨てるような真似は断腸の思いであったが、触手の侵蝕とどちらが良いかと聞かれたらコツチだと速攻で脱出したのだ

ラナが居るユニットは独立しても使用できるため、ちよつと強引に引き抜いたので、ちよつと不機嫌

「どつすつかな……気づかれるのも時間の問題だろうし……せめて、ACでもあればな……」

『問題ないようだ……一時方向からコンテナ接近!!』

「うそお?!」

どこからとも無く……かと思っただが、淒乃皇の腰中心のブロックが丸ごと消えている……まさか、これ運ぶ為に利用されたのか……まあ、ありがたく利用しますが

コンテナ側面のタッチパネルを弄り、ハッチを開ける……中には、見たことの無いACが居た

「これは……メルツェルの言っていた保険？」

『急げ、時間はないぞっ！！』

「……わかった。」

コクピットハッチを開き、ラナのユニットを刺しこむと起動が始まる……リアクターの出力が高まり、戦闘出力に達するとコンテナを破壊して飛び出す

たった今この瞬間、暴力的なまでの力が解放されたのだ……大きさは6m前後、背中の5連チェンソーが特徴的な機体だった

「機体名リベリオンだ……これより、災厄を破壊する！！」

『機体名登録完了……オーバード・ウエポン、レディ……ゴー！！』

左背のロックが外れ、大きなチェンソーは右肩のアームに支えられる形で現れる……膨大な熱が生まれ、チェンソーが生きた炎のように稼動する

爆音が轟く中、チェンソーはまるで人の手のように変形し、頭部の装甲がオープン、悪魔のような顔になる

「おい、あとは……頼んだぞ……『親友』……！！」

『…え？』

通信越しにただ一言頼りない友人に別れを言う、上位存在の触手を触れる事無く焼き斬るリベリオン……その姿は炎の悪魔であり、反応炉の頂上……上位存在を再び粉々に焼き斬る

そのまま、反応炉に突貫し……反応炉は大きく膨張する

「武さん、脱出します。」

「そ、ちよつとまっ?!」

　凄乃皇は頭部を分離し、あらかじめ決められた方向に荷電粒子砲を撃ち穴を開け、脱出した……彼らは、最後の傭兵『レイヴン』の生き様に立ち会ったとして、後世に称えられた……桜花作戦は、こうして幕を閉じた……最強と謡われた男『レイヴン』の死を持って

　桜花作戦が終わり、宴やら何やらを終え……白銀と社、香月は横浜基地の近くに自生している桜の木の下に来ていた

「先生、俺……」

「なんも出来なかった……でしょう？　いいのよ、それがアイツの意思だから。」

「え？」

　横浜基地の桜の木……この慰霊碑に新たに『弧島　疾風』の名が刻まれていた

　多くのリンクスも手を合わせに来たり、酒をかけに来たりした

「アンタをこの世界に縛るモノ……それは、アイツの意思だったのよ。」

「それって、まるで俺が加害者みて「事実よ……静かに聞きなさい。」……はい。」

香月が冷たく言い放つ、間違えた生徒を怒るように

「あくまで私の仮説なんだけどね、アンタを『ループしてる』と知覚させ、その経験を引き継がせたのは疾風Aと呼称するけど、彼ね……多分、アンタの話と照らし合わせるとアイツはアンタが鑑がアンタをG弾の爆発を利用して引き込んだ際、その流れに巻き込まれたんでしょね。」

「そして、彼は武さんも知らない地獄を見たそうです。」

香月が言い切れない部分を社が補足していく……まるで、時間が無いといわんばかりに

「アンタがループの知覚が出来ていない頃……多分、最初からね。」

「そしてある日、彼は自分がBEAT側に繋がっていて、武さんがループの知覚を阻害している事に行き着いたそうです。そして彼は、G弾で開いた穴を利用して世界に接触したみたいです。自分のその後を対価に、沢山のループ体験を継承出来る様に。」

「でも、やり方が不味かったみたいだね……疾風の因果を中心にアンタを再構築したせいで、今度はこの世界から出られなくなったみたなのよ。」

「だから、疾風さんは『平行存在』の自分に疾風さんの因果を回収させる為にこのような世界を構築し、自分に自分を倒させる矛盾を利用する事で対消滅、今頃どこか私達が知覚出来ないような場所

再構築しているでしょう……対価を支払う為に。」

二人共疲れたのか、肩で息をしている……白銀は、疾風が生きている事に安堵しつつ、最後の質問をする

「アイツが曲りなりに生きている事はわかりました……あの最後の質問なんですけど、アイツと俺……また会えますか？」

「さあね、それは世界様次第でしょう……」

「でも、強く思っていればまた会えます……」

太陽が昇る中、白銀の体は静かに光に包まれ消えていく……まるで全て終えた戦士を送るように

「もしかしたら、帰りの虚数空間内でアイツとすれ違つかもね……ああ、鑑ならもう帰ったわよ。アイツ、どうやら疾風とグルだったみたいね。」

そして、白銀 武という存在はこの残酷な世界から静かに退場した……この世界の行方は、神のみぞ知る

朝日がカーテンから漏れ、差し込む室内……俺は違和感に目が覚めた

見知らぬ女性は俺を挟み込むように寝転んでいた

「ああ、嫌な予感が……」

「武様、いきなりそのような台詞はあんまりかと？」

「そうだぞ？ こう見えても、傷つき易い乙女なのだぞ？」

御剣姉妹が あらわれた …… 玄関から、ドワをぶち破らんばかりのノック音が聞こえる…… 多分、幼馴染の純夏だろう

普段なら、反対側のお隣さん…… あれ？ 誰だ？ なんか、忘れちゃいけない事を忘れていているような……

「はああああアあああああああああああああ？?! た、タケルちゃんが女の子を…… ふ、二人も連れ込んで…… どりる…… みるきい……」

「さて、これは俺にも訳わからないんだっ！ だから、左h「ふぁんとー！ーむ！」ががー！ーりー！ーん……」

白銀は、星になった……彼のいる平和な世界は、たった一人の欠員がいるが平和に廻っている……その欠員を思い出す者は、もういないが……

最終匹 【答えの先に待つもの】（後書き）

後日、もしかしたらエピローグとか書くかもしれません
後、次回作アンケート第二弾

以下の三つから、疾風に行つて欲しい世界を選んでください……
共通項は、いずれもACに乗ったり作中の機体に乗ったりする事です。

- 選択肢 -

A：機動戦艦ナデシコ

B：機獣創世記ゾイド・ジェネシス

C：その他（大乱闘 スーパーロボット大戦）

なお、作者が異常な毒電波に犯された場合上のどれにも当てはまらない愚行をする可能性があります。

その後の話その一 【されど鳥は飛び続ける】（前書き）

短いのをカツカツ入れていきます……電車の中で書いたから気持ち悪い

その後の話その一 【されど鳥は飛び続ける】

オリジナルハイヴの地下深く……桜花作戦が成功に終り、世界が祝賀ムードになっている時だった

爆発した反応炉の破片がのそのそと動きだし、何かかもぞりと出る……赤く、焼けた血が装甲にこびりついたリベリオンだった

「人生最悪な一日だ……まさか、反応炉とアンチプロトンリアクターの爆発に巻き込まれるなんて……」

「殆ど相殺しあって生き残る羽目になった訳だがな……無茶苦茶な奴だよ、お前は。」

G元素を溜め込んだ反応炉と二つのアンチプロトンリアクターの連鎖爆発……本当なら魂も残さずに消し飛ぶ爆発に彼等は生き残った
幸い、リベリオンのリアクターはラナが突貫の際に切った為、誘爆は免れた

「おお……空が綺麗だ。」

「爆発に耐え切れなかったハイヴが内側から吹き飛んだみたいだな……空まで一直線だ。」

「久しぶりに飛びますかっ」

空まで続く一直線の道になったハイヴを、僅かな取っ掛かりを頼りに上るリベリオン……彼等の姿は、しぶとく生き残り、力強く飛ぶ渡り鳥のようであった

しかし、疾風の脚は少しずつ……まるで濁り水をろ過し、清水にするように薄まっていた

『成る程、良い戦士だ……出来れば、違う形で会いたかったぞ。』

「ゆっくり、ゆっくりと眠り下さい……先生。」

リンクス戦争時代、最強のリンクスとして名を馳せた男が居た……
『ベルリオーズ』……レイレナード最強のリンクスであり、黒き
AALIEYAHを駆り戦場を飛び回る姿は未だに語り継がれている
そのベルリオーズの愛機『シュープリス』は、オツツダルヴァの
愛機『ステイシス』の持つアサルトライフルに貫かれ、その命の灯
を静かに消した

「感傷に浸ってる場合では……うわっ?!」

シュープリスを見下ろすステイシスを突如、大きな地震を襲う……
…そして、地面からいきなり苛電粒子の閃光が大穴を開け、小さな
何かが飛び出してくる……多分、保険に付いていたの脱出用シャト
ルだろう

「迷惑な連中だ……少しは周りの迷惑をおおおお?!?!」

そして、その後ハイヴの地上構造物……モニュメントを破壊し莫
大なエネルギーの光が柱の様に立ち上る
それに巻き込まれたステイシスは、吹き飛ばされる……勿論、小型
のBEATや他の国の部隊を巻き込んでいるが

『ただ今、桜花作戦の成功が横浜基地より入電……暇なら動けない者を連れて帰還してください。』

「く……最近、私の地位と言つか尊厳が薄れているよな……」

とりあえず、ハイヴだった大穴に近づき中を覗くステイシス……中の様子は真っ黒に染まり、BEATの死体も消し炭になったようだ……そんな中、ブースト炎の光と音が聞こえる……小さな悪魔『リベリオン』だ

『おお……楽しい……』

「回線をオープンにしたまま悦に浸るな……帰るぞ、こつち来い。」

『あれ？ ステイシス水没してなかったんだ……空綺麗だな。』

リベリオンから聞こえる疾風の脳天気な発言に、ため息を尽きつつリベリオンに肩をかすオツツダルヴァのステイシス

「水没も何も、ここは内陸部だろうが……たく。」

『しのびねえ。』

「かまわんよ……」

ステイシスのシステムを巡航モードに変更し、BIGBOXに向けて飛び立つステイシスとリベリオン……夕焼け空に、二匹の鳥が飛んでいるようだった

その後の話その一 【されど鳥は飛び続ける】（後書き）

ステイシスはやっぱり最高の潜力ですよね……悪態付きつつ、仲間を助けるのがオツツダルヴァでテルミドールって男だと思えます。

その後の話その二 【彼の見た夢】（前書き）

まさかの展開……戦争を求めていた人はもう少し待ってね。

その後の話その二 【彼の見た夢】

無事、BIGBOXに帰還した二人は祝賀ムードの中を突っ切っていた

純粋な祝い事で盛り上がる事に二人共慣れていないのだ
屋上に出て、風に当たる……夕焼け空がとても綺麗だ

「残念だったな……見送りが私で。」

「いやいや、団長自ら見送りとか案外豪華だから……さて、時間か。」

疾風はもう、下半身が光の粒子になり消えていく……勢いが増し、上半身の胸の辺りまで消えていく

「売れっ子は辛いな……人類に黄金の時代を……」

「ああ、人類に……黄金の時代を……」

片手を上げ、去り際の軽く挨拶するような感じで彼はこの世界から……この戦場から退場した

何故なら、白銀武を縛る楔が無くなり消えたように、彼を縛る楔も無くなり居る意味が無くなったからだ

「そろそろ行きましようか……」

「はい、博士……」

国連軍極東支部横浜基地の外に自生する数少ない桜の木の下、慰霊碑を眺めていた『香月 夕呼』と『社 霞』は基地に帰ろうと足を伸ばすが、社が急に立ち止まり、振り返る

「どうしたのよ……え？」

「えっと……ちわ。」

「生きてたんですか……特大G弾が爆発した中を……」

何となく薄いが、桜の木の下に疾風が居た……困り果てた顔だが、どこか嬉しそうでもある

「アンタ……嘘、人類が考える最高クラスの爆弾でなんで……」

「ベクトルが違うと言いますか……まあ、んな事より今は最後の挨拶回りです。」

ばつが悪そうに後頭部をかく疾風……彼は最後に別れを告げに来たと言うと夕呼は態度を変える

「アンタも行くのね……孤島先生の元に。」

「そんな感じかな……じゃあね、夕呼姉に社。」

「いえ……」

「……？」

別れを告げ後ろを向いた疾風は、社の不意の否定に振り返り、首を傾げる

「またね……です。」

「またね……か、運が良ければ会えるかもな？」

触れられない手で社の頭を撫で、疾風は今度こそこの世界から消える……その瞬間、慰霊碑に刻まれた疾風の苗字が崩れ落ち、慰霊碑に残った名前は、疾風だけになった

こうして、渡り鳥は次の戦場に向け飛び立った

自分と言う存在が消え、次に目が覚めたら真っ白な空間で目が覚めた……シルクのように滑らかだが、羽毛のように柔らかく温かい布団で寝かされていたらしい

「お目覚めか？ 最強の傭兵。」

「……っ?!」

不意に自分とつり二つの人物が現れた……コイツ、まさか

「ご察しの通り、俺はお前だった者だ……まあ、あの世界で粉々に

お前が砕いてくれたせいで別存在になったがな。」

「全く、色々大変だったんですよ？」

「ゴメンな…マキナ。」

簡単な解説を聞いていると、またもやどこからともなく謎の人物……いや、少女が現れた……まさか、これがご都合主義でこんがらがった物語を終わらせる『エクス・デウス・マキナ』か？

「無駄話は置いていて、この三つのカードの内、一枚を引いて下さい……そのカードに書かれた行き先が貴方の次の世界です。」

少女の手には、右から赤と黒と黄色のカードが持たれていた……どうせ

「……拒否権ないんだろうな……よっ！」

断つても面倒そうだから仕方なく、左端のカードを引く……そこには、アルファベットの太文字で【AF】と書かれていた

「おめでとございますっ！ 孤島様は見事、『その後の世界』行のカードを手に入れましたあゝ」

「は……はあ?!」

少女は、商店街のくじ引きで使いそうな大きなベルを鳴らしながらくす玉を引いて俺を称賛？した……いや、突っ込むのやめよう……なんか疲れた

「ではもふ太郎達……お願いしますっ！」

「えっ?! ナニコレ……あ、アッーっ?!」

白い空間の床がたわんだと思ったら、いきなり白い毛並みのいぬみたいな生き物……『首輪付きけもの』になり、俺に殺到した……けものにたかられ、呼吸出来なくなった俺は、そのまま意識を手放した……

「ん、ふあゝつて、マジかよ……」

目が覚めたら、俺は薄暗い飛行機……いや、輸送機の中で目が覚めた

そして、手元の端末をいくらか弄って出て来たのは見慣れたミッシヨンの確認画面……そこには『テロリスト抹殺』と書かれた内容が……

「これは、面倒な事に……なった。」

とりあえず、二度寝しとく事にした……なんでも中々本格的な物で、テロリストのターゲットである『タケル シロガネ』に近付いて待ち伏せするらしい

依頼保証者のところに、『RA』と『RA代表取締役：ジャック・O』と書かれていた……ああ、面倒な事になった

その後の話その二 【彼の見た夢】（後書き）

まさかの弱王とレイヴンズ・アーク……本当は私立レイヴンズ・ネスト学園とか良かったけど、バッシングが怖くて無理だった

その三 人の夢と書いて傳いと読む（前書き）

たまたま、555文字で区切れたし、綺麗に終わったので更新
……短すぎ？

その三 人の夢と書いて儂いと読む

白凌柊大学付属高校……俺があの時持っていたのは、偏差値高めの進学校だなあ程度の認識だった

大学は、理系で特待を狙うつもりで頑張っていた他に狙う場所は無かったが

「にしてもまあ、あまり行きたくない場所なのは変わりないか……たりい」

当たり前なんぞ引かず、そのままハズレでも引いて次の戦場か消滅でもしたかったなとぼやきつつ、転校先の高校の制服が間に合わなかった為、元居た高校の黒い学ランに身を包む彼は歩き出す……いくら依頼内容の都合上、いつでも監視でなければいけないのは分かるが、わざわざ学校に行くかと不満を隠さずに校舎に入った

「それじゃ、転校生……入ってきたなs「遅れてスイマセンっ！」あらっ？」

香月夕呼は、皮肉やら朝から面倒な仕事をする羽目になった原因を苛めるつもりで、わざと遅刻しているにもかかわらず転校生の紹介をしようとした……しかし、転校生は間に合ってしまったようだ……昔、手放してしまった宝物の面影を残して

「ヨーロッパのミッション（依頼的意味合いで）スクールから転校

してきた、『弧島 疾風』です。よろしくお願いしますっ!!」

いきなり駆け足で入ってきた青年は、かなり爽快な挨拶をしたのだ……それはもう、一級役者ものの挨拶で、皆反応に遅れたのだ……疾風は、どうしたものかと考えていた

その四 少しマシな彼の過去（前書き）

正直、こっからナデシコに持っていくの楽だよね……学生傭兵設
定って地味にグロいよね……少年兵みたいで

その四 少しマシな彼の過去

基本的に不干渉万歳主義の疾風は、ランキング試合以外はのんびりとしていた

ジャックから私的な端末にきたメールには、『休む事を優先に考える』と書いてあり、テロリストに関してはレイヴンズ・アークの調査部が動いているらしいし、俺の仕事は未だに無い

「にしても、球技大会ね……」

「孤島はどうするんだよ？ やっぱりバスケか？」

「俺、ドリブル出来ないからパス……あ、野球ならいけるぜ。」

「よっしゃ、一人確保っ！」

んな事より、今の懸念材料は『球技大会』だった……野球にバスケに水球など、無駄に種類あるな……アークお抱えの学園でもせいぜい2種類だったのにな

「はい、アンタ達席につきなさい。さっき、臨時職員会議で決まった事を言うから黙って聞きなさい。」

どうやら、普段より遅い5分遅れだったのは、臨時職員会議があったかららしい……どうせ、かつたるい内容だろうに我らが夕呼先生の目が爛々に輝いていた

「サバゲーよ……サバイバルゲームをやるわっ……」

その時皆に、電流が走る……っ！！
唯我独尊部長とか、そんなレベルじゃない……早く、コイツなんとかしないである

「先生えくまさか、BB弾は球だから球技とかマナーは良くないとかでごり押したんですか??」

一人の男子が、気がついた点を夕呼に指摘する…夕呼はおもむろに、チヨークを持ち、それを『打ち出す』

「……ふんっ！」

「ぶへらあ?!」

「……中里おー……!!」

モブキャラ中里……チヨークの質量+手のスナップ+腕の振り下ろす速度=死の法則により死す……仲の良い連中が介抱しているから問題ないだろう

「詳しくは、帰りのホームルームの際にプリントを配って説明するわ。以上」

「……これ、なんて無茶振り?」

隣に座る女子……茜が同意の頷きをしているから、多分一般的感性なのだろう

まあ、本気出さないように頑張ってみるかと思を上げ、次の授業の準備をしに行く……隣のクラスは相変わらず五月蠅い

球技大会の予定プリントを眺めながら、疾風は帰路につく為
に校門に歩を進めていた

「かったりい……なんで日本に来てまでこんな事をしなきゃいけ
ないんだよ……」

レイヴンとして活動していると、どうしても人型機動兵器ACか
ら降りて活動しなくてはならない時がどうしても出て来る

故に、一流のレイヴンは単独の戦闘力も高いのだ……サバゲーな
ら命の取り合っじゃないし良いと思っ、プリントを畳んで鞆にしまっ
校門に差し掛かると疾風に声がかかる

「ようやく見つけたよおハヤテちゃんっ!!」

「帰って来たのに挨拶も無しとはひでえじゃねえかよっ!!」

鮮やかに赤い少女と卵の殻みたい髪型をした少年がいた……片方
はターゲットの『タケル シロガネ』だが、もう片方は確か幼なじ
みの『スミカ カスミ』か？

「……」

「おい、無視すんなよ。」

「き、きつと驚いてるんだよっ!」

……なんかメンドクセエ事になつたな
彼等には悪いが、俺は彼等との面識は無い……本当に思い出せない
し、なんか思いたしたくもない

「きつと人違いだろう……じゃ。」

「ちょ、純夏っ！」

「任せてっ！！」

面倒臭いし、面識は嫌いなのでスルーしたく事を進めようとする
が……ダメらしい
なんでコイツらこんなに絡むんだよ……糞面倒くせえ

「なあ、俺帰って課題やりたいんだけど？」

「むっふっふっ……そんな風に息をするように嘘をついていると、
その内友達居なくなっちゃうよ？」

いない者が居なくなるって滑稽な話だなと呟きつつ、辺りを見る
……幸い、下校がだいたい済んでいる為か生徒はおらず、学校に居
る暇人とここに居る暇人二人だけだ

腰のポーチから小さい筒城の物を取り出し、それに刺さっている
ピンを引き抜き、自分と武の間に放り投げる

「アデュー……幸せになんなお二人さん。」

「……え？」

局所的な爆煙と閃光が突如立ち込め、二人の視界を潰し、疾風は

忘却の彼方にぶん投げ、ミニガンで粉碎した記憶の二人から遁走した
置いて行かれた二人は、ただポカンとした後、二人で不適に笑い
出す

「まさか、三年前にブッチしたアイツにまた会えるなんてな……あの
姉妹の冗談で死にかけた俺の怨みを今こそ……」

「あれは……意外だったね……女の子ホイホイのタケルちゃんを使
った巧妙な犯行だったよ。」

財閥令嬢なのに、やたらはっちゃけた姉妹を思い出し、ため息を
つく二人……疾風と彼女達がどんな関係かは知らないが、疾風の話
をする二人は武の話する純夏のような表情だったと言っておこう

「ふう……なんか、面倒な事になったな。」

白稜柊から走って来た疾風は、息一つ乱さずに麓まで来ていた……
彼には、二年前から前の記憶がない
今の彼は完全に『レイヴンの疾風』なのだ……ランク・イレギュ
ラー、企業や自分が所属するレイヴンズ・アークにすら危険視され
ている

その地位を僅か三年で確立し、浴びた返り血は計り知れない

「にしても、マジで『更地』だな……」

周りは見事に更地だった……ターゲット護衛の為に柵町付近に部屋を借りたが、狙撃銃が必要かとメールで手配しておく

見事に更地になった町を見ながら歩き回る疾風……『ここ』の記憶は持っていないが、『ナニカ』途方もない懐かしさで歩を進める武の家もとい御剣御殿にいたら、純夏の家以外にももう一つ家があるのを見つける……この世界の自分はいつ捨てたか知らないが、それは紛れも無く自分の家だった

それを見つけて、疾風は感慨深そうに見つめる……

「まだあつたんだな……てっきり潰されていたと思っていたんだがな。」

「潰す訳無かるう……そなたの家だからなって、潰すなんて酷い言い方ではないかっ!!」

ノリツツコミ出来るなんて、最近の財閥令嬢は凄いなと思う疾風

……

この惨状の下手人らしき少女は、構わずに話を続ける

「武を狙うと見せ掛けて、主が本命と言う罠……さあ、あの時の約束を果たしてもらおうぞ?」

「約……束……?」

二重の意味(この世界の疾風、中の人の疾風が)身に覚えが無いのに、頭が割れそうな位痛い……しかし、そんな事は微塵も見せずに見る

「悪いんだけど……まず、アンタを俺は知らない。それに、約束って言われても、俺は三年前から記憶が無い。」

冷静に考えると、かなり不便（不幸）な出自に気がする……綺麗に三年前、ヨーロッパの企業が支援している病院、『アスピナ病院』で目覚めたところしか思い出せ無い……その先生の一言

【おめでとう、君は地球始めてIFSに完全適合した人間だ……流石はコジマの系譜だな。】

やたら満足そうな顔だったのは覚えている……そこからは、傭兵統括機構『レイヴンズ・アーク』お抱えの学園、『私立レイヴンズ・ネスト学園』で傭兵について叩き込まれていた

そこは、疾風にとって生き死にの感覚と記憶への興味を殺すには十分な場所だったとだけ言っておこう

下手人……いや、紫のポニーテールの少女は、わなわなと震えだし、一歩後ずさる

「覚えて……ない？」

「ああ、旅客機の事故に巻き込まれたらしい……ヨーロッパに居る両親に合いに行っただがな。まあ、会えたから良いがな。」

両親に会えたのは紛れも無い事実……しかし、彼が死人同然の状態から蘇生した代償はあまりにも大きく、両親に会ったという実感も記憶も『死んだ』

それからは、研究を幾つか手伝っていた……最も、学園に入るまでの極短い期間だったが

「なら……私を……御剣 冥夜も、私とした約束も覚えてないのかっ……！」

「???…そうなるな、悪いがここに来たのはただの興味なんだ…
…じゃ、学校で。」

本人は、至って普通に言っているが彼女と雄理の間には、かなりの温度差があったのは、明確だった

疾風の拠点から監視していた（疾風の鞆に盗聴器付き）オペレーター…：ファイオナ・イエルネフェルトは、また女かと呆れていた…：学園にいた時から、疾風に運命がどうだの言って迫った女性は多い現に疾風とファイオナが組んでいるのも、疾風の父とファイオナの父が仲が良く、記憶が飛んだ三年前から世話になっていたからであり、それが無ければとぞっとするなとファイオナは思う

「ホント…：ぞっとしないわ。」

『今から帰還する、後ろ監視を頼む。』

「は、はいっ!!」

無線を介して聞こえる彼の声…：なんかそれを聞いていると、自分も高校に生きたいなと思うファイオナだった…：まあ、ファイオナの年齢はリアル高校生だから平気だろが、自分を抑えていられる自信が無いから…：

狙撃ライフルを構え、疾風の後ろを狙う…：彼を、『無垢なる翼』
比喻される優しいレイヴンを守る為にライフルの引き金に指をかける

その四 少しマシな彼の過去（後書き）

うん、かなり無理矢理なのは自覚している……間違っても火星
出身『じゃないから大丈夫

ボゾンジャンプはしないよ……ボゾンジャンプ『はっ！！

その五 修羅場（前書き）

もはや投げやりに慣れかけて来た昨今

いかんいかんと思いつつ、やっぱり投げやりになってしまいます…

…orz

その五 修羅場

修羅場とは、案外すぐに来るんだな……金属バットを構えながら考えていた

結局、上手い具合に言うか大人の汚い事情でサバゲーには参加できなかった

「孤島ああ！！ぶっ放せえ！！」

「るせえ！！んな声出さなくても聞こえるっつのっ！！」

依頼的には、白銀武の行動を観察できるサバゲーに参加した方がいいが、『レイヴン』が戦闘するのは例えお遊びでも国際問題らしい……あれだろうか？調子のもつて木星蜥蜴の出て来る岩を破壊したのがいけなかったのだろうか？

それとも、ムカついてカラサワMark?を乱射し、岩に見える木星らしきナニカを攻撃したのがいけなかったのか？

ヨーロッパ某所…レイヴンズアーク

「このような条件ですが……よろしいでしょうか？」

「却下だ……ランクC以下のレイヴンならまだしも、ランク・イレギュラーを動かすには、誠意どころか馬鹿にしてるしか思えがね？」

ジャック・Oの執務室にいるのは、ある依頼を持ち込みに来た『

ネリガル重工』と言う最近延びて来た企業の『プロスペクター』という人物だ

「しかし、ネリガルとしては彼のような優秀な人材を腐らせるの貴方も不本意でしょう？」

「『あれ』を『優秀』と言っている時点で、ネリガルは腐っていると見た…… よろしい、契約の件は好きにするといい……だが」

疲れ果てた様子でジャック・Oは立ち上がり、窓まで歩き外を見る……外には、未来のレイヴン候補や、優秀なレイヴンの子息が無邪気に遊んでいた

「彼を起用した場合、『いかなる不利益』が生じても、我々は『一切の責任』を負いませんのでご注意を……」

こちらを不適な笑みで見るジャック・Oに、ネリガル重工のプロデューサー……と言うか謎の存在のプロスペクターは戦慄を隠せないでいた

「社長と十分な検討をした上での依頼です……問題なく依頼をさせて貰います。」

「ああ……もし彼を使うなら……」

冷や汗が止まらないプロスペクターを見て愉快なのか、ジャック・Oは一つ提案をする
甘く、官能的な毒を秘めた提案を……

「彼を使うなら、前金はいらない……ただ、依頼の成功失敗は問わ

ず、それなりの金額を支払ってほしい。」

「そういうことなら、社長も大賛成でしょう……ありがとうございます。」

頭を下げ、執務室を出ていくプロスペクタ……それを見届けたジヤック・Oは、ある人物に電話をかける

「ああ……私だ、例の企業だがもう終わりだろう……ああ、『彼』を長期で雇ったからな……残念だが、混乱の少ない今の内に連絡を思つてな……じゃ。」

レイヴンズアークには、あるジnkクスが存在する……それは、『イレギュラーを長期雇用した企業は倒産する』である

弾薬費の意味合いの時もあれば、風評的意味合いの時もある

例外があるとすれば、それら全てを握り潰す事の出来る日本の『御剣財閥』くらいだろう……

試合結果は優勝……元々体育会系の多いクラス故に、男女の平均体力に余り差が見られなかったのが大きな勝因だろう

俺の戦果と言えば、大きなフライを二回取り、その内一回をキャッチャーにダイレクトに返してダブルプレイしてやったくらいだろう……バッティング？ ああ、ピッチャーにダイレクトアタックしかなかったな

まさか、ピッチャーがやられて乱闘とか希有な例ではないかと考えながら俺はアジトに帰宅していた

「優勝……か、人に誇れる勝利って久しぶりかもしれない……」

レイヴンとして生きて来た以上、何人も殺して来た……紛争地帯の生身のテロリストをマシンガンで虫けらのように殺したり、廃棄された工場に呼び出され、ブレード使いになます切りにされかけたりもした

しかし、どれも人に笑顔で誇れる勝利とは言えなかった……人殺しは誇れない、ある人物の言葉が酷く耳に突き刺さる
深く考えていた為か、後ろが疎かになっていた……

「……がつ?!」

背後から誰かに殴られ、そのまま気絶してしまった……脳みそ揺さぶれて、平気な人間とかいるのかよとか考えつつ、深いまどろみに落ちていった

その五 修羅場（後書き）

言い訳するなら、あえて完結した話にせず、連続性を持たせられないかと言う実験

いくらよく殺して来たレイヴンとはいえ、長考中に攻撃されたら無力ですよ……多分

この話から、ナデシコに持っていく間でのフラグ蒔き……主人公はエステバリスに乗るのかはたして……ネクストまんまはありません……エステバリスに1〜2mくらいの余裕がないカタパルトから10〜12m級のネクストが出てこれる筈がありません

幻想郷に常識は通じない？ 最低限のルールは守らないとダメでしょう。

……って訳で、活動報告に機体選択のアンケートをのせるので、奇特な方は答えてください

狭間の話

英雄と殺戮者が消えた世界は、彼等が居た時より更に混沌と化していた

ORCA旅団長『マクシミアン・テルミドル』は、このような声明を出した

【Sorry you the nobles】

”さようなら、愚か者達”……それは、明らかな世界への死刑宣告だった

『く、来るなあっ?!』

『『『ぐああああ?!?!?!?』』』

南アメリカ……米軍最強とされるラプターが、無惨に破壊されていた

銀色のAALEIAH『スプリットムーン』が、絶対的推力で接敵、敵をナマス切りにしていく……逃げた敵も、マシンガンで撃ち落とす

「……殲滅……」

スプリットムーンは、襲撃した基地を後にした……基地に居た者に生存者こそあるが、戦う力はもはや皆無だった

ORCAにより、人類は刻一刻を争うほど戦力を奪われていた……いくら兵力を集めようと、音速からの弾丸の嵐に吞まれ、ある時は閃光に機体を貫かれる
クイツク・ブーストを再現する術を持っていても、回避した先にも弾丸が待っていた

屈辱的なのは、人類が苦汁を飲まされ続けたBETAを片手間に人類は圧倒されているのだ

この世界には、空がある……星がある……だが、人は戦火でその尊いものを焼き払うだろう

ORCAは、それらを人類から守る為に、『戦う為の力』を徹底的に破壊し尽くした、各国の軍事力、危険思想……全てを、全てを破壊し尽くした

その六 拉致同然に連れて来られたけど、これって犯罪じゃないと犯罪者の俺が
さくつとこれが終わらせ、さくつとナデシコに行きたいと思います

その六 拉致同然に連れて来られたけど、これって犯罪じゃないと犯罪者の俺が

意味不明な夢のせいで、頭がこれ異常ない位に覚醒して目が覚める……あつつ、頭痛が痛い……間違えた、頭が痛い

「何処だしここ……喧嘩売ってんのか？」

制服の下に隠し持っていた筈の火器（主に、デリンジャーなどの小型火器）が、制服ごと引きはがされていた……これは虐めだろうか？

幸い、飛行機事故で引きちぎれた右足の代わりに付いている義足の中に隠してあった火器は平気のようだ……そこ、後付け設定乙とかわない

俺は、ユカタ（浴衣だったかな？）を着て、和風の部屋に寝かされていた

頭が、どうしてこうなったと自問自答を繰り返している内に、誰かが入ってくる……金髪にいかにも訓練を積んだような風体のような男性……確か、『ウォルケン』……だったかな？ 彼が入って来た

「む？ 起きたのかね？」

「あんたか……犯人は？」

頭をぶん殴られ、身ぐるみ引きはがされて、しかもまだ生きているという赤っ恥をかかせてくれた犯人を見つけ出してマウントポイントでタコ殴りにしてやりたい

「いや、君を気絶させて連れて来たは、御剣のこのメイドのよう

だが……そんな顔をするな。折角の旅行が台なしになるぞ？」

「は？……旅行??？」

意味がわからない……この後、様子を見に来た三人の『メイド』が『勝手』に『自供』してくれたので、三人には、頭蓋骨が砕けるに定評がある拳をプレゼントしてあげた

三人のm……面倒だ、三馬鹿の話を要約すると、この事件の犯人は、御剣財閥のじゃじゃ馬姉妹らしい

何故か、俺はこの二人に気に入られたようで、今回の温泉に俺を誘いたかったが、隣のクラスだし、中々誘えなかったらしい

妹の方ならまだしも、面識が無い姉の方まで気に入るのか……意味不明過ぎたので聞いてみたら

「「内緒」」

何故か、無性に殴りたくなつたが、何とか堪えたが、我慢できないことが一つあった……それは

「とりあえず、まともな説明を求めます……香月先生？」

「私に白羽の矢を立てますか……いいわ。ほら、外野は散った散った……まりもは残っていいわ。」

「わかったわ。」

俺が寝ていた部屋には、香月夕呼氏と神宮寺まりも氏が残り、後の残りは一部後腐れ満点だったが出て行った

「あんた……疾風よね？」

「ええ……正真正銘、孤島疾風ですが？ 三年前に飛行機事故で頭パーになりましたが、運よく生還しました。」

あんた、俺の担任だろう突っ込みながら答える……アスピナでは、マジで奇跡的な生還だと喜んでいた……メタトロンの奇跡だとかうるさかったかな

「そう……夕呼、もしかしたら。」

「十中八九そうでしょうね……疾風、あんた……記憶喪失なのよ……！」

「へえ……で、だからなんですか？」

「へっ?!」

面を喰らったような表情の二人だが、知った事じゃ無い……多分、彼女らのしる『疾風』は、飛行機事故の時に死んだ

言わば、俺は死んだ彼の死体を間借りしてる感じに過ぎない

「貴女方が、俺を……疾風をどう思っているか知りませんが、俺の事を言っているなら、そいつは三年前の飛行機事故……木星蜥蜴の襲撃時に死にました。」

今頃、フィオナ達は大変な状況だろう……いきなり意識が消えて、こんな山奥に俺が拉致られたんだ
すぐに無事を知らせねばいけない

「それでは、失礼します……仕事があるんで。」

「あなたの仕事って、あんな大量のデリンジャーとかなんやらを必要とする仕事なのかしら？」

「少なくとも、そうです。後は勝手にご想像にお任せしますが？」

うるさい人だなと思いつつ立ち上がる……足の縄は人が来る前に切らせてもらった

驚いた様子だが、無礼な連中に礼儀を尽くすほど、俺は出来た人間じゃ無い

「あなた……少し調べさせてもらったわ。左足が義足なのね……しかも、明らかなオーバーテクノロジー、貴方のお父さんが生きていたら、作られてそうだけど。」

「では、失礼します。」

聞く気は無い……左足に仕込んだ通信端末を取り出し、連絡をする
ここに来てから散々だな、俺はギャグとラブコメと平和が苦手なの

「夕う呼お……疾風がくれたあ……」

「落ち着きなさい……あいつ、体をかなり弄られていたから、そのショックで記憶飛んでるだけよ。」

この星を度々襲う木星蜥蜴の襲撃された飛行機に乗っていたらう彼（時期的な推測であり、いきなり飛び出した彼の行方を知る者はいない）が、乗客生存者ゼロの事故で生きているのがありえないのだが……

「左足の義足……人間同様の弾力に反射だったけど、携帯で写真を撮ったらこの様よ……全くなにも写っていない。」

別に、疾風の生足はあはあ……というわけでは無いが、多分孤島

父の作品だろうと思ひ、記念に写真を撮ったら、写ったのは砂嵐だけ

これは、疾風の義足には特殊な素子を練り込まれた装甲……SSセルフ・ソポーター

グ・アーマ

Aの応用で作られた義足で、SSAには、機械的な方法で写真や映像記録を撮ったら、その撮る機械にSSAの出す特殊な電磁波が干渉して、記録を破壊するのだが、そんな物を夕呼達を知るはずも無い……しかも、御剣財閥も知らないだろう……何せ、火星の古代文明の技術なのだから

「完全に嫌われたわね……人の嫌い方はそっくりなのね。」

「夕呼……まったく、確かに先生は人見知りだけど、あそこまで酷くは無かったわよ?」

かつての恩師に思いを馳せながら、二人は現実逃避していた

帰り道、最近変な夢を見る事を思い出した

【私は……破壊する為に……作られた】

聞き慣れないフレーズ、だけど、凄く親近感を感じるフレーズ
起きた後に、体の……特に左足から強く感じる親近感

何となく感じる懐かしさ……よくわからないが、『彼女』と『昔』
、何処かであつた気がする

「まあ、破壊すると言うより、俺の場合好き勝手してたらぶっ壊れ
ちやつた感じが……」

そういえば、林檎を食べる夢が増えたなと思つ真夜中……浴衣姿
の疾風は、開けた胸で女性達を釘付けにしながら、温泉街を歩いて
いた

その六 拉致同然に連れて来られたけど、これって犯罪じゃないと犯罪者の俺が

小島監督の作品をやっている人は、結構解るネタを振り時きました……もはや、ネタバレしてくらい時きました

これを読み解き、未来に何が起こるか予知するかしないかは、貴方次第です

その七 目覚めるとスプラッター(前書き)

今回、一部『残虐』描写が混じっているため、その件で叩かれても、作者はスルーします。

その七 目覚めるとスプラッタ

日常を謳歌（笑）している俺だが、ちゃんと真面目に働いているほら、今だつてばれないようにターゲットを監視している……あ

「やっべ、凄く良い食いつきだな……やり過ぎたか？」

ファーストフード店で、ゲームセンターで珍しく、一人で遊んでいたから監視していた……今回の依頼、御剣財閥が依頼したというのが表向きだが、実際は、GAの依頼した『離反した情報工作の社員の抹殺』がメインだ……世知辛いけど、お金つて大事だよな

黒いワゴン車に乗せられ、ターゲットは……タケル シロガネは、拉致られていった

疾風は、携帯を取り出し、あるところに連絡を入れる

「フィオナか、ターゲットに獲物が食らい付いた。今から、追跡を始める……サポートを頼む。」

車のナンバーや、相手の特徴を口頭で伝え、駆け出す……ファーストフード店の影に停めてあったバイク……愛車

『ホンダ DN-01』に跨がり、走り出す

誘ってるんじゃないかと言うぐらい手薄な警備……景気の煽りを受けて潰れた、町外れの廃工場にたどり着いた

外には、約3名が見張りを行っているが、そんなに気にする必要

はないだろう

疾風は、物陰から三名がそれぞれバラバラになるタイミングを計り、その内の近づき……

「ぐげえ……」

ドサツ……首を強引に抜切り、殺害する

受けた依頼は、『裏切り者の抹殺』だ……何を何故裏切ったか知らないが、興味は無い

護衛？嘘に決まってるだろ……誰かを守るくらいなら、監視ついでにサクッと殺すのが楽だし

「まずは一人……後は、一人残してシラミ潰しに殺していきますかね。」

まるで、つまらないスポーツ中継を見るように紡いだ言葉は、殺意に凝り固まった、殺戮者の言葉だった

彼の歩いた道には、死体の山しか転がっていない……彼の歩いた道は、血の臭いが充満する、死の道であった

片手に、ナイフを持ち、ニッコリと笑う姿は、もはや死神……エジプトの神話に出て来る『アヌビス』のように狡猾だった

「う……ぐあ……」

「ラスト一人……くつだらねえ、死人に口無し、なんて皮肉な言葉なんだろ。」

彼が殺した人間には、共通点がある……それは、喉笛を切り裂いてから心臓をえぐり出すという殺害方法の共通点だが

この事件の首謀者は、絶賛餌を尋問中のようだ……五月蠅いから、足をぱちったハンドガンで撃ち抜き、続けざまに両肩を破壊する

「ぐ……貴様……」

「あんた、チャックだろう？チャック・ザウワー……元G A社の特殊工作課に勤めていた社員。」

無言の肯定……成る程、当たりらしい

左足の付け根に付けたホルスターから、細い短剣……ステイレットを取り出す

「言っておくが、私を拷問で口を割ろうなんてっ?!」

そのステイレットは投げられ、撃ち抜かれた足の付け根にえぐる様に食い込む

「安心してくれ……自供はいらない、ただ依頼されたのはあんたの『抹殺』なんだ……せいぜい、良い声で鳴いてくれよ?? フフフ

……」

拷問じみた『遊び』は続く……疾風は、日頃のストレスを晴らすように、新しいおもちゃを与えられた子供の様にチャック・ザウワーの体を穴だらけにしていく

巧みに急所を外し、気絶できないようにじわじわとステイレット

を突き立てていく……その姿は、夏休みに虫の標本を作る少年のようであった

チャックからは、仕切りに謝っている、目的を話すからやめてくれと言う台詞が聞こえるが、彼は一片も気にする事なくステイレットをただ突き立てていく

「いっ、うっ！……言うがら」

「なんだよ……もう崩れたんだ。」

自供しようとしたチャックの脳天に、ステイレットを突き立て、息の根を止める

チャックは、下手な惨殺死体より解体されていた……内臓は引きずり出され、もう今まで生きていた事の方が信じられない

「さて……おい、目が覚めてるんだろう？ 今から後始末する連中が来るから、潔く謝罪の言葉を受け取って帰れ……こっから先は、お前みたいなのはお断りの領域だ。」

「……あ、ああ……」

目の前で、人間の解体シヨーを見させられた白銀 武は、放心していた……普通に生きていたら、とてもじゃないが見られる物では無く、彼の中の目覚めるはずの無い記憶が、蓋を開けて手招きをしているからだ

多分、それに気がつく機会は何度かあった……一回目は、疾風に閃光弾をかまされた時

二回目は、この惨殺死体を見た瞬間……因果の果てに置いて来た筈の、悲しい記憶、目の前の彼が、ここまで歪んでしまった原因……『ループ』は、『孤島疾風』と『香月疾風』の二人の同一存在を歪

め、歪んだまま融合した彼等は、人類皆が持つが、それに注視しないまま過ごしている究極の矛盾を孕んでいた……

【殺戮による進化願望】

彼は、人類にんげんが幾度と経験した戦争を固めたような存在

それをより、ベクトルが違う二つの絶望的状况と環境が彼を【戦争に愛されるもの】に変えた……破壊する為の破壊

幾度と無く呟いていた、親友の言葉をたった今、白銀 武は思い出していた

「あばよ……俺を呼んでいる奴らがいるんだ。」

「待てっ！！ 行くなよ、おいっ！ 皆はっ？！ 冥夜とか悠陽とか、お前との再開を楽しみにしていた連中はどうすんだよっ！」

今逃せば、彼は二度と自分達の前には現れない……そんな気がしている武は、必死で止めようとする

望みを受け止めたのか、踵を返して疾風はこちらに振り返る

「知らないな……それに、ここにいるのは、だだの疾風……しがな
い普通の殺し屋だよ。」

しかし、彼の目は、以前の様に……あの世界で見た最後の様に優しい目では無く、あの世界で始めてあった時の様に、鋭く、全てを壊すような狂った目をしていた

「足とか……やめられないのか？」

「当たり前だ……俺は『全部』壊したい、この世にある『戦場の全

て』をな。」

言いたい事を言えたのか、再び外に向けて歩き出す……彼と入れ代わりに、屈強な男性が沢山来て幾つか質問をし、ここで見聞きして事を他者に話さない誓約書を書かされ、最後に本当にすまなかつたと謝罪を念押しされて返された

後日、学校に行ったら、彼は自主退学したそうで、夕呼先生が憂いていた

だが、同時に今までの自分に無かった人生目標が見えてきた

「俺、アイツに追いつきたいんだ……純夏。」

「言うと思ったよ……まったく、タケルちゃんはお人よし過ぎだよ。ハヤテちゃんはプロの人なんだよ？自分の為に努力できないタケルちゃんが、追いつける相手じゃないよ？」

「わかってる……でも、『思い出した』ら、アイツを止めないと大変なことになると思うんだ。」

彼は既に軍のパイロット訓練校への切符を手に行っている
頭こそ平均的だが、これでも別世界では軍でエースを張っていたほどのエースだ

軍事関係の記憶も、勝手が分かれば、筆記試験で生かされた……彼が努力した時間×???

それが『白銀 武』と『疾風』の技量を分ける差の一端を担っている時間差だ

イレギュラーなんて言われる程の、気が遠くなるような時間を生き、戦場を生きていたアイツに追いつくには、自分も戦場に行くしかない。そうと分かれば、彼は両親を説得して軍に入るのを希望した……

御剣姉妹も、もはや彼を止められるのは武しかいないと感じたのか、彼の影ながらの後ろ盾となっている

彼は、去り際にある事を言った

【人類なんて、滅びれば良い……】

一つの世界を救う為に戦っていた者の台詞とは思えない……彼は、明らかに『何か』に毒されていた

舞台は、宇宙に移る……地球に火星、木星を巻き込んだ戦争へと

その七 目覚めるとスプラッター（後書き）

不完全燃焼かもしれませんが、今作はコレでメとさせていただきます。

今まで愛読、ありがとうございました……次回からは、別の小説扱いで書き始めようと思います。

もっとも、ただ純粹にナデシコをやるほど、純粹な人間ではないので、自分が書き易いように色々と弄くると思いますが……

次回作のテーマは『ADAって可愛いよね、ならDELPHIも可愛い筈』です。

え？またお前の自己満かって？

所詮、小説なんてそんなもんさ……他者を楽しくさせる事が出来て一流……自分の世界に引き込めて、初めてプロの初級だと思っています。

最も、自分はそうなれると思っていないので、過度な期待は止めてける

では、改めてご愛読、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6589i/>

Muv_Luv for Answer

2010年10月9日03時08分発行